
スーパーロボット大戦NEO O G

月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スーパーロボット大戦NEO OG

【Nコード】

N5740Q

【作者名】

月

【あらすじ】

数度の世界対戦が行われた『戦いの世紀』…。そのなかで、幾多のエネルギー革命を重ねることに成功した人類は恒久的な世界統一機構発足の機運を高めていった。その流れは国家間を越えた平和憲章を締結させ人類は新たな年号『未来世紀』。つかの間の平和を享受している地球にかつてない危機が訪れようとしていた……。

登場作品（前書き）

「さあ始まるぞますよ!」

「いくでがんす」

「フンガー」

「まともに始めなさいよ!」

登場作品

登場作品一覧

ロボット系

絶対無敵ライジンオー
元氣爆発ガンバルガー
熱血最強ゴウザウラー
完全勝利ダイテイオー
黄金勇者ゴルドラン
伝説の勇者ダ・ガーン
勇者警察ジェイデッカー
霸王体系リユニナイト
NG騎士ラムネ&40
獣神ライガー
マシンガーズ
グレートマジンガー
戦国魔神ゴーショーグン
銀河旋風ブライガー
新ゲッターロボ
オリジナル

それ以外
らきすた

けいおん！

リリカルなのはStrikers

蛇さんに許可をもらい出す作品
闘魂勇者ガイ

第一話 怒れる獣神 目覚める氷の巨人（前書き）

「この話は、私達がある少年と少女に出会っザマスよ。」

「さあ！スタートでガンす！」

「フンガー」

「いい加減にしないで！！」

第一話 怒れる獣神 目覚める氷の巨人

北海道・剣の部屋

「う…うーん…ここはどこだ…」

「ギシヤアアア」

妙な声に剣は、驚いた。

「な…なんだお前！」

そこにいたのは、鬼のような化け物だった。

「ギシヤアア」

鬼はさらに剣に近づいてくる。

「くるな化け物！こっちにくるな！」

「ギシヤアア」

鬼はさらに剣に近づいてくる。そして…鬼は急に剣に飛び付いてきた。

「うわああああ！」

そして、物語は現実…

「こら、剣起きんか…！」

「うわああ…ってじいちゃん！？いきなり、叩き起こされた剣。

「へ、ってここ俺の部屋！？」

「なに、寝ぼけとるんじゃ！もう学校へ行く時間じゃ…！早くせんか！」

「ということは、さっきのは夢か…ふうーびつくりした」

じいちゃんに「学校」と言われたので剣は、少しホッとした。

「ホレ、早くせんか！」

「わかったよ！うるさいな」つとその時

ガタガタガタ…

「地震じゃ！剣早く机の下に隠れるんじゃ！」

「言われなくても。わかるワイ！」とつさに机の下に隠れる剣。そ

して、一分もしないうちに揺れが収まった

「ふう〜収まったか。」

「この頃、地震多いよね」

「さてと、学校行くか」

剣が、学校に行く準備をしていると急にじいちゃんがなにかにきずいた。

「なんじゃ、剣、その手のひらにかかっているアザは？」

「え？」

そういつて、剣は手のひらを見た。

「なんだ、このアザは？」

「どれどれ、見せてみる」

そういつて、じいちゃんは俺の手のひらを見た。その瞬間じいちゃんは、急に真剣な顔になって、それから一言も、喋りなかつた。

「どうしたんだよじいちゃん」

「ん？あ…いやなんでもない…」

「ふーん。じゃあ学校に行ってくる」

「あ、剣。あのアザはきにしないでいいぞ」

「ああ、わかつたよ」

つと言つて、剣は家を出た。そして、剣が行つたのを確認して、じいちゃんは何か呟いた。

「まさか…剣が選ばれたとはな…」

牧場付近

「いや〜北海道は、のんびりできるから、いいね〜」

「あんたは、いつもののんびりしてるでしょ！！」

「でも、いつもより、本当にのんびりしてるよこなちゃん」

「こなたさん、の気持ち。何だか分かります〜」

「ダメよ！みゆき！こなたに惑わされちゃ！」

牧場付近に四人の少女が、立っていた。

「ひどいよ！！かがみん！私はそんなにのんびりしていないよ！」

「自分で言うな！！！」

「あ…そっか…かがみんはいつも怒っているから。のんびりの、意味わからないんだあ…」

「なんですって…」

「はーはっはっは、悔しかったら、ここまでおいで…」

「待ちなさい！こなた！！！」

つと言つて、こなたとかがみは走って行った。

「あ…待つて…二人とも…」

「待つて下さい…」

あとの、二人も走り出した。

「どうしたの…遅いよ…かがみん」

「ま…待ちなさい…こなた！！！」

「ヘッヘヘーン」

と、その時こなたの前に自転車が、きた

「こなた！！前！危ない！」

「へ？」

「おわああああ！」

「うわああああ！」

ガッシャーーン

「こなた！！」「こなちゃん！」「こなたさん！」

ちょうど、自転車に乗っている人物がブレーキをかけたが、まにわなかったらしく、こなたと自転車は追突してしまった。

「うわぁ！だ！大丈夫か？あんた！」

自転車に乗っていた人物が声をかけてきた。

「へっへっへっへ」

こなたは、気絶していた。

「ちょっと大丈夫？こなた」

「うん…なんとか…」

こなたは、よれよれとたった。

「ふう…ひどいめにあつたよ。」

「あんたが、ちゃんと前向いて走っていないから悪いんですよ。」

「ところで…そっちの君は、大丈夫？」

つかさが声をかけた。

「あ、俺ならだいじょうぶです。」

「え…でも、ひどいアザがありますよ？」

「え？」

つと言つて、少年は手のひらを見た。

（まただ、何でだ？さっきはなかったのに）

少年が、不思議そうな顔をしたのでかがみは声をかけた。

「ねえ、どうしたの？」

「え？あ…いや大丈夫です！平気ですから…！」

「それなら、いいんだけど…」

「じゃあ、学校があるので失礼しました。」

「あ…ちよつと！」

少年はいつてしました。

「行っちゃった…本当に大丈夫かな？」とつかさが言ったとき、
また、こなたになにかがぶつかった。

「いた…！」

こなたが倒れた。

「こなた…！」

かがみが、駆け寄る。

「ああ…！すみません…！大丈夫ですか…！」

前をみると、高校生ぐらいの身長をした少女がいた。かがみが、ボ
ーッとしてると少女の後ろから少年の声が、聞こえてきた。

「おーい、美夏大丈夫か？」

「あ！吹雪兄ちゃん！」

少女が言うと、吹雪という人物が、近づいてきた。

「たく、もう。ちゃんと前向いて走れって言っただろう！俺が、」
「危ない！」って言わなかったら、ぶつかった女の子、後数メー
トルは、とんでついたぞ！」

「へへへ。ごめんなさい」

「後、数メートルはとんでついた!？」

かがみは、吹雪の発言に驚いた。その発言に気づいたのか、吹雪はかがみ達を見た。

「ああ、美夏は怪力だから全力で走って人にぶつかりと、その人がとんでいつちゃうんだ。」

「」「」「へ……へー」「」

四人はあまりにも、すごい発言を聞いて、なにも言えなかった。

「でも、そっちのロングヘアの女の子、大丈夫だった?怪我してない?」

「へ?あ…大丈夫です。」

「それにしても、あなた達どこの県から来たの?どう見たって、北海道の人じゃないよね。」

そして、名前も教えてくれる?」

美夏が、聞いてきた。

「よくぞ、聞いてくれた!」

こなたが、口をひらいた。

「私達は、東京から来たのだ!そして、私の名は、泉 こなただ!」

「ちょっと、こなた落ちつきなさい!私は、柊 かがみ。」

「私は、妹の柊 つかさだよ」

「私は、高良 みゆきです」「そして、全員高二だ!間違っても私のことを、小学生と間違えないように!」

こなたの発言に二人は、驚いた。

「え？あなた小学生じゃないんですか？」

「俺、小学生かと思った」

二人の発言に、こなたは激怒。

「ちがーう！！私は、高二だ！！そういう、お前らは、何年生だ！！」

「こなた！！落ちつきなさい！えっと、それじゃあ、あなた達の名前を教えてください」

かがみの発言に二人は、落ち着いた。

「俺は、千樹 吹雪 高二だそして、こっちが妹の…」

「千樹 美夏だよ！こう見えても、小六！スポーツが得意だよ！」

美夏の、発言に四人は驚いた。

「……ええええええ！」「……」

「嘘！」「小六！？」「全然見えないです！！」

「ははははは。小六に、身長負けたよ……」

一人、落ち込んでいるが。

「いつも、間違われるんですよ～でも、もう慣れました！！」

ポカーン 四人がそうしていると…

ドガーン

遠くで、爆発音が聞こえた。

「なに！？今の音！？」

「向こうの方から、聞こえました！！」

「あっちの方は…」

「小学校の方だよ！兄ちゃん！大変、学校が燃えてる！！」

学校

「うわああああ！」

「キヤアアアア！」

学校のあちこちで、悲鳴が聞こえた。その、様子を剣は、ポカーンとして、見ていた。

「なんだよ…これ…」

「けー——ん」

「タンゴ！？」

「はあはあ、剣！お前は無事だったか！」

「どうしたんだよ！？これは！？」

「わからない…急に、変な鬼のような化け物が、何匹も出てきて、襲ってきたんだ！？」

「鬼のような化け物！？それは、今日の俺の夢に出てきたやつじゃないか！」

「剣、お前何か知っているのか！？」

「知るわけねえよ！！」

そのとき、後ろから声が

「けー——ん。無事かー！？」

「じいちゃん!？」

「おお、剣無事だったか」

「どうしたんだよ!？」

「いや、急に、変なのが出てきたからな。無事なのか心配したんじやよ。つとそんなことはどうでもよい!!剣!」「ライガー!」をよぶんじゃ!」

「「「ライガー?」」なんだそれ、「「タイガーマスク」」のパクリか?」

「違う!!」「「ライガー」」じゃ」

「「「ライガー?」」そんなのよんで、どうすんだ?」

「戦うのじゃ!!」

「ええええええ!俺が!？」

「なにをいつとおる!」「「ライガー」」に選ばれたんだから。戦うのじゃ!!」

「つと言つてつも、どうすんだよ。どうやってよぶんだよ!？」

「それは、簡単じゃ!!とにかく自分でやるのじゃ!!」

「ええい。どうなつても知らないからな。」

つと言つて剣は、手のひらかざし叫んだ。

「こおい。ライガー!!」

剣が光に包まれた。

「な...なにあの光!？」

遠くで、かがみ達が見ていた。そして、光の中から、獣のロボットが現れた。

「ライガー!!イン!!」

「スゲーぜ！！剣！」

「まさか、本当に乗れるとは……」

「なに、あのロボット！」

「かがみさん！！ひとまずここを離れましょう！」

「わかった！！」

「美夏！行くぞ！！」

だが、美夏はなにも、答えない。

「おい！美夏どうしたんだよ！？」

「感じるの……」

「え？」

「私を、よぶ光が、声を感じるの……」

「おい……美夏お前？」

その時、美夏が急に消えた。

「美夏！？」

「どうしたの！吹雪！！」

「急に、美夏が消えたんだ！！」

「なんですって！」

「それは、大変だよ！」

「美夏！どこだ！」

その瞬間、吹雪もどっかに消えてしまった。

「え？吹雪！？」

「吹雪さん！？」×2

「吹雪！？」

「う…はっ！ここはどこだ！？」

気がつくと、吹雪は、牧場ではないところにいた。

「ここは…？はっそうだ！！美夏は！？」

けれども、美夏の姿はない。

「美夏ー！どこだー！」

「その声…吹雪兄ちゃん！」

「美夏！？いるのか！」

「うん！それよりも、兄ちゃん！早く目の前のロボットを、目覚めさせて！」

「は？お前何を、言ってるんだ？第一ロボットなんて、いないぞ！」

と辺りをみわました瞬間

「うわぁ！なんだ、このロボットは！？」

「兄ちゃん！それだよ！早く目覚めさせて！！石碑の所に両手をおいて、文のとおりのように、よんで！」

「こんなじ、読めるか！」

「読めるよ！早く！」

「どうなっても知らないからな！？」

つと言つて、吹雪は、石碑の所に両手をおき、文をよんだ。

「右の手には、正義の光、左の手には、守る命、光ともに、新たな氷よ、私の前に、現れる。目覚めよ！スノークライマー！」

言った瞬間、巨大な光が吹雪と、ロボットを包み込んだ。

「まさか…本当に、目覚めさせられるなんて…さて、あたしも、やるか！」

そして、美夏の前に石碑が出現した。美夏は両手をおき、文をよんだ。

「空から舞い降りてきた、天使たちよ。我とともに、新たな光を降臨させよ。起動せよ！光の母船シャイニーよ！」

美夏が、言った瞬間、光に包まれた。そして…

ドン！　バン！

巨大な光が、こなた達の前に現れた。

「うわ！」

急に、現れたもので、四人は倒れた。

「な…なにこれ？」

「黄金の光に、白銀の光だ…」

「スゲー！アニメでしか見たことないよ！こんなの！」

「きれいですね〜！」

「なに、見とれてんのよ！二人とも！！早く、吹雪達を見つけないくちゃー！！」

つとその時、光から、氷の巨大なロボットと、船が出てきた。

「おお！もつとスゴいのが、出てきた！」

「氷の巨大なロボット！？」

「大きな船もあるよ！？」

「わああ！すごいです〜」

「サイコー！北海道に来て良かったー！」

一人だけ、はいテンションになっている、こなただった。っとその時、ロボットと、船から声が聞こえた。

「いててて…なんだ、ここ地上に出たのか？」

「多分、出たと思うよ。兄ちゃん。」

どつかで、聞き覚えのある声が聞こえた。

「その声…吹雪と美夏ちゃん!？」

「その声は、かがみか!？」

「ヤッホー!かがみさん達!」

ロボットから聞こえてきた声は、吹雪と美夏の声だった。

「どうしたの!?何でそんなところにいるの!？」

「説明は後だ!!早く、ここから離れろ!」「わかった!!行くわよ!みんな!」

「うん!」「はい!!」

「えええええーここでみていたいよ」

「いいから、くる!!」

つとかがみに、引つ張られていくこなただった。

「よし!やるぞ!美夏!」

「了解!!兄ちゃん!」

そして、二人は目の前にいた鬼を倒しにいった。

「くらえ!スノーブリザード!」

その瞬間、鬼が凍った。

「次は、あたしだい！船だからって、甘くみないでいよ！とんでいきな！シャイニングレーザー！」

凍った、鬼がその瞬間、レーザーでぶっとんでいった。

「やりい！」

「美夏！油断するな、まだまだたくさんいるんだから。」

「わかつてるよ！」

「なんだ、あいつら。鬼を、攻撃したけど、仲間なのか……」

「何をやっている！ドラゴ兵！そんな、やつらに負けるな！！！」

急に、遠くの方から、声が聞こえた。

「なにもんだ！！！」

「私か？私の名は、ドル・サタン！ドラゴ帝国の幹部だ！」

「ドラゴ帝国！？まさか、お前らが、人の学校を燃やしたのか！？」

「ふっ…あんな建物なんか、ドラゴ兵だけでも倒せるわ！」

「てめえ！絶対に許さねえ！おい！その、氷の巨大なロボットと、

巨大な船！俺と、一緒に戦ってくれ！」

「もちろんだ！」

「困っているときは、お互い様よ！」

「サンキュー！恩に着る！」

「ふっ…無駄だ！その人数で勝てるものか！殺れ！ドラゴ兵！そんな、やつらぶつとばしてしまえ！」

「ギシャアアアア」

「くらえ！電撃キック！」

「スノーアーチェリー！」

「シャイニングリング！」

三人の攻撃が、次々と敵を倒していく。そして、最終的には全滅で、

敵はすべていなくなった。

「何だと…全滅だと…こんなこと、ザーラ様に知られてしまったら…」

「さあ！とつとと、出ていきやがれ！」

「な…なめるなよ！ドラゴ兵！あの建物にいるやつら、すべて殺してしまえ！」

「何だと！？」「ふざけないでよ…！」

「ははは！何度でもいうがよい！！殺れドラゴ兵！」
「ギシャアアアア」

ドガーン！

「うわあああああ！」

「ギアアアアアア！」

「じいちゃん！タンゴ！」

二人は、気を失っていた。

「許さねえ！絶対に許さねえ！」

急に、ライガーに光が集まっていた。

「うおおおおお！」

「何だ！？この光は！？」

「兄ちゃん。あのロボット大丈夫かな…？」

「信じて待つだけだ…」

そして…

「変身！ファイヤー！」

ライガーの仮面が、取れ髪もオレンジになった。

「何だあれ！？」「スゴイ！」

「く…まさかあんなのを、隠していたとは…」

「く…え！ドラゴ兵！」

「ライガースラッシュ！」

ライガーソードで、真つ二つにした。

「ぐおおおお！」

鬼がいなくった。

「スゲー…」 「一発で、やっつけちゃった…」

「おのれええええ！よくも」

「サタンよ！すぐ戻ってこい！！命令だ！」

「ザーラ様！」

「命令だ！サタンよ！」

「はっ…わかりました。次は覚えているがよい！ライガーよ！」

そして、サタンは消えた。

「ふう…なんとかやつつけたか…」

「じゃあ、俺たちはこれで。」

「じゃあね」

「あ…待てよ！」

二人は消えていった。

「行っちゃった…誰だったんだ…あいつらは…」

森林

「ふう…なんとか乗りこなしたな。」

「そうだね。」

「でも、まさかあれが、こんなにちっちゃくなるとはな…」

巨大なロボットと船は、ちっちゃくなって、ロボットは、吹雪の首にネックレスとして、かけてあり、船は、美夏の手首に、ブレスレットとしてつけていた。

「あ…いたいた。」

「おーい、吹雪さん、美夏ちゃん!!」

振り返ると、こなた達が、走ってきた。

「皆、無事だったか」

「当たり前よ。」

「二人とも、すごかったよ!」

「ワイー!ありがとう。つかさん!」

「ええ、本当にすごかったですわ。」

「いいな、乗れて」

「全然、いくねえよ。」

「え、いいじゃん乗れて」

「一応、あれ大変なんだからな!?こんど、乗って見ろ!!」

「あ、それは却下。」

「何だと!!」

戦いが終わっても、体力は残っていた吹雪だった。

第一話 怒れる獣神 目覚める氷の巨人（後書き）

いかがでしたか？

もしかしたら、下手くそな部分が合ったかもしれませんが、できれば、アドバイスや、良かった点を教えてください。よろしくお願いします。

第二話 地球を守る戦士登場！（前書き）

「今回は、エルドランと勇者が出てくるよ。」

「もちろん、他のキャラクターも出てくるよ。」

「みんな！！チェックしてね！！」

第二話 地球を守る戦士登場！

異次元

「ここが…地球か…」

「きれいな星ね…」

「今から、この星は我ら五次元人のものとなるのだ」

「ジャーク帝国の最終武器アークダーマーを使うのね。」

「ああ…、タイダー！ミサイルの発射はまだか。」

「もうちょっとで、発射できますだ〜ベルセブ様」

その時、三人の前に三つの光が現れ、一つになり、巨大なロボットになった。

「な…なんだ！！」

「攻撃をやめろ！！ここは、五次元人の来る場所ではない！！」

「誰だ！！貴様は！！」

「地球を守る戦士！ライジンオー！」

「ライジンオーだと！ええいこうなれば、貴様ごと、撃ち落としてくれるわ！タイダー！ミサイルを発射しろ！」

「ハイだ〜！ポチっとな」

その瞬間、ミサイルがロボットと地球に、めがけて落ちてきた。

「くっ…いかせはせん！」

ロボットが、ミサイルを受け止めた。

「くっ…なんという力だ。こうなれば…」

ベルセブは、タイダーが操縦していたミサイルを操る、マシンを自分のところに、置いた。そして、拳を振り上げ…

「はああああ！」

拳をおとした。その瞬間、ロボットとミサイルは、爆発した。

「ぐわああああ」

ロボットから、声がした。と一緒に、ミサイルから黒い物体が、飛び散った。

「ふっ…哀れな…」

「ベルセブ様、アークダーマーはどうすんだ？」

「心配するな。放っておけば、勝手に暴れる。我々も地球に行くぞ。」

「

「がってんだ！」

日昇小学校

「先生！何で僕達は、帰られないんですか！」

「他のクラスは、みんな、帰ってますよ！」

「まだ、ダメだ！」

「えええええー！」

「何だよ！」

「家庭科の宿題をやってきたのは、白鳥マリアと小島勉だけだ。後は、全員やり直しだ！」

「えええええええ！」

「そんな——！」

「各、列の一番後ろは、ノートをとりにこい！」

「篠田先生。何でダメなんだよ。俺ちゃんと書いたよ。」

「ちゃんと書いたか？」

「ああ…だって俺、勉のを見て書いたもん」

「だからダメなんだ!!」

「痛い、痛い！ギブギブ！」

「ああ！」

急に、双眼鏡を手に持ち、覗いていた少年が声をあげた。

「こら！吼児！また、UFO探しか！」

「あれ！何だろう！」

吼児の声で、みんなが窓の外を見た。

「なにもいないじゃないか。」

「ほらほら、あれあれ！」

「貸してみろよ。」

仁が、吼児の双眼鏡をとった。

「どれどれ…ん？なんか近づいて来てるぞ？」

「お…重い…」

「うわ！なんだ、あれ！」

「こつちにくるんじゃないの!？」

空から謎のロボットが、学校に近づいてきた。そして…

「うわあああああ！」

「キヤアアア！」

「逃げる——！」

ロボットは、日昇小学校の五年三組に落ちてきた。教室が、崩れてきたその時！急に、教室と生徒が光に包まれた。仁達は、変な空間にいた。

「どこだ……ここ？」

「天国だ！僕達死んじゃったんだ！」

一人の少年が叫ぶ。その時吼児が、声を出した。

「仁……仁」

「ん？どうした？」

「これ……なあに？」

吼児の前には、でっかいロボットがいた。

「うわ！ロボットだ！」

「ロボット！？」

その時、ロボットのダイヤの形をしたところから、光の生物が出てきた。

「な……なんだ」

「夢だ……これは夢だ……」

「私の名はエルドラン、大古の昔から地球を守ってきた戦士エルドラン……今、この地球はジャーク帝国に狙われている。今日から私に

かわって、君たちが地球を守るのだ！」

「ちよつと待てよ！エルなんとか！」

「エルドランだよ」

「どうだって、いいんだよそんなの！！やいエルドラン！いきなり落つこちてきて、教室壊して、ナーニが「君たちがこの地球を守るのだ」だよ！」

「僕達は、侵略宇宙人に狙われているんだよ！」

「僕は、信じてないぞ！」

「私は、休まなければならない君たちに託すしか方法はないのだ。」

言った瞬間、エルドランから光が出てきて、生徒達の手に入った。

「うわ！」「キャア！」

「もーらい！」「あたし知らない！」「ええあたしも！」

手を開いてみると、各自の手にメダルが入っていた。

「その、メダルは君たちが地球を守る戦士だというあかしだ。使い方はメダルが教えてくれる。」「ああ！体が小さくなっていく！」

「あとは、頼んだぞ…地球の子供達よ！」

「ま…待てよ！おい！」

エルドランから光が出てきて、皆が包まれた。

「う…うわああああ！」

教室

「うわあああ！危ない！天上が！！！」

篠田先生は、急に叫んだ、だが…別に天上も崩れてないし、どこも危なくない。

「あれ？おかしいなあ？急にロボットが落ちてきて…天上が…」

先生は考えた。

「はーはっはっは！よし今日はここまで！課題は家でやってくるように！」

そして、先生は出ていった。

「はぁー、授業中に幻覚を見るとはなー保健室に行つて、姫木先生に見てもらおうと。」

「さっきのは、何だったの？」

「夢よ…私達、夢を見ていたんだわ。」

「夢だとしたら、このメダルは何ですか？」

「夢なんかじゃないんだよ」

「なんだ…これ？」

北海道 病院

「じいちゃん、タンゴ大丈夫か？」

「なに。このくらい平気じゃ。」

「そうだぜ。こんな、けがすぐに、治るよ。」

「そつか。ならよかった」

つとその時、遠くから騒がしい声が聞こえた。

「まさか、あの時に石につまづいて、坂から、転がって行って、骨折するとはね」

「とんだ、災難でしたね」

「大丈夫ですか、こなたさん？」

「平気、平気」

「完璧に平気といえないな。」

「大丈夫だよ！こんなの、すぐに、治るよ！」

「こなちゃん、ここは病院だよ。静かにしなきゃ」

「そうよ、もうちょっと、静かにしなさい。」「ごめんちゃい」

「あれ？あの子達この前会ったような…」

つと思つていたとき向こうも、こつちに気づいた。

そして、こつちにきた。

「君：確か前、こなたにぶつかった人じゃない？」

「え？こなたって青い髪の人ですか？」

「ええ…そうよ。」

「はい。そうですけど…」

「やつぱし！どっかで見たことあると思つたのよ！」

「でも、病院にいるってことは、あの時けがしてたの？」「いえ、

今日はじいちゃん達の見舞いに来たんです」「おじいちゃん達？」

「じゃあ、けがは、大丈夫なんだね。」

「はい。ところで、その、こなたっていう人は、大丈夫何ですか？さつき、骨折したって聴きましたけど…」

「あ、こなたなら、大丈夫よ。おいかけてっことをしていたら、石につまづいて、坂から、転がっていったただだから。」

「あれは、おいかけてっこつて言わないだろ。」

そして、少年のパーカーをぐいぐいと引っ張っている人物がいた。

「ねえ、兄ちゃん。」

「なんだ…美夏」

「あの男の子の声、どっかで聞いたことあるんだけど。」

「…それは、いつだ」

「鬼退治のとき」

二人はしばらく黙っていた。

「どうしたの？二人とも？」

「いや…美夏があの男の子の声、どっかで聞いたことがあるっていったから、ちよつとびくりして」

「本当何ですか？美夏ちゃん？」

「うん。あの時の戦いで聞いたの。」

「あの時って…鬼が出てきたこと？」

「うん」

「皆さん、どうかしたんですか？」

「あのね。この子が、君の声をどっかで聞いたことがあるっていうのよ。何か、心当たりがない？」

「絶対、聞いたことがあるんです。」

「そっぴや、俺も聞いたことがあるな…」

「え、吹雪さんもですか？」

「どう？何か、心当たりがない？」

「その声、この間の戦いで聞いたことがあるんですけど…」

「この間の戦いって、やっぱり鬼が出てきたこと？」

「はい。あの時、俺ロボットに乗ってたんです。その時、同じように、氷の巨大なロボットと船が、出てきたんですよ」

「氷の巨大なロボットと船って、吹雪と美夏ちゃんが、乗ってたロボットじゃない！」

「あ———！思い出した！ライガーに乗ってた人だー！」

「そーいや、似てるな。」

「俺も思い出した！あの時、氷の巨大なロボットと船に乗ってたやつじゃんか！」

「どうやら、三人とも、思い出したようね。」

「まさか、こんなところで会えるなんて！」

三人が、再会を楽しんでいたとき、タンゴが、剣のもとにきた。

「大変だ！剣！」

「どうしたんだ！タンゴ！」

「東京の日昇町に、怪物がでたって！」

「何だと！」

「もしかしたら、ドラゴ帝国かもしれないぞ！どうすんだよ、剣！」

「行くに決まってるんだろ！」

「でも、どうやって行くんだよ！」

「そ…それは…」

「あの…」

「何だ美夏ちゃん？」

「東京の日昇町に、行くんですよね。」

「ああ…」

「だったら、あたしに任せて！シャイニーでひとつとびで行けるわ！」

「本当か！よし、それなら頼むぜ！」

「OK！みんな、急いで、外にでて！」

美夏の言ったとおりに、みんな、外に出た。

「さあ！出番よ！シャイニー！」

美夏が言ったとたん、大きな船が出てきた。

「日昇町に、出発！」

日昇町

「何だよ…あの怪物…」

「もしかして、あれがエルドランが言っていた、ジャーク帝国!？」

「ウソー——!？」

「あんなのと、戦うのかよ!？」

「でも、戦わなくちゃ地球が、大変なことになるんだぞ！」

「……………」

「俺は、戦うぜ！」

「仁だけじゃ、無理があるだろう。僕もやるよ」

「二人が心配だから、僕も戦うよ。」

「仁…飛鳥くん…吼児くん…わかったわ…あたしも戦う！」

「マリア!？」 「本気なの!？」

「地球が、大変なことになるのは、嫌だわ…だから戦うのよ！」

「じゃあ俺たちもやる。」

「私達もやるわ！」

「……みんな!」「……」

「マリア!やるぞ！」

「ええ!それじゃ!行くわよ!」

マリアは、メダルを飛ばし机にはめた。

その瞬間、五年三組だけが、地下に潜りし令室となった。

「すごい…」

「教室が、し令室になっちゃった…」

みんなは、机にはめるだけでパソコンが出てきたが、他の三人には、はめるところらなかった。

仁と飛鳥と吼児だ。

「おい、飛鳥！俺たちはどこにはめればいいんだ？」
「知るか！そんなの！！自分で考える！」

その時、急に机から変なものが出てきた。

「な…何だよこれ！？」

プレスが開いて、真ん中の部分だけ光っていた。

「そうか！ここにいれるのか！」

三人は、それぞれプレスにメダルをはめた。

「何だ。これでいいのか。ハハハハハ。」

飛鳥が言った瞬間、仁の座っているいすの床下が、あいた。

「うわ！」「ん？」

さらに、

「うわ！うわあああ！」

飛鳥まで、掃除ロッカーに入ってしまったそのまま、下に落ちていった。そして、

「うわぁーぶつかる！」

吼児まで、壁にぶつかる直前に壁が開き、そのまま、とびこんだ。

「……………」

「うわぁぁぁぁぁ！」

「あーあーあー！」

仁、飛鳥、吼児の三人は、それぞれそこにいた、ロボット達にとびこんだ。そして…

「ん？なんだこれ？」

あきらが、点滅しているボタンを押した。すると校庭から、三体のロボットが出てきた。真ん中は人形、右は鳥、左はライオンだ。

「人形が剣王、鳥が鳳王、ライオンが獣王ですか……」

「あの、ロボット達に仁達が？」

「俺達が、パイロット？」

「冗談じゃないよ……」

「気持ち悪い……」

「三人とも、しっかりしなさいよ！怪物に負けちゃうわよ！」

「わかってるよ！でも、エルドランはライジンオーで戦ってくれて言っていたのに、肝心のライジンオーがないんだよ！」

「勉強かどうか？」

「ちよっと待っててください……………わかりました！！その、

ロボット達は合体できるんです!」

「合体?」

「その、三体が一つとなると、ライジンオーになるらしいです!」

「本当か!よし合体するぞ!」

「だからって、合体の仕方わかるのか!?」

「それは...」

そのとたん、仁の前に変なものが出てきた。

「なんだこれ?」

「仁くん!それは、ライジンコマンダーです!」

「ライジンコマンダー?」

「三人のメダルを、はめてください!飛鳥くんと吼児くんは、プレスの右側のボタンを押してください!」

「よし、いくぞ仁!」

「仁くん!いくよ!」

二人はボタンを押した。

「おーし。こうなったら、やってやるぜ!」

三人のメダルがはまり、三体がライジンオーとなった。

「すげー...」

「仁!安心してる場合か!目の前の怪物を、倒してから安心しろ!」

「おっしゃあ!いくぜ!」

ライジンオーが動いた。

「くられ!ライジンフラッシュ!」

一撃で、怪物を倒した。

「やったぜ！」

「まだ、いるぞ！油断するな！」

「わかってるって！」

その時、近くに謎のロボットが出てきた。………マジンガーZとダイアナンAだ。

「あれは、マジンガーZとダイアナンAだ！」

「助けにきてくれたのか！」

「おいおい、怪物さんよ！こんなところで、暴れるなんていい度胸してんじゃねえか！」

「甲児くん！久しぶりの発進だからといって騒ぎすぎよ！」

「すんません！さやかさん！」

「ところで…私達の他にも、もう発進していた人達がいたみたいね。」

「おい！そのロボットに乗っている、人達！名前と職業を教えてください！」

「名前は言えるけど、職業とかないし。」

「とりあえず、学校名をいつとけばいいんじゃないか？」

「そうだな。…えつと俺達は、日昇学校、五年三組の生徒です。俺の名前は、日向仁です。」

「月城飛鳥です。」

「星山吼児です。」

「え！？小学生がロボットに乗ってるの！？」

「えつと、俺達エルドランに地球をジャーク帝国から守ってくれて言われて、それで、ライジンオーを渡されたんです。」

「その、ロボットはライジンオーって言うのね」

「ええい、レストランだがなんだが、知らねえが、とりあえず俺達と一緒に戦ってくれる、ということだな。」

「あの…レストランじゃなくて、エルドランです。」

「はい！よろしくお願いします！」

「おっしやあ！いくぜ！」

「ライジンソード！」

「アイアンカッター！」

二人の攻撃で、敵はほとんどいなくなった。…ように見えた。なんと、ちゃんと攻撃したのに、倒れていないのだ。

「どういうことだ？」

「くそ！ここまでかよ！」

「ベルセブ様、あの二体が出せなくて焦っていますだ！」

「ふっ…よいいまだ！エキゾーストよ！あの二体を倒すのだ！」

そして、エキゾーストが仁達のほうにきた。

「や…ヤバイ！」

その時、パトカーが走ってきた

「な…なんだ！？」

「行け！ダ・ガーン！」

変なスーツをきた少年がパトカーに命令する

「ダ・ガーン参上！」

「ダ・ガーン？」

「くらえダ・ガーンマグナム！」

しかしエキゾーストにはあまりきいていない

「なら！ダ・ガン合体だ！」

「了解！来いダ・ガンジェット！」

少年の命令でダ・ガンが戦闘機を呼び出す

「ウオオオオ！合体！ダ・ガンX！」

戦闘機が飛行機と新幹線に分離し新幹線が下半身に飛行機が上半身にへんけいしダ・ガンを挟むように合体する

「くらえ！アースキャノン！」

エキゾーストが倒される

「すげえ……」

「さあいつきに片付けるぞ！」

「あ……ああ」

「おのれ、次から次へと……エキゾーストよ！まとめて片付ける！」
その時、巨大な光が現れ、船が出てきた。

「なんだ！？あの船は！」

「日昇町についたよ」

「ふうーやつとか」

「かなり、かかったわね」

「早く、発進しなきゃ」

「「おう！」」

船から獣のロボットと氷のロボットが出てきた

「あいつらは？」

「仲間なのか？」

「その氷と獣のロボット！一緒に戦ってくれ！」
「もちろんだ！」

「一緒に戦おうぜ！」

「おっしゃあ！皆で攻撃だ！」

「「「「「おう！」「」「」「」

「ブレストファイヤー！」

「ダ・ガンブレード！」

「ダイアナンミサイル！」

「ライガースラッシュ！」

「スノーアイシングクラッシュ！」

「ゴッドサンダークラッシュ！」

エキゾーストがすべていなくなった。

「絶対無敵ライジンオー！！」

「おのれ…次こそは！」

五次元人は消えていった。

「任務完了だな。帰るぞダ・ガン」

「了解した」

「あつ！行っちゃった…」

「仁くんと声が似てたけど誰だったんだろう」

日昇学校 五年三組

「まさか、本当に小学生が乗っていたとはな。」

「びっくりしたわ」

「しかも、三体のロボットパイロットがな」

「大人なんか信用できねえもん」

「バカ！仁！空気よみなさい！」

「いつてー！殴ることねえだろ！」

「あんたが、空気よまないから悪いんでしょ！」

「ハハハハハ！ケンカするほどなががいいんだな！」

甲児に、言われて二人はケンカをやめた。顔を赤くしながら…。

「それにしても、一気に仲間が増えたね」

「ええ、そうね」

「なんだか、楽しくなりそうだよ！」

つとこなたが、言った時仁がこっちを見ているのに気づいた。

「どうかしたの？仁くん」

「え…いやこんなこといつて悪いと思うんだけど。」

「なになに！？お姉さんに、きちんと言いなさい！！」

「こなたさんって、小学生？」

「あ…それは…」

かがみが、止めようとしたけど、もう、遅かった。

「私は、高校生だー！」

第二話 地球を守る戦士登場！（後書き）

今回は、みゆきがあまり登場していなかったような気がします…
また、感想お願いします。

第三話 勇者と勇者!?

その1 (前書き)

「月です。今回は、異世界編なのでこなた達の出番は、ありません。」

「残念だな」

「まあまあ。次に期待しましょ。」

「後、今回からその1、2と別れて書きます。」

「めんどくさがりだな」

「では…」「……」「スタート!」「……」。

第三話 勇者と勇者！？

その1

青空町

「いやー、疲れたなー！」

「まさか、こんな時間まで残されるとはね…」

「しょうがないだろ…掃除サボった俺らが、悪いんだから。」

遠くから、グチを言っている三人組が、きた。三人とも青空小学校の四年一組の、生徒だ。真ん中にいるのが、霧隠虎太郎。右側にいるのが、風祭庸介。左側にいるのが、流崎力哉だ。

三人が、なぜグチを言っているのかというと、掃除当番をサボってしまい、先生の、お説教をくらったからである。

「たくもー！あんなに、怒ることないじゃないか！」

「しょうがないよ…もとはいえ、僕達が悪いんだから…」

「虎太郎も、大人になれよ…」

三人が、いろいろ話を、していると空き地で、誰かがゲームをやっていたのに気づいた。クラメスメイトの、ラムネだ。

「ラムネだ…またゲームをやっているのか？」

「毎日飽きないよね…。ってあれ？虎太郎くん？」

虎太郎はいつの間にか、ラムネのところにくっそりといっていた。

「虎太郎！なにをするきだよ！」

力哉が、小声でいつてきた。

「まあ、見てなって♪」

虎太郎は、歩き出した。

ソローリ ソローリ

「わっ!!」

ラムネの後ろにいつて、脅かした。

「わわわわわ！俺は、今モーレツに驚いている！」

「ハハハハハ！驚きすぎだろ！」 「なんだ…虎太郎かよ。掃除当番サボったから、先生が追いかけてきたかと、思ったじゃねえか。」

「こんなところで、ゲームやってるのが悪いんだよ」

「ところで、そのゲームなあに？」

「見たことないゲームだな？」

「ああ、これは、さっき走ってきた時、目の前に女の子がいたんだ。その、女の子から、十円で買った。」

虎太郎達は、驚いた。なにせ、D？や、？S？などのゲーム機で一万ぐらいはするのに、十円のゲーム機なんて無料と一緒にだと思ったから。

「で…でも、十円だから不良品何じゃ…」 「それが、新品といえるぐらいの良さだ。」

「…ま…マジかよ」「」

三人は、口をずっと開けていた。そして、力哉がやっと口を動かした。

た。

「まあいいや。とりあえず、ラムネがはまるゲームなら、面白いはずだから俺にも貸してくれ。」

「いいぜ！どうせ、今日で終わらせるから」

「じゃあ、たのんだぞ」

「じゃあな！ラムネ！」

「じゃあね！」

三人は、帰っていった。

「さて、俺も帰るか」

ラムネも、帰っていった。

夜 ラムネの部屋

「おーし、風呂も入ってさっぱりしたし、ゲームをやるか！クリアするまで絶対寝ないぜ！」

ラムネは、必ずその日に買ったゲームを一日でクリアしてしまう。いわゆる、ゲーマーだ。

「おーし、やるぞ！」

早速、ゲームに熱心なラムネ。

「おりゃあああ！がんばれ！キングスカッシャー！そこだ！うりゃあああ！」ちなみにラムネが、やっているのは、「キングスカッシ

ヤー」っというゲームだ。そして…二時間後

「おっしやああああ！ゲームクリアだ！」

ついに、ゲームをクリアした。それも…二時間後に。

「けっこう難しいゲームだったな…けどストーリーがすごいなー！しかし、伝説の勇者の活躍で世界に平和が訪れたのであった。か…」

ラムネは、さっきのゲームのストーリーを思い出した。そして、こんなことを思った。

「伝説の勇者か…もしなれたらかつこいいよな…でも、ありえないからなこんな話…」

すると、TVが光だした。そして…

「それなら、話は早いですう！」
「え！？」

ラムネは驚いた。急に、TVから、女の子の声が聞こえたからだ。そして、中から桃色の髪の少女が画面から現れた。

「こんにちは。」

「ゲ…ゲーム機から女の子！？き…君はいつたい！？」

「私はミルク！やはり貴方こそが私が捜しもとめていた勇者の血をひくもの…ラムネス！さあ！私と一緒に来てくださいー！！」

「え！？俺の名前は、ラムネだよ？それに、俺は勇者の血なんかひいてないよ。」

「このゲームをクリアしたのが、勇者の血をひく証ですう！さあ！早く私と一緒に来てください！！！」

「でも、知らない人についていくのは、ダメだし……」

「そこを、何とかお願いしますう！」

「でもなあ……」

ブッチーーン

ついにミルクがきれた。

「いいから、来いって言うてんだよ！」

「ちよつと待って……ってうわあああ！TVの中にー！」

ミルクに引きずられて、TVの中に入っっていってしまうラムネ。いっ
つたいどうなる！？

第三話 勇者と勇者!?

その1 (後書き)

「次は、2と続きます。」

「まだ、続きそうだね」

「次回作にご期待を」

第三話 勇者と勇者!?

その2 (前書き)

「前回の続きです」

「私達の出番はいつだろう」

「早く、出たいよ」

第三話 勇者と勇者！？

その2

前回のあらすじ

ゲームクリアをした瞬間、急に、現れた謎の少女につれていかれたラムネであつた。

アースティア ホイホイ城

ここは、アースティアの暗黒世界にあるホイホイ城。その城内では…

「ゴオキブリブリ、ゴブーリキ！ゴオキブリブリ、ゴブーリキイ
ー！！」

城の持ち主、謎の男、ドン・マルハゲが、謎の呪文を唱えていた。

「ドン・ハルマゲだ！間違えるな作者！！」

あれ？あたしなんか変なこと言つた？

「ええい！もういいわ！それにしても、なんという不吉だ！我が、
軍団に楯突くものがアララ城に出現するだど…！！こうなつたら、
仕方がない…。ダ・サイダー！レスカ！」

ドン・ハルマゲの前に、青い髪の毛で軍服をきた男と、セクシーな
衣装をきて、髪の毛の一部分が、青くなっている金髪の女性が現れ
た。

「お呼びにより、ダ・サイダーただいま参りました！」

「レスカちゃんだって来ちゃったわよ〜ん！」

「ダ・サイダー！レスカ！お前達は、一致団結してモンスカーを率い、アララ国を滅ぼすのだ！」

「はっ！かしこまりました！」

「やってやろうじゃない！」

そして、二人はアララ国に向かって出発した。

一方そのころ…

アララ城／城内

「いてててて…ここは？」

「アースティアのアララ国よ。」

「アースティア？アララ国？」

「まあ、異世界だと思えばいいわ。とりあえず、大広間でお父様が待っているわ。いきましょ！」

「おわあああ！せめて、歩かせてくれー！」

ラムネはまたミルクに引きずられていった。

アララ城／大広間

真ん中の王座に一人の老人が座っていた。

「お父様、ラムネスをつれてきました。」

「うむ！ご苦労じゃった！選ばれし勇者の血をひく、ラムネス！よ

くぞきた！ワシは、このアララ国の国王、アリヤリヤ・コリヤリヤ・ヨッコーラ三世じゃ！」

「舌噛みそうな長い名前…。それに俺はラムネスじゃなくて、ラムネだよ。勇者の血なんかひいてないよ。」

すると、そこへ眼鏡をかけた女性が現れた。

「ミルク〜お帰り〜」

「ただいま、ココアお姉さま！」

「時空転移装置は問題なかったようね〜。私の計算ですと、勇者ラムネスを連れて来る確率は…」

ココアは計算機をとりだし、計算をし始めた。

「え〜と…1億2389分の1以下だったんですけど、うまくいったみたいですね〜」

「それって、かぎりなく0に近いじゃない！」

あまりにも、無理っぽい発言にミルクは呆れた。

「よくそんなあやふやな計算で、私を送り出したわね！」

「ごめんなさいね〜」

「お姉さまがそんなんだから、ラムネスを見つけれなかったのよ！？あまりにも、奇跡的だわ！？もし、見つけれなかったらどうすればよかったのよ！？」

「確かに悪いかもしれませんが、ミルク〜お姉さまに対してあまりにも失礼なことではありませんこと〜」

「だって、本当のことじゃない！」

ガーン！！

妹に言われ、ココアはショックをつけた。

「くすん…妹に言われると、傷つくものねえ…あら、涙で眼鏡が…」

フキフキ

ココアは眼鏡を外してふいた。だが、眼鏡をかけてない顔はとても可愛かったのである。

「おお！眼鏡を外すと、可愛いじゃん！」

「ええ〜！？」

「もう、まったくラムネスったら鼻の下伸ばしちゃって！」

ミルクはちよつと、嫉妬した。

そのころ…

アララ国／城付近

「まあ！きれいな小川ですこと！」

「気持ちいいハグ〜」

「水が、きれいですから川もきれいなんでしょう」

「あんまり、はしゃいでいると川に落ちるぞ、お姫さん。」

少女と僧侶と忍者が、小川で休んでいた。

少女の名は、パフリシア王国の王女パツフィー・パフリシア。魔法の修行をするために各地を旅しているのだ。一緒にいる僧侶はイズミ。パツフィーの護衛役をつとめている。もう一人は忍者のサルトリ。パツフィーのボディガードだ。ちなみに小さな生物はハグハグという。

「失礼ね、サルトビ私はそんなにどじじゃないわ」

「ふーん、どうかな。」

「もう、サルトビったら！」

「それにしても、ずいぶんと平和な国だな」

「聞くところによると、この国には勇者伝説が残っているらしいですよ。勇者の名はラムネスです。」

「まあ！その方こそ、私達が探している勇者様かもしれませんわ！」

「けどよ、そのラムネス伝説ってのは5000年も前の話だろ？それに、ここだけだから違うと思うぜ。」

「調べてみるかちはありそうですね。」

その時、 ドン！

パッフィーがなにかにぶつかった。

「きゃー！」

「ん？」

パッフィーは倒れたが、相手は、何もなかったように平然と立っていた。

「おお。すまんすまん大丈夫かい？」

「いえ、私が余所見をしてしまったので平気です。」

「そうか。ならよかった」

「ん？なんだ、あんた見慣れない服装だな？どこから来たんだ？」

「え…ここは、地球じゃないのかい？」

「『地球？』」「『』」

三人が声をそろえて言った。

「いや…こつちの話だ。」

「そういえば、さっきあわててた様子が見られたんですがどうかしたんですか？」

「あ…ああ。実は一緒に来ていた人達と離れちゃって…それで、あわててたんだ。」

「そうだったんですか…」

その時、近くからエンジンの音が聞こえてきた。

「なんだ？」

そして、林のなかから、車が出てきた。

「うわあああ！」

「な…何ですかあれは！」

「や…ヤバい。前に人がいるぞ！タクヤ！」

「な…なに！？」

「このままじゃ、ぶつかるよ！」

「ドラン！止まってくれ！」

「だめだ！聞こえてない！」

「ヤバいよ！」

「おい。あの乗り物こつちに向かってきてないか？」

「このままでは、ぶつかりますぞ！」

「三人とも、後ろに下がってくれ！」

「え！？」

「早く！」

「分かりました！」

三人は後ろに下がった。

「もう、だめだ！」

「ひいいい！」

「いくぞ！サイゴウ家特殊技！天空衝撃波！」

その瞬間、男が飛び上がってそのまま地面にパンチをくり出した。

「おう！？」

地面は揺れ、ドラン達の前のところだけ、われた。

「すげえ……」

「じ……地面が割れましたわ。」

「いやードランが止まってくれてよかった。」

「いやー本当にすみません怖がらせて」

「いえ、怪我はないから大丈夫ですわ。」

「それにしても、お前らも見慣れない服装だな？どこから来たんだ？」

「え……えつとそれは」

その時

ドガンー！！

「なんだ！？」

「姫、あちらを……！」

「あ……あれは！？」

爆発音の方に振り向くと、魚型の船艦がいた。

「ここがアララ国か！ドン・ハルマゲ様の命令より、この城はダ・サイダー様が破壊してやるわ！」

「まあ、適当にがんばんなさい。」

「出でよ、モンスカー！」

船艦から謎の怪物が現れた。

「ドン・ハルマゲ様に逆らったらどうなるか、やつらにたつぷりと分らせてやるのだ！」

すると、モンスカー達は、城に向かって町を攻撃していったのであった。

第三話 勇者と勇者!?

その2 (後書き)

「次、その3につづきます。」

「まだ、続くんだ。」

「けっこうかかるわね」

第三話 勇者と勇者!?

その3 (前書き)

「いよいよ、戦闘です」

「ということは、もうすぐで、終わるわね」

「ヤッホーイ! そろそろ出番が、くるぞ!」

(この次の話は、みゆきが活躍するって教えてないの?)

(そりゃ、当然♪)

(……………)

第三話 勇者と勇者！？

その3

前回のあらすじ

アララ国に連れてこられたラムネ。だが、町にドン・ハルマゲ軍団が現れた！！いったいどうなる！？

アララ城／大広間

「なんじゃと！町にモンスカーが現れたじゃと！？」

アララ城で、見ていたラムネ達。

「モンスカー！？それって、ゲームに出てきた敵キャラの名前じゃん！まさか、襲ってきたのはドン・ハルマゲの軍隊じゃ……」

「あらら、察しがいいですね。その通りドン・ハルマゲの軍隊ですわ。ドン・ハルマゲが世界を滅ぼすという伝説の大悪魔『妖神ゴブリキ』を復活させてアースティアを支配しようとしているんですわあゝ」

「まさか、ゲームの出来事が実際に起きるなんて……」

「アララ〜！アララ〜！アララ国もおしまいじゃ！」

「なにいつてんのよ、お父様！こんなときこそ、あたしが連れてきたラムネスがいるじゃない！」

「アララ、そうじゃった。ラムネス！後は頼んだぞ！」

「だあかあらあ！俺はラムネスじゃなくてラムネ！」

「ゲームをクリアした後に勇者になりたいっていたじゃない！」

「でも、どうしたら……」

その時、ココアがなにかを思い出した。

「地下よー！お父様！地下ですわ！城の地下には勇者しか使えない武器が封印されてるはずですわ！」「アララ、そうじゃった！勇者ラムネス、地下へ行つて武器を目覚めさせるのじゃ！」

「そんなこと、急に言われたって…」

「いいからー！いくわよ！」

「おい！ひっぱるなよー！」

ラムネス達は、急いで地下へと向かった。

アララ城／地下

「ここが、城の地下…？」

地下へと向かったラムネの前に、ライオンの頭部を模した扉があった。

「なんだ？この扉…」

「その扉は、勇者のみが開けられる扉なの。だから、『封印の扉』と言われているの。」

「封印の扉…この向こうにはなにかがあるのか？」

「それは、知らないけど、早く扉の前にある台に手を当てて！」

「なんか、心配なんだけど…開かなかつたら、どうすんだよ。」

「その時は、君を連れてきたあたしが責任をとるわー！」

「ラムネス、急いでくださいー」

「ここに、手をおけばいいのか？おもいつきり心配なんだけど…ま、いつか、よつと…」

ラムネが台に手を置いた、その時！

「うわ！なんだこの光は！」

「まぶしいですわ〜！」

「いったい何が起こったの！」

急に、あたりが光った。そして、何秒かで光がやんだ。だが、そこには一体の謎の生き物がいた。

「ラムネス！待ってたミャー！」

「な…なんだ！？この生き物武器じゃないじゃん！」

「生き物じゃないミャー！アドバイザーロボットのタマQだミャー！」

「タマQ？」

「そうだミャー！僕を君の肩にのせてミャー！」

「お前を肩の上に乗せればいいんだな。……………よつと！」

「ん————…ミャー！」

ラムネが光に包まれた。すると、ラムネの服装が変わっていた。これこそが、勇者ラムネスの誕生である。

「なんだこれ！服が変わったー！」

「その服が、勇者ラムネスの服なんだミャー！」

「スッゴーい！やっぱしあたしが連れてきたお陰ね！」

すると、地響きが近くでなった。

「まずいすわね〜、モンスカーが近づいてきてますわ〜」

「ラムネス！素晴らしい武器をてにいれたんだから、早く何とかしてよ！」

「何とかしてと言われても、どうすればいいか分かんないんだよ。」

「ラムネス！外に出るんだミャー！」

「外！？それでなんとかなるのかよー！」

「説明は後だミヤ！早く行ってミヤ！」
「分かった！行くぞ！！」

そして、ラムネスは急いで外へと向かった。
一方そのころ…

アララ国／外

外では、魚の巨大なロボットとモンスカーが町を破壊し続けていた。

「やれえ！もつとやれえ！墓までハカいしろ！どうだ！レスカ！！
今のシャレ、おもしろいだろ！」

「……………ハカみたい」

「ぬうわっ！くっそ！！お前のほうがおもしろいじゃねえか！」

「適当に言っただし…」

「尾も、白い…面白い！ハッハッハッハッ！俺様天才！」

「人の話聞いてないわね…この病気さえなければいい男なんだけど
ねえ…」

「よし！モンスカーよ！一気にアララ城に突っ込むのだ！」

モンスカー達は、町を攻撃し続けた。

「きゃあ！」

「姫、お怪我はありませんか？」

「ええ、大丈夫ですわ」

「どうしよう、カズキ。このままじゃまちが…」

「俺にふるな」

「しょうがねえ！ここは俺が！！」

「まちたまえ！誰か出てきたぞ！」

「え！？」

城のところから、ラムネスが出てきた。

「外に出たぞ！タマQ！次はどうすればいい！？」

「キングスカッシャーをガチャポン！と呼ぶんだミヤ！」

「キングスカッシャーって…ゲームソフトの主人公ロボじゃん！」

「ポケットに入ってるコインをボクの頭の投入口にいれるミヤ！」

「このコインか！？」

つといて、ラムネスはコインを取り出した。

「そうだミヤ！コインをボクに入れるとカプセルが出てくるから、それを投げるミヤ！」

「よし！」

そして、ラムネスはコインを入れ、カプセルを投げた。

「ん~~~~ミヤッ！」

「キングスカッシャーアア！！」

ラムネスが言ったとたん、黄色いロボットが出てきた。

「これが…キングスカッシャー！」

「キングスカッシャーはラムネスの言うことならなんでも聞いてくれるんだミヤ！」

「よし！いくぞ、キングスカッシャー！」

「オレは今、モーレッツに熱血してるっ！！」

「あらま、いきなりでてきてカッコつけてくれるわねえ」

「ええい！なにをしてる、モンスカー！さっさと奴をやっつけろ！」

「ラムネス！目の前のモンスカーだけに気を取られちゃダメよ！お

城を壊されちゃ、おしまいなんだから！」

「ラムネス、お城を守ってくださいませ」

「まかせとけて！」

そういつて、ラムネスは目の前のモンスカーをたおしにいった。

「くらえ！シールドブーメラン！」

ラムネスがだした、シールドブーメランでモンスカーは倒れた。

「オツシャアア！」

「ラムネス、次もちゃんと倒してくれミヤ！」

「まかせとけて！」

そして、次々とラムネスはモンスカーを倒した。

「おいおい、これでおしまいかよ！」

「ラムネス！油断しちゃだめだミヤ！」

「おのれ！いいきになるな！」

ダ・サイダーがそう言った瞬間、もっとモンスカーが出てきた。

「うわ！多！」

とそのとき、見たことないロボットが出てきた。
盗賊だ。

「ハハハハ！お頭！今日はどのくらい宝を盗みますか！？」

「へへへへ！！先客がいるけど、黄色いロボットはそいつらにまかせて、俺達は、隙を見て宝をたくさんいたたごうじゃないか！」

「了解しやした！頭！」

「もう！！最悪！なんで盗賊まで、出てくるのよ！」

「ラムネス！頑張ってお城を守ってください！」

「守ってって言われても、こんないたら一人では無理だよ！」

「ハーツハツハツハツ！盗賊まで、出てくるとは予想外だったが、

これはチャンスだ！！やれ！！モンスカー！」

「俺達もいくぜ！」

「わかりやした！頭！」

盗賊達とモンスカー達がいつせいに、城へ向かってきた。

「や…ヤバい！」

「大変ですわ！このままでは、やられてしまいますわ！」

「そんな！」

「ハーツハツハツハツ！残念だったな！」

その時、

「そうは、いきませんわ！」

どこからか、声が聞こえた。

「誰だ！俺様の邪魔をするやつは！」

「もう許しませんわ！」

「さつきから、ひどいことをしやがって！」

「俺達の怒りが、おさまらねえ！」

「いきますわよ！イズミ！サルトビ！」

「了解です！姫様！」

「しょうがねえ！やるか！」

「来たれ！リユーメイジ・マジドーラ！」

「出でよ！リユープリースト・バウルス！」

「リユーニンジャ・爆裂丸！」

パッフィー、イズミ、サルトビが声をだした瞬間、魔道師、僧侶、忍者を模したロボットが現れた。

「ドラン！お前もいけ！」

「了解した、主！」

車が変形していき、巨大なロボットとなった。

「黄金剣士ドラン！」

「ガイ！俺達もだ！！」

「了解！コール、ヒートスター！」

ガイがコールするところからともなくパトカーが走ってきた。

「いくぜ！融合！」

ガイの声とともにパトカーが人形ロボットに変形した。そして、ガイがそれに融合した。

「勇者ガイ！参上！」

「タマQ、あのロボット達は！？」

「あれは、伝説の『リユー』だミヤ！」

「リユー！？」

「リユーには意思があるんだミヤ、そしてリユーに認められたリユー使いしか乗りこなすことができないミヤ！」

「じゃあ、後の二体のロボットは？」

「あの二体は、初めてみたミャ！」

「初めてなの!？」

「でも、きつと仲間だミャ！」

「ということは、ラッキーじゃん！なあ！君達も一緒に戦ってくれるの？」

「もちろんですわ。共にこの町を守りましょう！」

「あいつらには、この町を壊せはさせない!!」

「これ以上奴らの好き勝手にさせておくわけにはいかねえからな！」

「一緒に戦うぞ！」

「ダメージはわたしが癒します！存分に戦ってください！」

「サンキュー！助かるぜ！」

「雑魚を相手にしてもキリがねえ！あの魚みたいな戦艦を落とすぞ！」

「ドラン！あの戦艦をターゲットにしてくれ！」

「了解！主！」

「ラムネス！あの戦艦を叩くミャ！」

「よし！いくぞ！」

「ええい、リユー使いと他の二体！俺様の邪魔をするな！」

「モンスカー！まとめて叩き潰しておしまい！」

「ああ、それは俺の台詞……！」

そして、戦闘がまた始まった。

リユー使い

リユー使いは盗賊達の乗っているソリッドと戦っている。

「まずは俺からだ!!」

爆裂丸はジャンプすると背中に装備していたクナイを取り出し、ソ

リッドのアームを切り落とした。「なにい!？」

「もういっちょ、オマケだ!」

クナイは見事にソリッドに命中した。

「すんませんした!頭!」

中にいた盗賊は、爆発寸前に、逃げ出していた。

「パッフィーとイズミは大丈夫か？」

そして、パッフィーとイズミの方は…

「姫!ここは私に任してください!」

「いいえ。私は戦いますわイズミ。そのための修行ですもの。」

「分かりました。では、私はサポートに入ります!」

「頼みましたよ、イズミ!」

「くるぞ、パッフィー!」

「はい!!」

パッフィーのところに、一体のソリッドが近づいてきた。

「へへへへ!!リユー使いがいるとは、ラッキーだぜ!ついでにリユーももらっていくとするか!」

「なめられたものですわね。では、これをくらいなさい!フルムウウ!」

マジドーラの杖から、ふぶきが吹き荒れた。

「へ!ナメんなよ!」

盗賊は、そう言うとミサイルをかまえた。

「くらいやがれえ！」

だが、

「かわしました！！」

「ハグッ！」

マジドローは、かわした。

「なに！？」

「さあ！私の魔法うけていただきます！！ホノオン！」

今度は、杖から火の玉が何度も出てきた。

「し…しまった！」

ソリッドは、いなくなった。

「おのれ！リユー使いめ！これでもくらえ！」

怒った頭が、パッフィーに突っ込んできた。

「避けきれません！」

「おっと、そうはさせないぜ！」

爆裂丸がクナイを投げた。

「ち！」

「よそ見をしている暇は、ありませんよ！ライダーズ！」
「くっ！…いつの間に！…ぐ…ぐわああ！」

リユー使いのお陰で、盗賊達はいなくなった。

「姫！お疲れさまです。」

「けっこう、疲れましたわね…」

「のんびりしている暇は、ねえよ。早く黄色いロボットの手助けをしなくちゃな。」「そうですね。早くあの勇者さんのところにいきましょう。」

ゴルドランと勇者ガイ

「それにしても、こいつら何者だ？」

「こんな奴ら見たことないな…」

「なあ、カズキ、ダイ。」

「なんだ…」

「どうしたの？」

「もしかして、ここ地球じゃねえよな。」

「俺も思った。」

「ここ、どこなんだろう…」

「地球？もしかして、お前らも地球からきたのか？」

「ええ！おじちゃんも！？」

「おじちゃんも、つと言ったからやはり君達も地球からきたのか。」

「地球から急にこつちに来ちゃったんです。」

「わたしも、同じだ。」

「まさか、俺達他にも被害者が出てるとはな。」

「おしゃべりはそこまでにしておきたい！」

突然、ドランが言った。周りを見ると、モンスカー達がこっちに来ているのが分かった。

「ふん！そっちがやる気ならこっちもやってやるよ！ドラン！攻撃だ！」

「参る！！！」

「俺達もかせいするぞ！」

こうして、いよいよ対戦も終わりに近づいてきた！勝つのは、どっちだ！？

第三話 勇者と勇者!?

その3 (後書き)

「次、その4に突入します。」

「どうなるんだろ!」

「けっこう、出てきているからね」

「感想待ってるよ!」

「よろしくお願いします!」

第三話 勇者と勇者!?

その4 (前書き)

「この話で、アースティア編終わりです。」

「いや、長かった」

「たくもつ。相変わらずなんだから。」

第三話 勇者と勇者！？

その4

前回のあらすじ

ついに勇者ラムネスが、たんじょうした！城を守りながら戦っていると、さらに敵が増えピンチに！！だが、リユー使用と、見たことないロボット達が登場し味方が増えた。そして、ついに最終決戦と突入する！

「わが剣の攻撃をつけてみよ！必殺！稲妻ぎり！」

「おらおら！！そんな攻撃で俺が死ぬと思ってるのか？」

現在モンスカー達の相手をしているのは、ガイとドラン。二体の攻撃で、モンスカー達は徐々に減っていったが、なかなか全滅ができない。

「くっ…思ったより厳しいな。」

「なんとかして、勝たなくちゃな。……………しょうがないここでは、あまり使いたくなかったがやるしかないか…。」

その瞬間、ガイを炎が包み込んだ。

「な…なんだ！？」

「おっさんが死んじゃう！」

「いや、それは違うだろ」

「だいたい、自分から炎のなかに入るひといないよ」

「それもそうか…」

「コール！ヒートフェニックス！」

ガイのコールにより、炎の不死鳥が現れた。

「炎の鳥！？」

「いや、あれは不死鳥だ」

「不死鳥！？」

「不死鳥って…なに？」

ズコッ！

タクヤの発言に二人は、ズッコケタ。

「タクヤ…さすがにそれくらいは知るところよ…」

「いいから、教えて！」

「たく…しょうがないな、いいか、不死鳥ってのは死なない鳥という意味だ。」

（理由が、簡単すぎる！）

「ほお…なるほど」

（納得しちゃった！）

ガヤガヤと騒いでいる三人に、ドランが声をかけた

「主！あの男の体がさつきと違います！」

「え！？ていうか何も見えないんですけど！」

「お前、ちゃんと見ろよ！」四人がみたものは、さつきと全然違う鎧を身につけたガイの姿だ。

四人がみたものは、さつきと全然違う鎧を身につけたガイの姿だ。

「うおおおお！闘魂合体！」

鎧を身につけたガイが現れた。

「闘魂勇者！ヒートガイ！」

ガイは、炎の不死鳥と合体したのだ。

「スゲーー！」

「喜んでる場合じゃないぞ、いくらなんでも合体したからって全滅は難しい。俺達も合体だ！！」

「分かった！ドラン！合体だ！！」

「了解！こい！ゴルゴーン！」

ドランが言うと、地面のしたから黄金の恐竜が出てきた。

「ゴルゴン！黄金合体だ！！」

そう言うとゴルゴンという黄金の恐竜は、ドランに近づいた。
そして…

「黄金合体！」

二体は合体した。ドランの姿が、すべて黄金に染まっていく。合体が終わったと思うと、そこには、黄金に染まったドランがいた。

「黄金勇者！ゴールドラン！」

ガイ、ゴールドランは合体した姿となり次々に敵を倒していった。そして、ついに…

「くらえ！ヒートブレード！」

「ゴールドラン！こっちも必殺技だ！」

「了解！覚悟しろ！一刀両断切り！」

ガイとゴールドランの必殺技で、モンスカー達は全滅した。

「おし！全滅だ！！」

「さあ、後は戦艦を倒すだけだな。」

「よし、みんないくぞ！」

「おう！！」

キングスカッシャー

キングスカッシャーは、シラジールカンス号の元にたどり着き、戦っていた。

「勇者だが注射だ知らないが、ドン・ハルマゲ様に逆らうやつは許さん！反逆者は給料『半額』さ！どわーっはっはっはっは！」

ヒューー!

「うわっ、寒っ！これが世界のジョークなのか……」

「僕が眠っている間にこんなに凶悪な精神攻撃が編み出されてたとはビックリしたミャ……」

「精神的にダメージを与えるのが狙いだっただとは……」

「あんたのギャグ、精神攻撃とか言われてるわよ。」

「ええい！俺様のギャグを理解できないやつは全員死刑だ！」

そう言う、シラジーラカンス号はキングスキャッシャーに攻撃を仕掛けてきた。だが…

「おっと！あぶねえ。」

避けられた。

「なんだと！」

「次は、こっちの攻撃だ！シールドブーメラン！」

キングスカッシャーは、シラジーラカンス号にシールドブーメランを投げた。

「な！！くそ！」

ブーメランは、シラジーラカンス号に命中した。

「ダ・サイダー！このままじゃ、ヤバイよ！」

「ラムネス！もう一息だミヤ！」

「よし！もういつちよいくぜ！」

「ほらほら、向かってきたわよ！ダ・サイダー！」

「これ以上やらせるか！これでも、くらえ！」

すると、シラジーラカンス号はキングスカッシャーにミサイルを発射した。

「うわああああ！」

攻撃は命中してしまった。

「ああ！大変です！！イズミ！回復の魔法を！！！」

「分かりました！姫様！」

「ゴールドラン！あの魚みたいな戦艦に、攻撃するんだ！」

「了解！主！今、助けるぞ！」

「ガイ！俺達もだ！！！」

「分かった！」

「サルトビー！あなたは、攻撃をお願いします！」

「あいよ！」

「そうはいかせるか！」

シラジーラカンス号は、ミサイルを発射した。

「へ！こんなもの簡単にかわせるぞ！」

全員ミサイルをかわしたが、そこにはモンスカー達がいる。

「なんだと！」

「ハハハハ！貴様らは、モンスカー達を相手にしている！」

「ラムネス！しっかりするんだミヤ！」

「ま…負けるもんか。俺は、勇者ラムネスだああああ！」

すると、キングスカッシャーの熱血ゲージが上がり始めた。

「気力がレッドゾーンを越えたミヤ！ラムネス！サムライオンにチェンジするんだミヤ！」

「サムライオン！？」

「僕の言うとおりにするんだミヤ！」

「分かった！行くぞ！！！」

そして…

「俺は今、モーレッツに熱血してる！！チェンジ！サムライオン！！」

ラムネスが言った瞬間、キングスカッシャーの姿が変わりはじめた。それは、翼を持った黄金のライオンの姿だ。

「ガオオオオオオ！！！！！」

「うおおおお！！でりやあああ！！」

そして、全身を輝かせたサムライオンはそのまま、シラジールカンス号に突撃した。それを受けた、シラジールカンス号は煙を出し始めた。

「これがキングスカッシャーの必殺技『キングスカッシャーハリケーン』だミヤ！ラムネスの気力がレッドゾーンを越えた時に変形できるサムライオンは絶大な攻撃力を誇るんだミヤ！」

「そうか！スゲー！ゼ！キングスカッシャー！」

「よ、よくもこの俺様を！」

「観念なさい！！いつの世にも悪が栄えたためしはありません！」

「どうしてもやるなら、次はもつとボッコボコにするぞ！」

「くそおおお！腕時計じゃなくて鳩時計でもなくって覚えておけ！」

「次は、必ず借りを返すわ！！」

シラジールカンス号は、一目散に逃げ出していった。

「へっ、おとといきやがれてんだよ！」

「そうだ！そうだ！」

「ふう…なんとかまりましたな。」

「町を守れてよかったです。」

「ブイ、ハグ！」

「まっ、俺とキングスカッシャーがいるかぎり、あいつらの好きにはさせないってね！」

戦いがようやく終わった。

「助かったよ。俺だけじゃさすがに危なかったからね。」

「当然のことをしたまでですわ。困っているかたを見過ごすわけに

はいきませんから。」

「町をめちゃくちゃにしているあいつらを追い返したかったし」

「皆、無事で何よりです。町の被害も最小限に食い止められたよう
ですしな。」

「そうだな。」

すると、パツフィーが聞いてきた。

「あの…一つお伺いしてもよろしいですか？」

「いいよ、なんでも聞いてくれよ。」

「貴方は、アララ王国に伝わる伝説の勇者様なのでしょうか？」

「うーん、はつきり言うけど俺にもよくわかんない。でも、そう
んじゃないのかな。」

「ラムネスは、間違いなく勇者の血をひいてるミャ！……………まだ
半人前だけど……………」

「ま、さっきの戦いぶりを見てりや言わずもがだな」

「そのようだな」

「今日が初バトルなんだから、勘弁してよ！」

皆と話していると、パツフィーが言った。

「では、私達はこのへんで」

「え、もういつちゃうの？王様に会ってかない？」

「我々は修行中の身ゆえ、先を急がねばなりません。王様にはラム
ネス殿からよろしくお伝えください。」

「そうか、分かったよ。ところで、君達は？」

「勇者ラムネスだっけ、確か君のお城に、元の世界に帰れるマシン
なかった？」

「うーん、あったようななかったような。」

「俺達、元の世界に帰らなくちゃいけないんだ。」

「そうか、多分あったと思うよ。ココアの許可がいれば、使えると

思う。」

「そうか、ありがとう」

「それでは、皆さんまたお会いしましょう。」

「失礼いたします。」

「あばよ、駆け出し勇者さん」

「バイバイだハグ〜！」

そして、リユー使いは姿をけした。

「行っちゃったか…また会えるといいな。」

「きつとあえるミヤ！」

「そうだな……さてと、城にいかうか。」

「おう！！」

アララ城／城内部

「お帰り、ラムネス。あれ？その人たちは！？」

「この人達は、俺と一緒に戦ってくれた人なんだ。」

「あらま〜城を守ってくれてありがとうございます」

「当然のことをしただけさ！」

「れいはいらぬぞ」

「ところで、ココア」

「なんです？」

「元の世界に帰れるマシンってある？」

「ありますよ〜けど、うまく使わなくちゃ大変なことになりますわ〜」

「よし、決定！今からいこうぜ〜」

城／地下

「これが、帰れるマシンですわ」

「よし、早速いくぜ。」

ガイが言ったけど、ココアが止めた。

「ちょっと待ってください」

「どうしたんだ？」

「勝手にはいると大変なことになります。」

だが…突如マシンが壊れ大変なことになったそして、全員光に包まれた。収まるとそこにいたのは、ラムネス達だけ。

「皆!?!」

「どうやら、飛ばされてしまったようですね」

「どうするのよ!」

「しょうがないですわ」

「ということは、俺もかえれないって言うこと?」

「いいじゃない!別に」

「そんな~~~~!」

第三話 勇者と勇者！？

その4（後書き）

「次回は、地球に戻ります。」

「きたー！いよいよきたー！」

「いつとくけど、こなたの活躍じゃないからねー！」

「ええー！！じゃあ誰ー！！」

「それは、秘密」

「うわああああん！」

第四話 現れた魔竜王

緑のクライマー

「やっと、地球編です。」

「また、新キャラ登場だよ。」

「ところで、月。」

「ん？」

「なんで、前半に私達の出番がないのよ！」

「気のせい！」

「気のせいじゃない！」

ビュッ！

作者、かわす

「え！？」

「では、どうぞ！」

第四話 現れた魔竜王

緑のクライマー

アースティア／メガイア本拠地

ここは、アースティアの空に浮かぶ島『スカイ島』ここには、アースティアを管理する『メガイア』という組織の基地がある。

スカイ島／メガイア内部

「これが、クライマー達をよみがえらせる力をもっている『ファントラム・シグナム』…」

メガイア内部の奥の部屋に、一人の少女がいた。彼女の名は、リアンリ・フォーチュン。メガイアの戦闘部隊だ。「これさえあれば、キュリアの作戦はなくなるはず…」

リアンリが言ってるのは、『ファントラムシグナム』というすいしようだまよりちよつとちつちやい宝石が真ん中においてあり、その周りを石で固めてあるものだ。それらは、色事に形が違う。リアンリの目の前には、赤、青、緑、黄色の四つのファントラムシグナムがある。

「さてと、はやくもっていかなくちゃ」

リアンリがファントラムシグナムを持とうとすると、入り口の扉が空いた。そこにいたのは、メガイアの兵隊だ。

「リアンリ様！ラキア様のご命令であなたを捕まえます！！」

「ご苦労様。でも、残念。あなたに私を捕まえることはできないわ。」「なんですって！？」

「それじゃあね。」

リアンリが言った瞬間、もうその場にはいなかった。

「くっ！！逃げられた！！内部にいる戦闘員に報告だ！今、リアンリがファントマムシグマを持ち逃走中！確実に捕まえよ！」

そう言っで、兵隊もそこから出ていった。

メガイア本拠地／外部

「うふふ。ここまで来れば大丈夫かしら。それにしても、四つも持つて逃げるなんてけっこう体力使うわね……」

「そこで止まれ！リアンリ！」

リアンリが振り向くと、そこにはストーブを改造したみたいになっているロボットがいた。

「あら、けっこう早い到着だことラキア。」

「黙れ！裏切り者め！早くファントマムシグマをおいてこっちに来るのだ！」

「嫌よ！絶対これは渡さない！」

「そこまで言うか！ならば、力ずくで奪う！」

ラキアが言っで、リアンリの回りに新たなロボット達 appeared。

「くっ！！囲まれたか……」

「さあ！おとなしく俺のいうことを聞け！」

つとその時。四つのファントムシグマが光った。

「な…なにこれ」

光が収まった瞬間、四つのファントムシグマはどこかにとんでいつてしまった。

「ま…待ちなさい!!」

リアンリもその後を追いかけた。

「しまった!ファントムシグマが…」

「ラキア様!キュリア様がおよびです!!」

「うつ!まさか説教か?」

地球

「うつ…まさかここ地球?でも、立ち止まってちゃダメだ。とりあえず緑のファントムシグマを探さなくちゃ…」

東京/渋谷

「なんか、人がザワザワしているところね…それに何人か私の方見てるし。」

リアンリの服装が、地球のものと違うから回りの視線がリアンリにいく。そのなかで、リアンリの方をずっと見てる二人にリアンリが気づいた。

「あの子達、さっきからずっとこっちを見てるわね…話しかけてみようかしら。」

「ねえ、まい。さすがにずっと見てるのは失礼よ。」

「なにいつてんのよ、ゆい！だって、絶対ここにすんでないよ、あの人！」

「だからって…」

「ねえ、あなた達。」

「うわ！」

「ビックリした…」

「ああ、ごめん。驚かしちゃった？」

二人の少女に、リアンリが急に話しかけてしまったせいで二人は驚いてしまった。

「そりゃあ、びっくりするよ！」

「ところで、私達に何かご用ですか？」

「あ、その事なんだけど、あなた達ずっと私の方見てた？」

「はい、見えました。」

「どうして？」

「だって、あなたの服ここでは見たことない服なんだもん！」

「あら、そう？あたし的にはいいんだけど…」

三人が話していると、向こうの方から何人かが急いで走ってくるのに気がついた。

「何かしら、あれ？」

「おい、急げみんな！！」

「これでも急いでるよ！」

「でも、なんでそんなに急いでるの？」

「あの八神冴子が、ここに来てんだよ！早くしなくちゃ移動しちゃう！」

「おい！剣！前、前！！」
「ん？」

剣が走っていくと、前にリアンリと話していた二人の少女がいてぶつかる寸前に！！

「おわ！ぶつかる！！」

「きゃあ！」

「ゆい！危ない！！」

ぶつかる寸前に、青い髪の少女の隣にいたオレンジの髪の少女が剣を突き飛ばした。

「いつてー！何すんだ！！」

「あんたが、ちゃんと前見て走らないからぶつかる寸前だったのよ！前見て走らないあんたが悪いんじゃない！！」

「何だと、そういう女にはこれだ！」

すると、いきなり剣はオレンジ髪の少女のスカートをめくろうとしたが…

「あまい！！」 バシッ！

つといわれて、手をはたかれてしまった。

「いつてー！」

「あんた下手くそね！そういうことはこうやるのよ！」

そう言うと、いきなり隣にいた青い髪の少女のスカートをめくった。

「キヤアアアア！」

「うおっ!？」

「お!ピンクのうさぎちゃん!」

「こ…こんなまちなかで…」

「……………」

「もう!…なんで私のスカートをめくるのよ!あの子は、まいのスカートをめくろうとしたのよ!（ノノノノ）」

「別にいいじゃない、へるもんじゃないし。」

「へったかもよ…」

「どう?満足した?」

「満足するか!女が女のスカートをめくってどうすんだ!」

「俺は、満足したぞ…そう言えばさっきから吹雪さんずっと黙っていますよね。」

「そういうことに、俺は興味ないんでね。」

（クールぶってるなんかうざい…）

「なんか言ったか?美夏」

「別に…」

「ところで二人とも、なんで吹雪さんはサングラス、美夏ちゃんは眼鏡かけてんだ?」

「しっ!」

「黙ってて!」

「あのー、今吹雪と美夏って言いました?」

青い髪の少女が、聞いてきた。

「え、気のせいじゃない?」

「気のせいなわけないわ!絶対言った!」

「だから、気のせいだって。」

「なんで、そんなこと聞いてくるの?」

タンゴが聞いた。

「まあ、いいじゃない。」

（みんな、隣の人に気づいてないのかな？）

（ああ、確かに気づいてないな。あんな目立つ格好してんのに。）

つとそのとき、二人が小声で話していると美夏に誰かがぶつかってきた。

「ああ、すみません！大丈夫ですか？つて……え！？」

ぶつかった衝撃で、美夏にかけていた眼鏡がおっこつた。美夏のことを、支えようとした吹雪のサングラスもおっこつた。おっこつた瞬間、ぶつかった人がおもいきり声を上げた。

「嘘おおおお！超人氣雑誌の人氣モデル、NO・1の千樹きょうだいじゃない！！」

もちろん、その声を聞いて周りが一声に声を上げた。

「キヤアアアア！吹雪だー！」

「美夏もいるわ！」

「写メとらせて！」

「サイン、サイン！」

「や…ヤバい！逃げるぞみんな！！」

「了解！」

「え！ちよつと待って！」

「私達もいくわよ！ゆい！」

「まい！！待って！あ…リアンリさんもいきましょ」

「え！？私も！？」

「あ！！逃げたわ！！」

「待つて！吹雪！」

「美夏ー！」

全員逃げていったが、ファンの勢いは止まらない…。

第四話 現れた魔竜王

緑のクライマー

「まさか、かがみんのけりをかわすなんて…」

「ふっふっふこう見えても、空手を習っていたんでね。」

「くっ!」

「では、次その2です!」

「感想よろしくね。」

第四話 現れた魔竜王

緑のクライマー

「やっと、こなた達が出てきます。」

「まさか、吹雪さん達がモデルだったとは…」

「いがいよね…」

「まあ、とりあえず」

「「スタート!」「」」

第四話 現れた魔竜王

緑のクライマー

前回のあらすじ

アースティアから来た謎の少女…しかし、そんなことを無視して地球の人大騒ぎ。さらには、吹雪達が追われてる！？

東京／半壊

「はあはあ…ここまで来れば大丈夫だな。」

「兄ちゃん、誰も追っかけてないよ。」

「なあ、吹雪さん。なんで追っかけられてたんだ？」

「そ…それは」

「ええ！！あんた知らないの！？」

突如、後ろから声が聞こえてきた。そこには、さっきの少女達がいるた。

「なんだよ、お前らかよ。」

「なんだとは失礼ね。早く名前を覚えなさいよ、大牙剣！」

「な…なんで俺の名前を知ってんだよ！」

「私達は剣の親戚なの。鉏路のおじいさんに言われて東京に来たの。」

「親戚！？お前らが！？」

「あたしは神代まい！！こっちが」

「双子の姉の神代ゆいよ。よろしくね。」

「あ、かがみさんとかささんと同じ双子だ。」

「そつよ…ってその前に、あなた美夏よね。」

「ふえ！？」

「そして、そっちの男の子は吹雪でしょ！」

（ギクツ！）

「図星！わぁ！感激！こんなところで、この二人に会えるなんて！」

「本当にラッキーだわ！」

「なあ、そんなにこの二人は有名人なのか？」

「あつたりまえよ！この二人は超人気雑誌のNO・1のモデルなのよ！」

「ええええええええ！」

「本当何ですか、吹雪さん！！！」

「ああ…本当だ…」「ごめんね、今まで黙ってた。（笑）」

「笑、じゃねえよ！なんで、言ってくれねえんだよ！」

「だって、しょうがないじゃない。あなた達に言ったら絶対、八神冴子にあわせてって言うじゃない。」

「え！？八神冴子にあわせてくれんの！」

「バカ！お前なんで言ってるんだよ！そんなの『あわせてあげる』と一緒にじゃないか！」

「あっ！！！」

「なあなあ！会わせてくれんのか！」

「ちよつと、うるさい！！あんたらは下がって！」

まいに、突き飛ばされた二人だった。

「「いつてー！」」

そして、吹雪達にむかってこういった。

「お願いします！！サインください！」

「ずるいわ、まい！！私にもください！」

「兄ちゃん、どうする？」

「うん。まあ、二人だけならいいか。……………はい、

どうぞ」

まい達の気迫に負け、吹雪達はサインをあげた。

「わーい！超ラッキー！」

「まさか、ここで会えるなんて。」

はしゃいでいる二人はほつといて、剣達の方は…

「なあなあ、リアンリさんってどこからきたんだ？」

「明らかに、この人じゃないよね。」

「えっと、それは……」

リアンリに質問攻めだった。

「こらっ！！」

ゴン！

吹雪に、げんこつをくらわせられた二人。

「そんなに、一気に質問するな！困っているだろう！！」

「そうだよ、二人とも。」

「ちえ、分かったよ。」

とそのとき…

ぐ~~~~~~~~

なにやら、変なおとが聞こえてきた。

「……………なんだ今のおと……」

「誰かのお腹なっただ？」

「俺じゃないよ」

「俺も」

「あ…あたしよ……」

そのおとは、リアンリの腹の虫がなっただおとだった。

「リアンリさん、まさかなにも食べてきてない？」

「……………（こくん）」

「う…どうしよう、なんか食べ物あつたっけ？」

「おい、美夏」

「ん？どうかした？」

「たしかさっき買ってきた〇〇〇ドーナツのドーナツなかったか？」

「あるよ、30こくらい」

「それあげる。」

「あ、そっか。それがあつたか。ちよつとまってる」

美夏はすぐにてに持っていた箱をあけ、そこからドーナツをとりだした。

「はい、どうぞ。リアンリさん！-」

「これは…？」

「ドーナツですよ？知らないんですか？」「ええ、アースティアの方にはこんなのないから。」

「アースティア？」

「ええ、あ…一個もらっていいかしら？」

「え…あつ、はい。どうぞ」

そう言うと、リアンリは人気のドーナツ。○○○リングを食べた。
そして……

「美味しい！！こんなの初めて！」

「そりゃあ当然ですよ！だって、リアンリさんが食べたものの人気の○○○リングですもの。」

「ねえ、他のもいい！？」

「どうぞ！いっぱい食べてください！！！」

「やった！！じゃ、いただきまーす！！モグモグ……」

リアンリは、○○○リングを食べたもので、すっかりドーナツが大好きになった。そして、10分後……

「あー、美味しかった！」

リアンリは、30このうちの10こを食べてしまった。

「そ…それはよかったです……」

あまりにも、たったの10分で10個を食べてしまったリアンリに美夏はあどすさり。

「（よく、こんな短時間で食えるな……）」

「（ドーナツが一気に減っちゃったな）」

「（……………）」

「吹雪さん、どうかしたんですか？」

「いや、なんでもない……。さっき言ってたアースティアってなんだ？しかもあっちの方にはないだろ？まさか、こいつ……」

吹雪がずっと黙っていると…

「あ、いたいた。おーい吹雪さん、美夏ちゃん、剣くん、タンゴくん！」

後ろから、声が聞こえてきた。そこには…

「おつ、こなた達か間に合ったみたいだな。」

「危うく、遅れそうになったけどね…」

「まあまあ、お姉ちゃん」

「ちよつと、そこはふれないでおきましょう」

こなた達が話していると、吹雪があることに気づいた。

「なあ、みゆき。その手に持っているのはなんだ？」

「あ、これですか？」

みゆきが見せたのは、緑の水晶玉を石で固めてあるものだった。それを見た瞬間リアンリは驚いた。

「（あれは、ファントムシグマ！）」

「へえーきれいだな。ところで、どこで拾ったんだ？」

「ちょうどこっちに向かうとき近道として、そんなに暗くない森を通ったんです。そのとき、わたしの足元にあっただんです。」

「ふん。」

みゆきが言っているとき、リアンリが話しかけてきた。

「ねえ、あなた。」

「はい？」

「それ、ちょっとあたしに…」

そのとき！

ゴゴゴゴゴ…

なにやら変なおとが聞こえてきた。

「な…なんだ！！」

「みんな見て！！あそこ！」

美夏が指を指した方向をみんないつせいにみる。そこには、北海道にいたときに出てきた不気味な岩があったのだ。

第四話 現れた魔竜王

緑のクライマー

「次回、バトルです。」

「どうなるのかな」

「そして、みゆきの持っていたものがすごいことをおこす……」
「感想待ってるよ！」

第四話 現れた魔竜王

緑のクライマー

「いよいよ、バトルです。」

「はつきりいつて、味方増えてないね。」

「まあ、しょうがないんじゃない？」

第四話 現れた魔竜王

緑のクライマー

前回のあらすじ

こなた達と合流した吹雪達だが、その瞬間地響きとともにあの釧路でみた不気味な岩が現れた。

突如現れた不気味な大岩。地響きが大きくなり建物などは、どんどん壊れていってしまう。ちょうど取材に来ていた冴子はいきなりの出来事に驚いた。

「（あ…あの岩は、釧路にも現れた大岩…なんで、東京に！？）テレビを見ている皆様！見えますでしょうか！？あの、釧路にも現れた大岩がこの東京に現れました！！突然の出来事でたくさんの被害者が出ております！！」

冴子が言っていると、大岩の近くにバイオアーマー姿のドル・サタンが現れた。

「ほう…封印の岩の方は、もう出ているみたいだな…これも、ドラゴ様の力がたまってきたている証拠だな…よし…早く人間の血と悲しみをあげなくては…ゆけ！メタルナイトよ！」

すると、サイボーグの兵士達が出てきた。

「まだまだ！！お前らもゆけ！アトラス！」

今度は、釧路で戦った不気味な鬼みたいなものが出てきた。

「さあ！人間どもに恐怖を与えるのだ！」

メタルナイトとアトラスはいっせいに建物を破壊しにいった。

「兄ちゃん！どうする！？」

「今は、避難するんだ！ここにいちや、危ない！！」

「くそっ！ドラゴ帝国のやつらめ！」

「君達も！」

「ええ！！」

「はい！！」

が、そのときみかがあることに気づいた。

「大変だよ、兄ちゃん！リアンリさんがいない！」

「なんだって！」

辺りをみまわしても、リアンリの姿はない。

「どこにいったんだ！」

「とにかく、みんな急いで！リアンリさんは後で見つけましょ！」

「わかった！」

吹雪達は、その場を離れていった。

一方、その頃…

「美夏達と、はぐれたわね…でもちようどいいわ。」

そう言うと、リアンリはポケットからブローチを取り出した。

「さすがに、あいつらのすきにはさせたくないわ。もしかしたら、ファントマムシグマをとられてしまうからね…」

そして、リアンリが持っていたブローチが虹色に光だした。

「来なさい！！レインボークリア！！！！」

リアンリのかけ声とともに、全身が白でおおわれた魔法使いみたいなロボットが現れた。杖の先には、さつきリアンリが持っていたブローチと同じ虹色の宝石が光っている

「な・・・なんだ！あれは！？」

「知らなくてもいいわ、あなたは今から私たちに倒される運命だからね！」「なんだと！生意気を言う奴だ！やれ！メタルナイト、アトラス！」

一斉にメタルナイト達が、リアンリに襲いかかってくる。だが、リアンリは平然とした顔だ。

「そんな攻撃で勝てると思っているの！？」

その瞬間杖の先の虹色の輝きが、赤とオレンジ色の輝きに変わった。それだけじゃない、レインボークリアはさつきまで白だったのに、輝きと同じ色の赤とオレンジ色に変わっていった。

「くらいなさい！ファイヤーメテオバーン！」

レインボークリアは、全身に炎を包みそのままメタルナイト達にぶつかっていった。

「……………!？」

「ギャオオオオ！」

メタルナイト達はあっけなく、倒されていった。

「なに！？あの大群を倒しただと！？」

「さあ！観念しなさい！！」

「くっ！！生意気な！だったら、もっと出してやる！」

ドル・サタンがいった瞬間、さっきより多く敵が出てきた。

「なんですって！？」

「ハハハハハハ！観念するのは、貴様のようだな！」

「くっ！！この大群は一人では、無理だわ！！」

つとそのとき！

「観念するのはお前達だ！」

「む、誰だ！」

声がしたほうを向くと、四体のロボットが現れた。現れたロボットは、マジンガーZ、ダイアナンA、ライジンオー、そして何か戦いに向いていないロボットだ。

「失礼だな、作者！このボスロボットをなめるな！」

「ボスの言つとおりだ！」

「そうだ！そうだ！」

え、皆さん。この戦いに向いていないロボットは、ボスボロット
つと言っそうです。

「たく、作者なんだから、ちゃんと書けや!」

ああ!? てめえ、出番なしにするぞ。

「すいませんでした。」

よろしい。

「なあ、ボス。さっきからなに独り言をいつてるんだ?」

「いや、別になにもいってねえぜ。」

「そうか。」

「ちよつと、あんた達!」

「ん?」

「ちようどいいところにきたわ。あたしと、一緒に戦いなさい!!」

「おお、ずいぶんと強い言い方だな。」

「いいから、早く!!」

「分かった!!」

「おせっかいなやつは迷惑だからな。一緒に戦うぜ!」

仁が言った『迷惑』という言葉に、アークダーマーが反応した。

「メイワク…オセツカイナヤツは…メイワク…」

アークダーマーは邪悪獣になった。そして、ビルの上に現れた。もちろん、そんなことを無視するわけがない仁達は、ビルのほうを見た。

「な…なんだあいつ！」

「ハッハハハ！正義のみかたオセツカイザー！」

「正義のみかた？」

「オセツカイザー？」

「どう見ても、正義のみかたに見えない…」

「ジュワッ！」

オセツカイザーは、ビルの上から飛び降りて、メタルナイト達のところに着地した。

「ええい、メタルナイトよ！そいつを、倒せ！」

メタルナイト達は動こうとしたが…

「ハッハハハ！オセツカイザー！」

あっけなく、オセツカイザーにやられてしまった。ただの、キックで…

「強い…」

「一応、味方でいいのかな？」

「いいと思うぞ。」

「ええい、こうしてはおられぬ。そいつらまとめて血祭りにしろ！」

メタルナイト達は、一気にマジンガー達を攻撃しにいった。

リアンリVSアトラス達

リアンリは、アトラス達と戦っていた。

「たく、なんでこんなにいるのよ。めんどくさいわね！」

敵が多いため、現在不機嫌状態だった。

「敵が多い数の時は………これね。」

なにやら、考えが浮かび上がったらしい。

「さあ！あなた達と戦うのは、これで終わりよ！フォームチェンジ！グリーンクリア！」

すると、レインボークリアは、赤とオレンジから今度は、緑に変わっていった。杖の先も、緑色に輝いている。

「くらいなさい！ローズマジカル！」

杖からバラのむちがでてきて、アトラス達を閉じ込めた。バラのおりだ。

「そのなかにいると狭いでしょ？大丈夫！！今あなた達ごと燃やしてあげる！！フォームチェンジ！ファイヤークリア！」

そう言っで、またさっきと同じの赤とオレンジになった。

「これで終わりよ！メテオクラッシュ！」

唱えたあと、巨大な隕石がアトラス達が閉じ込められてるバラのおりにむかって、落ちてきた。バラのおりは、見事に焼けなかにいたアトラス達も倒された。

「やりい！」

マジンガー達VSメタルナイト達

「くそつ、多すぎじゃないか…」

マジンガー達は、メタルナイト達と戦っていたが攻撃しても全然減らない。

「まだまだ！アイアンカッター！」

「ダイアナンミサイル！」

「ライジンフラッシュ！」

「ボロットパンチ！」

「ハッハハハ！オセツカイザー！」

五人は、いつせいに攻撃したがやっぱり減らない。

「くそつ、どうすりゃあいんだよ！」

一方、その頃…吹雪達は、

「大変だよ、このままじゃみんなやられちゃうよ！」

「分かってる、けど今は安全な場所に移動しなくちゃ！」

「くそつ、ドラゴ帝国のやつらめ！」

「おい、剣！俺達は、俺達で避難しとくから、吹雪さん達と一緒に戦いにいってくれ！」

「なにいつてんだ、タンゴ！」

「いいから、早く！！仲間を放っておいていいのか！」
「けど！！」

「……………よし、タンゴの言いたいことは分かった！！」

「え！？なにいつてんだよ！吹雪さん！！」

「タンゴの言うとおりだ、このまま、仲間を放っておいていいのか
剣。」

「……………いいのか、タンゴ……」

「おう、おもいつきり暴れてこい！」

「まかせろ！」

「んで、こなた達は、どうする？」

「私達は、シャイニーの中で応援してるよ。」

「よし、いいな美夏？」

「うん。」

「そうと決まりやあ、行くぞ！」

「「おう！！」」

三人は、マジンガー達のところに走っていった。そのあとを、こなた達は追いかけていった。

一方、マジンガー達は、

「くそつ、もはやこれまでか……」

敵の数が多すぎて、苦戦している。リアンリの方も残りのアトラス達を片付けているため、まだ時間はかかりそうだ。

「ハハハハハ！情けないな、貴様ら！お遊びは終わりだ…死ね！
！」

メタルナイト達がいつせいに、マジンガー達を攻撃しにいった。そのとき！

「ちょっと待ったー！！」

どこからか、声が聞こえてきた。

「今まで、よくもさんざん街を壊してくれたな！」

「次は、お前達が倒される番だぜ！」

「覚悟しなさい！！」

声がしたほうを向くと、剣達がいた。

「剣！」

「美夏ちゃん！」

「吹雪さん！！それにこなたさん達！！」

「うつほ、美人揃いだな！」

「吹雪さん！美夏ちゃん！準備はいいか！」

「おう！！」

「OKよ！」

「よし、行くぞ！」

そう言つて、剣は手のひらを上に上げ、吹雪はネックレスを外し、美夏はブレスレットを上に上げ、こうさけんだ。

「こおい！ライガー！」

「現れよ！スノークライマー！」

「降臨せよ！シャイニー！」

三人は、光に包まれた。中から出てきたのは、獣のロボットと、氷

のロボットと、船だ。

「ライガー、イン！」

ライガー達は、マジンガー達のところに降り立った。

「来てくれたのか！」

「ああ！ちょうど、東京の観光をしていたんだ！」

「そう言えば、剣は北海道出身か。」

「おしゃべりは、そこまでしておけ来るぞ！」

「現れおったな、ライガーめ！やれメタルナイト！」

サタンの命令で、メタルナイト達がいつせいにきた。

「お前達の好きにはさせない！！ライガーソード！」

「スノーアーチェリー！」

「シャイニングレーザー！」

「大車輪ロケットパンチ！」

「ダイアナンミサイル！」

「ライジンソード！」

「ボロットプレッシャーパンチ！」

「ハッハハハ！オセツカイザー！」

八体の攻撃で一気に敵はいなくなっていた。

「おし！もう少しで全滅だ！」

「みんな頑張れ！」

「ここは、俺にまかせろ！スノーブリザード！」

スノークライマーの攻撃で残りの敵は、すべて凍っていった。

「おっしゃあ！もういっちょ！ライガーソード！」

ライガーの攻撃で残りの敵はあと一体となった。

「おしつ、最後はまかせろ！」

「仁くん、ライジンソードスタンバイOK！」

「ライジンソード！とりゃあああ！決めてやるぜ！ゴットサンダー
クラッシュ！」

最後は、ライジンオーの攻撃でとどめとなった。

「絶対無敵！ライジンオー！」

敵の姿は、ほとんど見えない。全滅だ。

「おのれえ！ライガーどもめ！」

「さあ！次はお前の番だ！」

しかし、そんなライガーを見つめる影が…

「ほう…あれがライガーか少しは楽しめそうだな…」

遠くからライガーを見つめていた影は、いきなり叫んだ。

「魔竜王ドルガよ！我がもとにきたれ！」

突如、光に包まれ中から出てきたのは竜にたようなロボットだった。そして、いきなり…

「はぁ!!」

「うお!!」

ライガーを攻撃したのだ。

「な…なんだお前!!」

「このバイオアーマーの名は魔竜王ドルガ!ライガーよ貴様の力ためさせてもらうぞ!!」

「なんだと!!」

お互いに、火花を散らし激突する二人。だが、ライガーの方が負けているような気がして、吹雪はライガーのほうに向かった。

「剣!今助けるぞ!!」

「待て、吹雪!!」

「俺達も行くぜ!!」

だが、そのとき!

「ローズカッター!!」

いきなり、バラの花びらが吹雪達を足止めた。そして…

「ローズマジカル!!」

吹雪のところだけ、イバラが出てきた。そして、吹雪はバラのおりに閉じ込められた。

「なんだ、これ!!」

「やっと見つけたわ!スノークライマー!!」

吹雪を足止めしたのは、リアンリだった。

「な…なんでこのロボットの名前を知っている…！」

「そんなことは、どうだっていいわ！早く、そのロボットを渡しなさい…！」

「なんだと！」

「私にとっては、そのロボットは大事なものの…！あなたが乗るものではないわ…！」

「ふざけんな！誰が渡すか！」

「じゃあ、痛い目にあってもらうわよ！ローズブリザード！」

吹雪が閉じ込められてるおりの中で、いつせいにバラの花がスノークライマーを襲った。

「ぐわああああ！」

「吹雪さん…！」

「おっと、あんた達は、そこでおとなしくしてなさい…！フォームチェンジ！サンダークリア！ライトニングクラッシュ！」

フォームチェンジをしたクリアは、今度は黄色になりいつせいに、仁達に雷のこうげきを与えた。

「うわああああ！」

「キャアアアア！」

一方、シャイニーの中では…

「美夏ちゃん！なんで動かないの…！」

「今、動いたら確実にやられます。どつかですきを与えなくちゃ、勝てません！」

「そ…そんな」

「私達に出ることは、ないの？」

「祈るだけです…」

「私達にも力があればいいのに…」

「私も、吹雪さん達を助けたいです…！」

「しょうがないです。今は本当に見守るだけです…」

だが、誰も気づいていないところがあつた。みゆきがポケットに入れているファントムシグマが、小さい緑の光を出しているところを。

第四話 現れた魔竜王

緑のクライマー

「次回、ついにみゆきが活躍します!!」

「え!? 私じゃないの!」

「我慢しなさい、こなた」

「そんなあゝ!」

第四話 現れた魔竜王

緑のクライマー

「いよいよ、この話も終了です。」

「みゆきさんが活躍するところをみたいよ」

「半分ショックを受けてるわね…」

第四話 現れた魔竜王

緑のクライマー

ちなみに現在こんな状況

マジンガー、ボスボロットダイアナン、ライガーVSドルガ
(だが、せいしきに戦っているのは、ライガー。ダイアナンは遠くで見守っている)

ライジンオー、シャイニー、スノークライマーVSレインボークリア
(現在、スノークライマーがとられライジンオー達は、動けない状態)

マジンガー、ボスボロット、ダイアナン、ライガーVSドルガ

ライガーはドルガの攻撃に苦戦していた。同じくマジンガー達も苦戦中。

「くっ……強すぎる……」

「なかなか、すぎがあたえられない……」

「こりゃあ、ヤバいぜ……」

「ふっ……どうやらここまでのようだな……だがまずは、ライガーではないロボットを倒すか……行くぞ！」

「や……ヤバい！」

ドルガはマジンガー達に攻撃を仕掛けてきた。

「ハハハハハ、死ね!!」

「仲間を殺らせるか!ファイヤー!!」

間一髪のところ、ライガーがファイヤーライガーへと変身した。

「何!？」

「うおおおお!!」

ファイヤーライガーは、ライガーソードでドルガを攻撃した。

「くっ…なかなかやるな…」

「大丈夫か!甲二さん達!!」

「ああ!助かったぞ!」

「どうだ!ドルガ!」

「ふっ…では、こちらも本気を出すでしょう…ドルガ・チャージ・ドラゴン!」

ドルガのてにしていた盾が光出した。そして…

「ギャオオオオ!!」

光が晴れるとドルガの姿がさっきまでと違う姿に変わっていた。その姿は、ドラゴンだ。ドルガのドラゴン形態、ドルガドラゴンである。

「姿が変わったと!？」

「お前が何に変わろうが俺は負けない!」

ファイヤーライガーはドルガドラゴンに立ち向かったが、圧倒的に

押されていった。

「パワーが違いすぎる…」

ドルガドラゴンはファイヤーライガーの肩に噛みついた。

「ぐわああああ！」

「剣！」

「我慢しろよ、剣！プレストファイヤー！！！」

マジンガーのプレストファイヤーの攻撃で、ドルガドラゴンがファイヤーライガーから離れた。

「ぐっ！」

「剣！大丈夫か！」

「うっ…うーん。」

「ちょっと、ヤバいな。さやかさん、修理を！！！」

「ええ、分かったわ！！！」

「なるほど、今は十分に戦えないな…勝負はお預けだ、ライガー！」

「待て…逃げる気か…」

「それまで死ぬなよ！」

ドルガドラゴンは羽ばたいていった。

「ま…待て…」

「剣くん、じっとしてて！」

「あっちの戦いが終わるまでもてよ！」

ライジンオー、シャイニー、スノークライマー、VSレインボーク

リア

一方、スノークライマー達の方も苦戦していた。

「くっ…くそ…仁…大丈夫か…」

「ああ…なんとか…」

「あらあら、もうおしまい？」

「なんだと…」

「さあ、おとなしくまけをみとめなさい！」

「絶対やだね！」

「このロボットを渡すもんか！」

「たく、あっちの船は一步も動いてないのに、あんた達は時間ばかりそうね。」

「うるせえー！絶対渡すか！ブリザードアタック！」

「ライジンフラッシュュ！」

「何度やったて無駄よ！ライティングクラッシュュ！」

二体は攻撃するが、リアンリの雷攻撃に負けてしまった。

「ぐわああああ！」

「うわああああ！」

最終的には、二体とも倒れてしまった。

「くそ…」

「兄ちゃん！仁！」

「さあ、どうするの！」

「だめだ、吹雪さん！！渡しちゃだめだ！」

「ああ！そうするつもりだ！」

「……………どうやら、本当にやられてほしいみたいね……………」

すると、レインボークリアから一気に光が溢れ出した。

「な…なんだ!!」

光が収まると、吹雪達の上に千本も越える針があった。しかも一個、一個に電気がたまっている。

「なんだよ…これは…」

「これが、イエロークリアの必殺技…サンダーニードル…電気がたまってる針は千本いじょうあるわ…これをくらったものは必ず死ぬ

…」

「「!？」」

「嘘だろ…」

「俺達、死ぬのか…」

「もう一度聞くわ…渡すか渡さないか…どっちを選ぶの？もちろん、渡すならこれをとく…渡さないなら一気に降ってくるわよ…さあ、選んで」

「……………」

「吹雪さん……………」

一方シャイニーの中では、

「どうしよう!!…吹雪と仁が死んじゃう!!」

「美夏ちゃん!!」

「分かってます!!…でも、この場で動いたら私達も死んじゃいます!!」

「そんなあ!!」

「一体、どうすればいいのよ!!」

「……………大丈夫です。」

「「「え!？」」「」「」

「吹雪さん達は死にません絶対……」

「み……みゆき？」

「みゆきちゃん？」

「みゆきさん？」×2

と、そのとき！

ピカアアア！

いつの間にか、みゆきを取り出していたファントムシグマが大きな緑の光を出した。

「な…なに！？」

「ふえ！いつの間にだしてたんですか私！？」

「（自覚なし！？）」

緑の光は収まらなかった、もちろんその光は、リアンリ達の方にもわかるくらい輝いていた。

「な…なんだこの光は！」

「この緑の光…まさか！」

「みゆき、これはなあに！」

「わ…私にも分かりません！」

「」「ええええええ！？」「」「」

緑の光は次第に大きくなっていき、ついにはみゆきをのみこんだ！！

「きゃあ！」

「光が！！」

謎の世界

「ここ…ここは？」

気づいたら、みゆきは緑の光のなかにいた。

「わ…私どうしてこんなところに…」

すると、どこからか声が聞こえてきた。

「あなたが、フラワークライマーに選ばれたものね」

「だ…誰ですか！？」

すると、みゆきの目の前に小さな妖精が現れた。

「あ…あなたは？」

「私は、フラワークライマーの番人、リーフ」

「フラワークライマーの番人、リーフ？妖精じゃなくて？」

「まあ、妖精でもあるわ」

「私、なんでこんなところに…」

「あら、気づいてないの？あなたは、フラワークライマーに選ばれたのよ？」

「フラワークライマー？」

「そう、あなたの持っているその、ファントムシグマが証。」

「この石が…そんなに貴重なものだったなんて…」

「その、ファントムシグマがあなたを選んだのよ。仲間を救いたというあなたの願いだね。」

「でも、私なんかにできない…」

「大丈夫、私がサポートにまわるわ。それに、あなたの友達もクライマーに乗っているのだから。」

「なんで…吹雪さんのことを知っているの？」

「うふふ、私はあなた達のことを知っているわよ？高良みゆきさん。」

「！……！」

「ふふ、そうとう驚いているみたいね。さてどうする？乗るか乗らないか、決めるのはあなたよ？」

「………私、乗ります！……みんなを助けたいです！！」

「ふふ、さすがフラワーに選ばれたせんしね。いいわ、ついてきて」

みゆきはリーフに着いていった。
しばらくして…

「ここは？」

「フラワークライマーが眠っているところよ。それをあなたが目覚めさせるの。」

「私が…」「そうよ……ファントマムシグマを使ってね。」

また、リーフのあとについていくと、今度はスノークライマーと同じくらいのかさで、いろは緑と色とりどりの花がモチーフとしたロボットがいた。

「これが、フラワークライマー……」

「ええ、そうよ。さあ、ファントマムシグマをそこにはめて。」

フラワークライマーの目の前には石碑がおかれていた。ちょうど一部分がへこんでいたため、ファントマムシグマをそこにおいた。

コトツ…

ファントムシグマは見事にはまった。すると、

ピカアアア！！

またもや、緑の光が出てきた。

「きゃあ！」

「今こそ目覚めよ！フラワーライマー！！」

リーフがそう言うと、緑の光は三人を包み込んだ。

現実世界

またもや緑の光が現れた。しかも、今度はスノークライマー達の近くに。シャイニーの中では、かがみたちが慌てていた。

「みゆきー！どこにいったの！」

現在、みゆきがいなくなっていたのだ。

「おかしいなあどこにもいない。」

「お姉ちゃん！そとみて！」

「ん、なあにつかさ、ってうわっ！」

突如現れた緑の光に、かがみは驚いた。

「な…なにあれ…」

「分かりません…でも、あの光は…」

「さっきのみゆきさんが、持っていた石の光とにているね」

「（あの光…今日の夢にも出てきた…前だってほとんどが夢どおり…一体なんなのこのちからは…）」

一方リアンリ達の方は、

「な…なんだこの光は！」

「緑の光だ…」

「まさか！ファントムシグマが誰かを選んだわけ！」

みんながいろいろしゃべっていると、緑の光が収まり中から何かが出てきた。

「あ…あれは？」

中から出てきたのは、スノークライマーと同じくらいのでかさで、いろは緑と色とりどりの花がモチーフとしたロボットだ。

「うそっ！フラワークライマーが目覚めたなんて！」

「俺と同じクライマーがいるのか！」

「はあ！？あんたそんなことも知らないの！とりあえず、そのロボットに乗ってるやつは誰！！そっこう渡しなさい！！」

「させません！あなたには、ここから出ていってもらいます！！」

「あれ…その声どつかで聞いたことのあるような…」

「あんたは、黙ってて！！しょうがない力ずくで奪う！千本の電気針！その緑のロボットを攻撃しなさい！！」

吹雪達の上にあった針がいつせいに、緑のロボットのほうにきた。

「来るわよ、みゆき！」

「はい、参ります！！フラワーカッター！」

一気にいろんな花が、はりを折っていった。最終的には、針は一本もなくなった。

「そ…そんな…イエロークリアの必殺技が破られた…」

「これで、終わりです！フラワーグランドスマッシュ！」

いつせいに飛び散った花達が、リアンリの方に向かった。

「くっ！なに！？」

「ハアアアア！！」

花達が、リアンリを包み込みそのまま爆発した。

「キヤアアアア！」

レインボークリアはやられた。

「スゲー！」

「あの、みゆきが…」

「すごいよみゆきさん！」

「お見事ね！！」

「くっ…まさかここまでなんて…」

「無駄です。絶対にあなた達にクライマー達は渡しません！」

「くっ！いい気にならないでよ！次こそは、絶対に！」

そして、リアンリは消えていった。

戦いが終わったのだ。

メタルナイト達が倒されたあとあの不気味な大岩は、消えていった。そして、遠い場所にいたサタンは、

「なんということだ、封印の岩が消えるなんて、くそっ、次は必ず！」

そして、サタンも消えていった。

「なんとか片付いたわね。」

「ハ―ハッハッハッ！オセツカイザー！」

「うるさいな、兄ちゃん、こいつぶつとばしていい？」

「やめろ、美夏。こんなところで、ぶちギレるとまちにひがいでる。」

「チッ。」

「（舌打ちした）」

「オセツカイザー！」

オセツカイザーはその場から去っていった。

「あつ、逃げた！！」

「別に逃げたわけではないみたいだよ。」

「そうだな……」

東京／市外

「やったな、剣！！」

「ああ！でも、ドルガに殺られそうになったときはヒヤヒヤしたぜ。」

「ちょうど、俺が助けて上げたお陰だな。」

「調子に載らない！！」

「俺も、ビックリしたぜ。クライマーを渡せって言うからな。」

「でも、一番すごかったのはみゆきさんでしょ……！」

「はい？」

「そうよ！だっていつもおとなしいあのみゆきが、ロボットに乗ったなんて！」

「ふふふ、良かったじゃないみゆき」

「うわっ！ビックリした！」

「妖精だ！！」

「あれ、皆さん見えるんですか？」

「初めまして、フラワークライマーの番人のリーフよ」

「やっぱし、あのロボットはクライマーだったのか。」

「まさか、他にもクライマーがいたなんて……」

「みんな、安心していてもいいけど注意も必要よ。これからどんな強敵が現れるかわからないからね。」

「大丈夫だぜ！俺達は一人で戦っている訳じゃないからな！仲間がいるし！」

「そうだよ！僕達には、いろんな味方がいるよ！」

「仁もたまにはいいことを言うよな！」

「たまにはは余計だつつうの！」

すると

「お話の途中で、申し訳ないけれど私も話に混ぜてくれないかしら。」

声がしたほうを向くと、

「や…八神冴子！？」

「冴子さん！どうしてここに！？」

「あら、美夏に吹雪久しぶりね。」

「ども。」

「やっぱし、有名人の友達是有名人だな……」

「初めまして、貴方がライガーに乗っている大牙剣くんね」

「はっ、はい！！って、なんで俺のことを？」

「美夏に全てをおしえてもらったのライガーのこと、ドラゴ帝国のことを」

「美夏ちゃん…なぜ…」

「いいじゃない、サインもらえるチャンスを与えてあげただけよ。」

「だからって…」

「あら、サインほしくないの？」

「ほしいです！！」

「タンゴ…お前…」

「お年頃よね」

「はあ…」

「私はあなた達に聞きたいことがあるの。いいかしら？」

「いいわよね、みんな。」

「もちろん！」

「ドラゴ帝国についてのお話は私達がします。」

「近くに私の別荘があるからお話はそこでしましょう。」

そして、吹雪達は、冴子の別荘へと向かった。

第四話 現れた魔竜王

緑のクライマー

「次回は第五話に突入！」

「分岐にはしないの？」

「あたしの気分で。」

「……………」

第五話 登場！光の戦士

忍者は変身ヒーロー！？

その1（前書き）

「またまた、あの戦士が登場します。」

「新しい仲間も増えるんだね」

「なんか、ごちゃごちゃになりそうね」

冴子の別荘

吹雪達は、冴子の別荘に来ていた。途中で地球防衛組のクラス全員も合流してきた。

「おお、すげえ別荘！」

「ああ、冴子さんの別荘に来れるなんて夢見たい！」

「きららったら、そんなに嬉しいの？」

「当たり前よ！」

「ホントに素敵なところね」

「みゆきさんもそんな感じじゃない？」

「そうだと思います」

「俺達にとっては、普通だな」

「そうだね」

「（さすが、セレブ！思っていることはみんなと違うー！）」

「八神財閥のご令嬢だもん！」

「セレブっていいな」

「さあ入ってリビングでゆっくりお話しましょう。」

そして、リビングへ中に入っていた吹雪達。リビングへ着いたとき吹雪達は話を始めた。

「なんですって！？邪神ドラゴの復活！？」

「はい。それを防ぐのが善神アーガマの末裔である大牙家と神代家の使命なんです。」

「ということは、剣はご先祖様からライガーを託されたというわけ

か？」

「ええ。アーガマの遺産を動かせるのは獅子の一族にしかできないと伝えられています。」

「剣の右手にある痣は獅子の一族の証拠ってわけ……」

「なんかすごいね」

「獅子の一族……この痣にそんな意味があったのか……」

「今日みんなと話ができてハッキリしたわ。祖父の遺した論文は正しかったのね。」

「どういうことですか？」

「私の祖父は生涯を掛けて邪神復活の研究をしていたのよ。祖父の研究は馬鹿げた迷信だとほとんどの学者から無視され続けたけど、邪神ドラゴは実在したわ。」

「じゃあ、その論文に何か重要なことがかかれているかも」

「邪神ドラゴの復活とあの大岩の関係とか」

「祖父の論文では、『封印の岩』と記載されているわ。遙か昔に善なる神と邪悪なる神が戦い邪悪なる神が閉じ込められた岩……。それが封印の岩よ。」

「封印の岩……あの中に邪神ドラゴがいるのか……」

「おそらくね……。でも、ドラゴ帝国はどうやって邪神ドラゴの封印をとこうとしているのかしら。」

「私達にもそこまでは分からないよね」

「言い伝えには、ありませんでした。」

「とりあえず、ドラゴ帝国をやつつけりゃあいこどだろう？」

「そういうことになるね」

「まっ、なんとかなるだろ！」

そして、一同はそとへ出た。

「あれ？吹雪さん達はどこへいくんだ？」

「俺達は青空町にいくんだ」

「まっ、そういうこと」

「え！？吹雪さん達って青空町出身なの？」

「正確にいうと違うところなんだけど、お母さんが『まんがいちの
ために』ていって、青空町に予備の家を買ってくれたんだ。」

「だから、ここから近い青空町にいくってわけ」

「（予備の家があるなんて…）」

「（恐るべし、セレブ！）」

「こなたさん達も？」

「うん、さすがにゆーちゃんとお父さんに心配かけたくないからね。」

すると

「じゃあ、吹雪達。明日もしくるんだったら、別荘じゃなくて『春
風町』に来てくれる？」

「どういうことですか？」

「私達の転入先は『春風小学校』なんです。」

「へー、そうなんだ。」

「剣やタンゴの転入手続きもしないとね」

「いや、そんなに急いで学校行かなくても…」

「そうだよ」

「ダメよ！どうせあんた達学校の成績悪いんでしょ！」

「はあ！んな分けねえだろうー！！」

「じゃあ、試してみる？」

突如、美夏がそう言った。

「国語、算数、理科、社会どれの問題がいい？」

「すいませんでした。」

「えっ、つまんないのー」

「あの一、一つ質問していいですか？」

マリアが聞いてきた。

「うん、いいよ。」

「あなたは、小学生なの？」

「うん、そうだよ。小六だよ。」

「ええええええ！？」

この場にいた、こなた達以外が叫んだ。

「おい、美夏いくぞ……」

「あつ、待って兄ちゃん……じゃあね！！みんな！！！」

吹雪と美夏は行ってしまった。

「私達も帰ろうか……」

「そうね……」

「みなさん、さよなら！」

「また明日……！」

こなた達も帰って行った。残されたメンバーもそれぞれ帰って行った。

翌日／青空町

「たく、なんでお前はいつも高校生に間違えられるんだよ。」

「しょうがないじゃん。こんなに背がでかいんだから、間違えられるのは当然だよ。」

「いばって言うな。」

吹雪達は、こなた達と一緒に春風町に行くため待ち合わせをしていた。

「て言うか、こなた達遅いな。」

「何かあったのかな？」

一方そのころ…

「ギャー！遅刻だー！」

「こなたが起きないのが悪いんですよ！」

「早く、行こうよー！」

「待たせるのは、悪いことですよ。」

「みんな、走って！」

こなた達は、遅れて走っていた。んで話は遡り…

青空町ノ山

ここは、青空町の裏山。ここで二人の忍者が走っていた。

「待てー！虎太郎！！」

「ヘッヘー！誰がまつかよ！」

ちなみに最初に喋ったのが、藤兵衛。その次に喋ったのが、虎太郎である。

「たあーっ！」

藤兵衛は手裏剣を投げる。虎太郎は木に捕まって避けようとするが

枝が折れる。

「げっ、やばっ！落ちるー！」

ドン！！

「いてて…」

「修行の途中で逃げ出すなど、忍者一筋400年、霧隠家の長男として恥を知れ！」

「父ちゃん！今日は野球の試合があるんだよ！忍者の修行はまたあとでいいじゃん！」

「えーい！貴様は、忍者の修行より、球遊びのほうが大事だと言うのか！」

「大事だよー！」

「何をいう！そんなことでは、青空町に物の怪が現れたとき、立派に戦えんぞー！」

「ただの、小学生の俺がなんで戦わなきゃならないんだよ！」

「かー、情けないー！陽昇町で物の怪と戦った、地球防衛組はお前と一学年しか変わらないではないか！」

「地球防衛組は関係ないし！あいつらは、高学年だから戦えんだよ！とにかく、俺は野球のほうが大事なんだよ！」

と言って、虎太郎はそのまま逃げ出した。

「こら！待て！虎太郎ー！」

藤兵衛は虎太郎を追いかけた。そして、ある石碑の前までやって来たのであった。

「追い詰めたぞ虎太郎！！忍法木っ端微塵！くらえ！」

藤兵衛は、爆弾を投げた。

「おっと！」

虎太郎はよけた。だが、爆弾は石碑の前で爆発した。

「むう…お前がよけるから岩に当たってしまったではないか！」

「爆弾投げた父ちゃんが悪いんだろ！て言うか、実の息子に何爆弾投げてんだ！！危ないだろ！」

「そんなの、知ったことか！逃げるお前が悪いんだ！！」

「たく、父ちゃんには付き合ってられないよ！」

と言って、虎太郎はまた逃げ出した。

「こら！またにげるきか！」

だが、そうはいつていらなかった。石碑が割れ始めたのだ。すると…

「ふふふふ…ハハハハハハ！！遂にわが封印は解かれた！！！！！」

破壊した石碑から無数の龍の首が現れた。

「我が名は暗黒魔界王ゴクアーク！！我が力で人間界を闇に包み、地上を大魔界に変えてくれるわ！！」

「そうはさせん！」

「何！？」

そこへ現れたのは、仁達にライジンオーを託したエルドランであった。

「貴様はエルドラン！」

「魔王ゴクアークよ。この私がいる限り地球を好きにはさせん！私が貴様を封印する！！大人しく闇の世界に戻るのだ！！」

「うわーっ！！」

「魔王、再び闇に帰るがよい！」

エルドランの放った攻撃によってゴクアークは石碑に吸い込まれてしまった。

「くっ！！おのれエルドランめ！行け！！我が僕ヤミノリウス――一世！！人間界を混乱に訪れるのだ！！！！」

「おまかせください、ゴクアーク様！闇の大魔導士たるこの私が必ずやこの世を大魔界に！」

「必ず果たせ！よいな！！」

「ははーっ！」

ヤミノリウスは飛び去った。エルドランもそれに気づいて追いかけた。

一方そのころ…

青空町／虎太郎の家

「虎太郎君、遅いね。」

すると、虎太郎の姉、かすみがでてきた。

「ごめんね。」

「かすみさん」

「やっぱり虎太郎のやつ、父さんと山へ行ったみたい」

「また忍者の修行？」

「多分ね」

「まったく！今日は大事な試合があるって言うておいたのに！！」

「鷹介君は野球の後に学習塾、そろばん塾もいくの？大変ね」

「塾休むとママが怒るんだ」

「本当は、ラムネ君も誘おうとしたのにまさかなくなっちゃうなんて」

「勇太のいう通りだな。」

「ラムネ君一体どこに行っちゃったんだろう？」

すると虎太郎がやってきた。

「おーい！力哉！！鷹介！！勇太！！」

「虎太郎君だ！！」

「悪い。待たせたな。」

「待たせたな、じゃない！！もう少しで遅刻だったぞ！」

「父ちゃんを巻くのに大変だったよ。それより力哉、いいバット持つてるじゃん！！」

「へっへっへ、買ったんだ。高級品だぞ」

「うつひゃー、見せて見せて！振らせて！いいなー。ホームラン！」

「まっ、未来のプロ野球選手としてはそれくらい、いいバットを使わないとな。………小遣い全部無くなっちゃったけど……」

ゴン！！！！！！

何かがぶつかったおとがした。ふりむくと、虎太郎が電柱にぶつくてバットが曲がっていた。

「痛つてえ!!」

「あーっ!曲がった…」

「あー悪い悪い」

「虎太郎…」

「高いわりには弱いねこれ…(笑)」

「虎太郎(怒)!!!」

力哉は、虎太郎にコブラツイストをくらわしたのであった。

「わざとじゃないって!!痛たた!!」

「はい、そこまで!ほら、早くいかないと試合に遅れちゃうよ。力哉くん。」

「で、でもバットが…(泣)」

「一流選手は道具を選ばない!」

「そつ、選ばない選ばない!」

ゴン!!

かすみは虎太郎を殴った。

「お前がいうな!!」

「痛てえよ、姉ちゃん!それよりも千夏、今日の試合のヒーローはこの俺だからかつこよく撮ってくれよな」

「試合で活躍すれば新聞記者としてとってあげるけど無理よね」

「はっはっは。たかが学校新聞のくせに」

「なんですって!!」

「何だよ!!」

「まあまあ、喧嘩はそれくらいにしてそろそろ行こうよ。」

「それじゃあ、かすみさん失礼します。」

「頑張ってきてね！」

第五話 登場！光の戦士

忍者は変身ヒーロー！？

その1（後書き

「次、その2に続きます。」

「次回は、ひさびさのあの人が出てくるんじゃない？」

「登場回数少ないと思うわよ」

第五話 登場！光の戦士

忍者は変身ヒーロー！？

その2（前書き）

「この話は、ロボットをてにはいる話です。」

「まさか、あの人に娘がいたなんて…」

「こなた、失礼よ。」

「そういえば、勇太って今ブレイブポリスのボスなんだよな。」

「うん、そうだよ。…あんまり納得できないんだけど…」

「でも、スゲーじゃん！小四でそんな風になれるなんて！」

「そうよ！虎太郎とは大違いだわ！！」

「何だと！！」

「何よ！！本当のこと言っただけじゃない！！」

「なに！！」

「また、始まった…」

「こいつらは、よく喧嘩するよな…」

「喧嘩するほど仲がいいんだね。」

「仲良くなんかない（もん）！！」

「ハモった。」

「やっぱ、仲いいな。」

そして、五人が歩いていると、前からジープが走ってきた。

「なんだ、あの車？」

「あれは、桂のこの車よ。」

「なんか、また嫌み言われそう…」 「勇太、お前いつもそう思っているのか…」

「そりゃ、そうだよ。あの人格悪いもん。」

「バツサリ言っただけ。」

「勇太くんも言うわね。」

そして、ジープは五人のすぐそばに止まった。そこで、顔を出してきたのは、

「あら、あんた達暇そうね。」

武田長官の娘、桂だ。虎太朗達と同じクラスメイトでもある。

「人を勝手に暇人扱いするな！」

「それは失礼。ところで、これから防衛隊のパレードがあるんだけど、どう見に来ない？それに特等席で見れるわよ。」

「そっか、桂さんのお父さんは防衛隊の長官だもんな。でも、俺は遠慮しとくよ。野球の試合があるし」

「俺も。」

「そう、じゃあ鷹介君と勇太くんはどうする？」

「うーん、僕はやめておくよ。」

「じゃあ鷹介君は？百合香ちゃんも来るわよ。」

「えっ！！百合香ちゃんも！？あつ…でも、僕も野球があるからやめるよ。」

「なんだ、みんな来ないのか。残念だな。」

「はい！！私いきます！！」

と言うと、千夏はジープに乗り込んだ。

「おい！千夏！！お前野球の試合に来るんじゃないのかよ！」

「野球の試合より、防衛隊のパレードのほうがいい新聞記事になるわ！！という事で、頑張んなさい。」

「じゃあ、千夏だけつれていくわ。」

「じゃあね。」

と言って、ジープはまた走り出した。

「くそっ！千夏のやつ！！」

「しょうがないよ、防衛隊のパレードを特等席でみれるんだもん。野球の試合よりいい記事になるよ。」

「ああー！ーっ！」

急に勇太が大声を出した。

「きゅ…急になんだよ！勇太！！」

「グローブとバットを虎太郎君家に置いてきちゃった！！」

「ええええええ！！！！」

「悪いけど、みんなは先にいってて！」

と言つて、勇太は虎太郎ん家に向かった。

「どうする？」

「勇太のいう通りに先に行つてよう………ってもうこんな時間だ！急がないと遅刻になっちゃう」

「よし！！いつもの近道を通ろうぜ！！」

三人はいつもの近道を通ることになった。そして…

ドーン！！

三つの光の玉が地面に落下した。

「な、なんだ！？」

「じ、地震か！？」

「地震じゃないよ！近くでなにか落ちたみたいだよ！」

後ろをふりむくと、煙が上がっていた。

「UFOか隕石だ！行ってみようぜ！！」

「うん！！」

「ま、待てよ！うかつに近づくと危ないぞ！！」

三人は、光が落ちた先へと向かった。そこに着くと、そこに虎型、象型、鷲型のロボットがあった。

「すっげえ！！こいつ、ロボットだぜ！！」

「こ、こんなのハリボテだ！！」

「わーっ！！」

「うわーっ！！」

虎太郎が脅かして、力哉は固まってしまった。

「へへ、怖いんでやんの。」

「こんのー！！ってあれ鷹介は？」

「ん？あれ、鷹介〜！」

「二人とも、ここだよ！！」

「なんだよ、いないじゃないか！」

「ちがうよ！鷲型のロボットのなかにいるんだよ！」

「ええ！！」

「これ、乗れるみたいだよ！虎とか象にも乗ってごらんよ！！」

「乗ってごらんよってお前…」

「よーし！！俺は虎のロボットに乗ろー！」

と言って、虎太郎は虎型ロボットに向かって乗った。

「うおーっほほ。ひゃーっ、かつこいい！さあ、発進だ！！ガオー！！」

「お、お前ら！そんな怪しいもんにのつたら危ないだろ！！」

「へえー、やっぱり力哉怖いんだ。弱虫だなー。」

「はあ！弱虫だと！それに怖くなんかないやい！そんなに言っなら、俺は象のロボットに乗ってやる！」

と言って、最終的に力哉も象型ロボットに向かって乗った。

「どうだ！！乗ってやったぞ！！」

「通信もできるみたいだよ。」

「感激い！！」

とその時、

「あれ？」

モニターにエルドランが写された。

「私の名はエルドラン」

「すいません！虎太郎が、虎太郎が乗れって言ったので。」

「俺がいつ乗れって言ったんだよ！自分から乗ったんだろ！！」

「やめなよ、二人とも！謝れば許してくれるよ！！」

そして、鷹介はエルドランに謝罪した。

「ごめんなさい。すぐ降ります。」

「私の名はエルドラン」

「え？」

「私は太古の昔より地球を守ってきた戦士エルドラン」

「は、はあ。」

「私は今、暗黒魔王との戦いのため動くことが出来ない。子供達よ、君達が私の代わりに大魔界の魔の手からこの地球を守って欲しい。」

「大魔界？」

「そう、大魔界から地球を守るのだ。頼んだぞ、地球の子供達よ。」

「は、は……………そんなこといきなりたのまれても…」

「地球を守る？」

「あん？」

「君達ならできる、君達とガンバルガーならば、頼んだぞ、地球の子供達よ！」

するとエルドランは消え、ブレスが三人の腕に装着された。その瞬間ロボットが消えた。

「あれ？消えちゃった。」

「おい、二人とも見てみるよ！俺達の腕！」

三人の腕にはブレスがつけられていた。そして、携帯パソコンみたいなものもあった。

「この携帯パソコンには、そのブレスの使い方が載っているよ。」

「おおっ本当だー！」

「ふむふむ…なるほど……………すごいよ、このブレスレット！これでさっきのロボットを呼び出せるし、僕達も変身できるみたいだよ！」

「マジかよー！どうやって変身するんだ？使い方教えてくれー！」

「何やってんだー！二人とも！そんなことより、これからどうするか考えるべきなんじゃないのか！？」

「そんなの決まってるじゃん！！レストラン？いやエルなんとかだっけ？」

「虎太郎君エルドランだよ。」

「おお、そうだ、そうだ！！エルドランに言われた通りにガンバルガ！ってロボットに乗って大魔界のやつらと戦うんだよ！」

「冗談だろ！！」

力哉は二人の陽気さに頭を抱えていた。

一方そのころ…

街ではヤミノリウスが町の様子を見ていた。

「フム…この世界には魔界獣の材料になりそうなものがたくさんあるではないか。まずはこの町から大魔界に変えてくれるわ！！」

そして、ヤミノリウスは自身の杖で魔方陣を作り出した。そして…

「ゾイワコノイワコマカイヤゾイワコ、暗く果てない魔界の地より今こそいでよ我が前に…ハズラムサライヤ！！」

すると、魔方陣から様々な魔界獣が現れた。

「やれ、魔界獣達よ！大魔界の力で人間世界を混乱させるのだ！！」

ヤミノリウスの命令によって魔界獣達は暴れ始めた。そして、遠いところから見ていた吹雪達は…

「なんだあれ！？」

「邪悪獣じゃないよ！」

「また、新たなてきか!？」

そして…

「吹雪、美夏ちゃん」

後ろから声が聞こえてきた。こなた達だ。

「ごめん、遅くなって!!」

「そんなことはいい!それよりもあれを見る!!」

吹雪は魔界獣のほうを、指差した。

「な、何あれ!!」

「新たな敵!？」

「邪悪獣と見た目がちがうよ!」

「とにかく、このまま野放しにはさせません!リーフ!!出番です

!!」

「はい!!」

「そう言っと思ったぜ!いくぞ美夏!」

「ラジャー!!」

みゆきは、ファントムシグマ。吹雪はネックレス、美夏はプレスレットを取り出した。

「咲き誇れ!フラワーライマー!!」

「目覚めよ!スノークライマー!!」

「降臨せよ!シャイニー!!」

すると、その場に緑の巨大なロボット、氷の巨大なロボット、そし

て、大きな船が現れた。

第五話 登場！光の戦士

忍者は変身ヒーロー！？

その2（後書き）

「武田長官、出番すくなー!!」

「まあ、いいじゃん!!」

「逆ぎれするな!」

「次回はバトル編です。」

「話そらした!!」

第五話 登場！光の戦士！ 忍者は変身ヒーロー！？

その3（前書き）

「いよいよ、バトル！！」

「楽しみだな」

「楽しみなのはあんただけでしょ！」

第五話 登場！光の戦士！ 忍者は変身ヒーロー！？

その3

吹雪達は、それぞれロボットをだし魔界獣退治へと向かった。

「ん？なんだあのロボット達は？」

「とおりや！！」

「だあ！！」

「やあ！！」

吹雪達は、次々と魔界獣を倒していった。そして、それを見ていた虎太郎達は…

「な、なんだよ！あの怪物！！」

「もしかして、あれがエルドランの言っていた魔界獣！？」

「じゃあ、他のロボットは？」

「あれ、たしか、陽昇町を助けたロボットじゃない？」

「そんなことは、どうだっていい！俺達もあのロボット達と一緒に戦うぞ！」

「うん！！」

「俺は戦わないぞ！！」

「え！？」

「なんでだよ！力哉！」

「俺になりたいのは、プロ野球選手だ、ヒーローじゃない！」

「そんなことは、関係ないだろ！それに地球を守らなくちゃ、プロ野球選手になれないんだぞ！」

「う…っ」

「それに、町のひとを守らなくていいのかよ！みんな大変なことに

「なっちまうぞ!!」

「……………分かった…」

「え!？」

「虎太朗のいう通りだ、確かに地球を守らなくちゃプロ野球選手になれないしな、それに、町のひとを危険なめに会わせたくないしな。」

「…
「ということとは？」

「俺も戦うぞ!」

「おしっ!よく言った!力哉!」

「でも、どうやってさっきのロボットを呼び出すんだ?」

「「あ…」」

「呼び出すための道具は分かってるんだけど…」

「なら、鷹介!すぐに調べてくれ!!」

「うん!!」

鷹介はすぐに、呼び出すための方法を調べ始めた。一方そのころ、虎太朗達と別行動をしていた勇太は…

「な、何あれ。見たことない敵!!」

「おそらく、新たな敵だな」

「うわっ!ビックリした。いるならいるって言ってよ、デッカード。」

「…」

「もちろん、さっきから俺はお前の後をついていっていたんだが…」

「ぜ、全然気づかなかった。ってそれよりも、あのロボットの手助けをしなくちゃ!!」

「…
「ということとは?」

「うん!!デッカード!あの敵達を倒しにいつてくれ!」

「おお!さすがブレイブポリスのボス!!だが、他のやつらはどうするつもりだ?」

「あ…っ、考えてなかった。まあ、いいよ！とにかく急いで！」
『おう！！』

こうして、デッカードは魔界獣達を倒しにいった。んで、防衛隊のパレードの方と言うと、

「パパ！何あれ！！」

「む！敵か！それにあれば陽昇町を救ったロボットではないか！ええい、こうしてはおられぬ！我々も出動だ！！」

「パパ！頑張ってきてね！！」

「桂はここにいろ！！お父さんのりりしい姿を見ていてくれ！！」

「うん！！」

「長官、大変です！」

「なんだ、どうした！」

「あの敵に、全員やられてしまいました！！もはやあのロボットに託すしかありません！」

「何だと！！」

「そんな〜！」

「仕方ない、桂！！お友達と一緒に安全なところに逃げるぞ！！」

「うん！！千夏、逃げるわよ！！ってあれ？千夏〜！」

千夏はその場からいなくなっていた。

「さてはまた、単独行動しているわね！」

そして、吹雪達の方は、

「マジカルフラワー！！」

「スノーアーチェリー！！」

「シャイニングリング！！」

三体は、魔界獣を結構減らしていった。

「よし！！後もう少しだ！」

「でも、疲れたよ」

「ちよっとキツイですね…」

そうとうな数で、吹雪達の体力は限界に近づいていた。

「三人とも、頑張つて！」

「でも、ムリだよ」

その時！！

『とおりやあー！』

デッカードが吹雪達のもとにたどり着いた。

「あ、ブレイブポリスのデッカードだ！」

「こなた、よく覚えていられるわよね…」

「私には真似できないな」

『ボスから話は聞いている。一緒に戦うぞ！』

「おう！！よろしくたのむ！」

「これで一安心だね」

「では、皆さんもう一度攻撃です！！」

「」「」「おお！（ええ！！）」「」「」

デッカードが参戦したお陰で、魔界獣の数はあつという間に少なくなっていた。だが…

「ええい、たかが四体のロボットにてこずりおって！こうなったら、もっと増やしてくれるわ！！ハズラムサライヤ〜！」

ヤミノリウスの魔法によって、魔界獣がまた増えてしまった。

「くそつ、また増えやがった！」

「どっかで、操つてる人物がいると思うんだけど…」

『だが、この数は半端ないぞ〜！』

「どうすればいいのですか〜！」

そのころ、虎太郎達はと言うと…

「おい、また増えたぞ〜！」

「鷹介！まだかよ！」

「もうちょつと待ってて〜！」

いまだに調べ中だった…

「……………あ、分かったよ〜！」

「本当か!？」

「ブレスのボタンを押してみて。」

「なんか掛け声必要か？」

「うゝん、とりあえず、フラッシング！ていつてみたら？」

「よし、いくぞ〜！」

そして、虎太郎達はブレスのボタンを押した。

「フラッシング！」

すると、三人はそれぞれイエローガンバー、ブルーガンバー、レッドガンバーと姿を変えた。

「スゲー！」

「ほ、本当に変身した。」

「次はロボットを呼ぼう！カードをプレスに差し込んで！」

「おお！」

そして、三人はカードをプレスに差し込んだ。

「スクランブル！」

すると、青空公園の下から、虎のロボットゴウタイガーが、交差点から驚のロボットマツハイグルが、団地から象のロボットキングエレファンが発進し、イエローガンバーはゴウタイガーに、ブルーガンバーはマツハイグルに、レッドガンバーはキングエレファンに乗った。

「スゲー！」

「なんだ、あのロボット……」

「虎に、驚に、象のロボット？」

「虎太郎君、このロボットは人型にもなるよ！」

「よし、一気にいくぞ！！ミラクルチェンジ！」

すると三体は人型へと変型した。

「姿が変わった！？」

「おっしあ、いくぜ！！」

「ええい、こしやくな！魔界獣そいつらを倒せ！」

すると、魔界獣は三体のほうを攻撃してきた。

「うおっ！いきなりかよ！こっちは初心者なんだぞー！」

「鷹介！なんとかならないか！」

「ちよつと待つて……………すいよ、この

ロボット！合体できるみたいだよ！」

「合体？」

「うん！！虎太郎君！カードをコマンダーに入れて！」

「分かった！！」

そして、虎太郎はカードをコマンダーに入れた。

「ガンバルガー、ミラクル合体！！！！！！」

すると、三体は合体しガンバルガーとなった。

「が、合体しただと！？」

「スゲーぜ！本当に合体したぜー！！」

「これがエルドランの言っていた、ガンバルガーだよー！！」

「合体すると、ガンバルガーになるのか…」

「よし、いくぞー！！」

ガンバルガーは、魔界獣を倒しにいった。

「いくぞー！！ガンバーソードー！！」

一気に三体の魔界獣をソードで切りつけた。

「おっしゃあー！！」

「虎太郎！あのロボット達の援護をするぞ！！」

「おう！！」

「君達は味方なのか？」

「ああ、味方だぜ！！」

「なら一緒に戦えるわよね！！」

「はい！一緒に戦いましょう！！」

「よろしくお願いいたします！！」

「こちらこそ！」

『みんな！おしゃべりはそこまでにしろ！来るぞ！！』

魔界獣がいつせいに虎太郎達の方に向かってきた。

フラワークライマー、デッカード、シャイニーの方

「よかったです。仲間が来てくれて。」

「でも油断はできませんよ。」

『それもそうだな』

「デッカード！聞こえる！？」

「勇太！？」

「良かった、間に合った！」

「どうして、ここに！？」

「ビルドタイガーを連れてきたんだ！！他のみんなは住人のみんなを避難させている！二人で頑張つて！」

「了解！」

勇太の命令でブレイブポリスのビルドタイガーが出動した。

「よし、デッカード合体だ！」

「了解！」

「ブレイブアップ・ジェイドッカー！！」

すると、勇太が操縦していたジェイローラーとデッカーが合体し、ジェイドッカーへと合体した。

「みんな、一気に片付けるぞー！！」

「おお！」

「はい！！！」

「任せな！！」

「ジェイバスター！！」

「タイガーキャノン！！」

「フラワーカッター！！」

「シャイニングレーザー！！」

次々と攻撃し、残る数は一体となった。

「では、ここは私におまかせください！！」

「みゆきさん、ファイト！！」

「これで終わりです！！フラワーグランドスマッシュ！！」

フラワーライマーの必殺技で、デッカーの方の魔界獣はいなくなつた。

「おしっ！！」

「や、やりましたー！」

「スゲーぜ！」

「みゆきさん、すごいー！」

スノークライマー、ガンバルガーの方

「それにしても、こいつらはなんなんだよ……」

「こいつらは、魔界獣！人間世界を大魔界にしようとしてるやつらの手下だ……！」

「何だと！？ドラゴ帝国、ジャーク帝国に続いて地球を狙うやつが増えたな……だったらなおさら、倒す……！ブリザードアタック……！」

「ガンバーフレアー……！」

2体の攻撃で、残る数はわずか四体。

「俺は三体倒す、お前は最後の二体を倒せ……！」

「分かった……！」

「いくぞ……！スノーアイシングクラッシュ……！」

スノークライマーの必殺技で、残り一体となった。

「虎太郎！今だ……！」

「おお……！」

ガンバルガーは持っていた象の顔をした盾からリングを投げ、敵を封じ込めた。

「よし、ガンバーソード……！」

ガンバルガーはソードをかまえ敵の方に向かった。そして……

「ガンバーファイナルアタック……！」

敵を両断した。

「元氣爆発ガンバルガー!!」

「おっしゃあ!!」

「虎太郎君すごい!」

「ナイスだ!! 虎太郎!」

「へへへ、どんなもんだい!!」

第五話 登場！光の戦士！ 忍者は変身ヒーロー！？

その3（後書き）

「実は次もバトル編です。」

「途中で、話が変わるみたいだね。」

「でも、次回でバトルの途中までは終わるんじゃない？」

第五話 登場！光の戦士

忍者は変身ヒーロー！？

その4（前書き）

「今回、この話が終わったら一旦区切り、別の話に行きます。」

「確か、舞台は春風町だったよね」

「区切るなんて、めんどくさいわね…」

「おのれ…魔界獣をすべて倒すとは…」

「見つけたぞ！この騒ぎはお前の仕業か！」

「む、なんだお前は…！」

「覚悟、妖術つかい！」

突如、藤兵衛が現れヤミノリウスを攻撃した。それを見つけた、鷹介は、

「見て、おじさんが誰かと戦っている…！」

「なに、父ちゃんが!?」

「とにかく、助けにいくぞ…！」

虎太郎達は、ガンバルガーから降り藤兵衛のもとへと向かった。

「父ちゃん…！」

「父ちゃん？まさか、お前虎太郎か!?」

「今だ…！リーザカービック…！」

ヤミノリウスは赤い光線を出し藤兵衛に当てた。

「なっ！ギアアア…！」

「父ちゃん…！」

「ワン!?」

「なっ！父ちゃんが犬になった！」

なんと、光線を浴びた藤兵衛は犬になってしまったのであった。

「そら、お前達にもかけてやる!!」

ヤミノリウスは赤い光線を、今度は虎太郎達の方に当てた。

「うわああああ!!」

だが…虎太郎達は、光線を浴びたのに犬にはならなかった。

「な、なぜだ、なぜ犬にならん!だが、光線を浴びたなら呪いはかったはず!お前達の正体が誰かにバレたとき、必ずや犬になるだろう!!では、さらばだ!!」

「あ、待て!!」

ヤミノリウスは、逃げていった。

「今のつて、大魔界の人だよね」

「ああ、多分な」

「父ちゃん!!大丈夫か!」

「ふう、全くひどい目にあったワイ…」

「しゃ、喋れんのかよ!」

「僕達も、正体がバレたら犬になっちゃうのかな。」

「犬になるなんてまっぴらごめんだぜ…」

「これから、どうなることやら…」

すると、ジェイデッカー達の所に、ベルセブが現れた。

「ふつ、新たなロボットがいるな。」

「ベルセブ様、どうすんだ?」

「もちろん、ワルーサ様からいただいた、新たな力をやつらに見せるのだ。」

「ちょうど、ライジンオーはいないようですだ…」

「では、まずあのロボット達の力を見てみるとするか…」

すると、邪悪獣エキゾーストが何体も出てきた。

「な、あれは邪悪獣!？」

「まさか、こんなときに出てくるなんて。」

「空気読めー!」

「とにかく、三人とも!!早く来て!」

「分かった!!二人とも、ガンバルガーに戻るぞ!!」

「うん!!」

「父ちゃんは俺達と一緒に来てくれ!!その方が都合がいい!!」

「分かったぞ!!」

虎太郎達は急いで、ガンバルガーの方に戻った。そして、戦闘が再開された。一方そのころ、

「すごい!何かしらあのロボット!ビルドタイガーと胸の虎のマークが一緒じゃない!しかも、他の三体は陽昇町を守った有名なロボット!これは、いい記事になるわ!特ダネ、特ダネ!!」

千夏は、こっそり桂達の所を抜け出しビルの上で写真をとっていたのだ。それを聞いていた鷹介は、

「あれ?シャッター音が聞こえる。」

「俺は聞こえないぞ。」

「俺も。」

「変だな、ん?あ、ビルの上に千夏ちゃんがいる!!」

「なに!?!」

「あいつ、なにやってんだよ!!」

「ワシが連れてくる! お前達は戦いに集中してろ!!」

「いや、父ちゃんがいつたら怪しまれるぞ!!」

その時、千夏がいたビルの付近にエキゾーストが現れた。そして、エキゾーストはビルを攻撃した。ビルは崩れ落ち、千夏も落ちてきた。

「キャアアアア!!」

「千夏——!!」

間一髪、ガンバルガーが千夏を受け止めた。

「ふう〜危なかった。」

「おい、千夏! 大丈夫か!」

「う〜ん、特ダネ、特ダネ…」

「気絶してるね。」

「ま、無事でなによりだ。」

だが、ガンバルガーは回りにいたエキゾースト達に囲まれてしまった。

「しまった! 囲まれた!」

エキゾースト達に攻撃されそうになったその時!!

「やらせるかよ! ライジンフラッシュ!」

ライジンオーが現れ、エキゾースト達を倒した。

「大丈夫か!？」

「ライジンオー、地球防衛組だ!！」

「ぼけっとしてると、邪悪獣にやられるぞ!！」

「仁!！」

「来てくれたのですね!！」

「ナイス、仁!！」

「へへ!！」

そして、虎太朗達は千夏を藤兵衛に預けるために、その場を離れた。千夏を藤兵衛に預けた後ライジンオーとガンバルガーは、話をしていた。

「そのロボットは？」

「このロボットはガンバルガー!エルドランからもらったんだ!！」

「エルドランから？」

「確か、地球防衛組のみなさんもライジンオーをエルドランからもらったんですね。」

「ああ、これからよろしくな!！」

「こちらこそ!！」

「おい、みんな!話もいいがそろそろ戻れ!！」

「うわっ!犬がしゃべった!！」

「と、とにかく行こう!！」

「「「「お、おう!」「」「」「」

だが、このもの達だけではなかった。光の戦士からもう一体のロボットをもらったものは…

第五話 登場！光の戦士

忍者は変身ヒーロー！？

その4（後書き）

「次回、またまたあの光の戦士登場！」

「はつきり言ってるあの人が、何もやってないよね……」

「確かに……」

第六話　またまた登場光の戦士！新たな光のロボ！　その1（前書き）

「今回は、新しい物語です!!」

「春風町だね!!」

「いつかは、また青空町に戻るのよね…」

第六話　またまた登場光の戦士！新たな光のロボ！　その1

吹雪達が青空町で戦っているころ、春風町ではこんな事が起こっていた。

春風町

「んじゃ、学校行ってくる！！」

一人の少年が勢いよく、家を出た。少年の名は、峯崎拳一。春風小学校の六年生だ。そして、拳一の目の前に、

「拳一君、おはよう！！」

「よっ！拳一！」

「おはよう！！浩美、星史！」

二人の少年がいた。一人は、遠藤浩美。もう一人は、高杉星史。二人とも、拳一と同じ六年生だ。

「ふわあ」

「拳一君、寝不足なの？」

「ああ、まあな」

「なに、お前。受験勉強でもしてんの！」

「ええ！！勉強嫌いの拳一君が！？」

「なんだよ、受験勉強してちゃ悪いのかよ。」

「そんなことないぞ。」

「じゃあ、本当に受験勉強してたの！？」

「んなわけねえよ!!」

「じゃあ、本当の理由はなんだ？」

「えーっと、それはな〜（ん、待てよ。もし、ここで凄く怖い夢を見たなんて言ったら笑われるかも。どうする!!）」

「ねえ、本当の理由は？」

「ハッハッハ。子供にはわからねえよ!」

「あんただって、まだ子供でしょ!!」

「「ビクッ!!!!」」

後ろを振り向くと、そこには拳一達と同じ小学校のしのぶ、久美子、ひかるがいた。

「あ、おはよう!朝岡さん、田辺さん、香坂さん!」

「おはよう、浩美くん。」

「あれ?今日は桜小路さんは休みなの？」

「螢ちゃんは、風邪で休みなの。」

「へ〜、そうなんだ。」

「おい、もうちょっと離れて歩けよな!」

「ひかるもだぞ!」

「へ〜、女の子と歩くの恥ずかしいんだ〜。拳一と星史君はまだまだ、子供ね〜。」

「本当ね〜。」

「そういう、しのぶもまだ子供だろ!」

「ひかるもだろ!」

「そうよ、まだ私子供よ?悪い?」

「星史には言われたくないわ!!」

「何だと!」

「なに!」

「また、始まったよ…」

「よく、やれるわね。ケンカなんて…」

四人がケンカしているのにあきれている、浩美と久美子。と、その時後ろから声が聞こえてきた。

「こら！！峯崎拳一！高杉星史！何朝つばらから、女の子をからかっ
つてんのよ！」

後ろを振り向くと、そこには神代まいと、ゆい、そして見たことない少年二人がいた。

「出たな！！！」

「男女3号！！！」

ゴン！×2

「だれが、男女よ！！！」

「あ、まいちゃん、ゆいちゃんおはよう」

「おはよう。クーコ」

「いつてえ〜。」

「いたたたた…」

「自業自得よ！！！」

「反省しなさい！！！」

「ん？後ろにいる二人はだれ？」

浩美は、まい達の後ろにいた二人を指差した。

「ああ、この二人は今日からわたし達と同じ組に転入してくる二人よ。」

「え〜と、大牙剣です…」

「俺は団五郎だぜ。」

「へー、転入生なんだ。私朝岡しのぶ。よろしくね。」

「私は香坂ひかる。よろしく!」

「ちなみに別名は、男女1号と…」

「男女2号だぜ。」

ゴン! × 2

「「だれが、男女なのよ!」」

まったく反省してない二人であった。

「それにしても、拳一君。何で、そんなに眠そうなの?」

「別に何でもいいじゃないか!」

「まさか、あんた…いい年してオネシヨしたんじゃないでしょうね
…」

「ええ!」

「うっそー!」

「違うつて! オネシヨじゃねえよ!! スツげえ怖ー夢見たんだよ!
町も人も自分の体も、機械になっていく夢!」

「「ええ!」」

拳一の発言に、浩美としてのぶは驚いた。

「みんな、機械になる夢…」

「それって!」

と、その時。みんなの後ろに恐竜のロボットが現れた。だが、見えているのは拳一、浩美、しのぶだけ。

「うわあああああ！なんだあれ！」

「でたあああああ！！！」

「な、なによあれ！！！」

「三人とも、どうしたの？」

「なんか、いるのか？」

「クーコ、後ろ、後ろ！！！」

「みんな、後ろ見て！」

「その前に、逃げるぞー！」

そして、全力で逃げていく三人であつた。三人がいったあと、恐竜のロボットは消えた。ちょうど、その時に後ろを見たみんなは、

「なんだよ、なにもいねえじゃん！」

「転入初日に騙したのか？」

「演技がうまいな」

「三人とも、変なの。」

「本当にすごい演技だったわね………あれ？三人は？」

「全速力で走っていったわよ。」

「拳一はともかく、浩美君としのぶちゃんまで演技するなんて。」

「なんだか、変な感じ。」

「まっ、ほつといて学校にいきましょ。入学式そうそう遅刻なんて、まっぴらごめんだから。」

「まあ、学校のこと忘れていなければいいけど……」

そうして、星史達は学校へと向かった。

第六話　またまた登場光の戦士！新たな光のロボ！　その1（後書き）

「確か、今回は少なかったです…」

「文字がね。」

「スランプよね。」

「次はちゃんとします。」

第六話　またまた登場光の戦士！新たな光のロボ！　その2（前書き）

「さあさあ、あの光の戦士がまたまた登場！」

「いよいよだねー！」

「でも、バトルじゃないから。ロボットをもらつてころでしょ？変な期待しない！！」

「……………」

「では、どうぞー！！」

第六話　またまた登場光の戦士！新たな光のロボ！　その2

一方そのころ、逃げていった拳一達は、

「はあはあ、どうだ。追いかけてきてねえか？」

「だ、大丈夫みたいだよ」

「一体、なんだったのかしら、あれ。」

とその時！！

ドン！！

行きなり、二つの光が落ちてきた。みると、もくもくと煙が上がっている。その煙から、なにかが出てきた。

「な、なんだ！」

中から出てきたのは、歯車の化け物とちっちゃなおじさんが出てきた。

「ふっ、ここが地球か…」

「今から、ここを機械化するんですよ。歯車王様」

「ふっふっふっ、はっはっはっ！！我の名は、歯車王！機械化帝国の四天王の一人！！」

「そして、そのお供のギークです！」「機械神様の命令により、今からこの地球を機械化してくれるわ！！」

「歯車王だって！！」

「う、宇宙人だ！！」

「地球を機械化するだ！」

「ふっふっふっ、ギーク！早速機械化をしろ！」
「はいでガンす！」

すると、ギークは杖を上にあげそこから機械の化け物が現れた。機械化獣だ。機械化獣は町を攻撃しはじめた。すると、攻撃したところから、みるみる機械化していった。

「町が機械になっている！！」
「これって、私が見た夢と同じじゃない！！」
「町も自分の体も、機械になる夢！！」
「えっ！？お前らも俺と同じ夢見たのか！？」
「機械化獣よ！我々の邪魔をするやつは、すべて消すのだ！」
「もつと、もつと機械にするんです！」
「全宇宙に鋼鉄の秩序を！」

そして、機械化獣は拳一達の方に向かってきた。

「うわっ！こっちに来た！」
「とにかく、逃げるぞ！」

拳一達は、逃げていった。

「一体、なんなのよ！あれ！」
「俺に聞くな！！！」

すると、拳一達の目の前にさつき出会った恐竜ロボが現れた。

「うわっ！さつきの恐竜！！」
「こんなときに！！！」

だが、恐竜ロボは拳一達をのみこみ消えてしまった。

「げげっ！何ですかさっきのロボットは！」

謎の世界

ここは、謎の世界。

拳一はふっ、と目をさました。

「ん？な、なんだここは！？おまけに、何で俺ロボットのコクピットみたいなのにいるんだよ！そう言えば、浩美としのぶの姿が見えないな。おい、浩美！しのぶ！」

「拳一君！」

「浩美！その声浩美か！？」

外をみると、浩美が恐竜ロボの窓から手をあげ振っていた。

「浩美！大丈夫か！？」

「うん。僕も拳一君と同じロボットのコクピットみたいなのところにいるんだ。それにしても、ここどこー！」

「俺もわかんねえよー！」

「そう言えば、しのぶちゃんは？」

「はっ！！忘れてた！」

「……………（やれやれ。）」

「どこだー！しのぶ！」

「私ならここよ！拳一！」

今度は、浩美と逆の方向にしのが恐竜ロボから手をあげ振っていた。

「しのが！無事だったか！」

「ええ！！私も二人と同じ、ロボットのコクピットみたいなところにいるわ！」

「そうか、何より離ればなれにならなくてよかったぜ！」

「それよりも、ここどこなのよ！」

「だから、俺に聞くな！！」

すると、

ピカアッ！！

急に光の人物が拳一達の前に現れた。かつて、仁達にはライジンオー、虎太郎達にはガンバルガーを差し出した、エルドランだ。

「私は太古の昔から地球を守ってきた戦士エルドラン。」

「地球を守ってきた？」

「戦士？」

「エルドラン？」

「さつき、君たちが会った怪物は機械化帝国の四天王と機械化獣だ。機械化帝国はこの地球を機械化しようとしている。」

「そう言えば、そんなこと言ってたような……」

「私は、暗黒から蘇ろうとしている魔王を再び封印しなければなら
ない。」

「魔王？」

詳しくは、第五話を見てね。

「君たちが私のかわりに、機械化帝国からゴウザウラーでこの地球を守ってほしい。」

「私達が…」

「機械化帝国から地球を守る…？」

「ゴウザウラーで？」

「頼んだぞ…地球の子供達よ…！」

すると、エルドランから光が溢れ、拳一達を包み込んだ。

「キヤアアアア…！」

「「うわああああ…！」」

そして、その世界から拳一達は消えていった…。

第六話　またまた登場光の戦士！新たな光のロボ！　その2（後書き）

「次回ってバトルなの？」

「そ、それは……………」

「考えてなかったわね…」

「そう言えば、ガンバルガーとゴウザウラーの話が終わったら、この作品を詳しく説明するコーナーをやるんでしょ？」

「うん。オリキャラの説明とかロボットの説明とか、後、誰がどこで出てくるかと言うのもね。」

「オリキャラとロボットはいいと思うんだけど、誰がどこで出てくるかはダメでしょ！！」

「ああ、でも、ヒントしかおしえないよ。そんなにベラベラ言っちゃったら、興味しんが自分でもなくなるからね。」

「作者がいつていい台詞か！？それ！？」

「ハイハイ、今日はここまで。その3でお会いしましょうー！」

「感想もよろしくね！」

第六話　またまた登場光の戦士！新たな光のロボ！　その3（前書き）

「残念ながら、バトル編ではありません。」

「次回がバトル編だよ！」

「そして、あのロボットも次回で活躍よ！！」

第六話　またまた登場光の戦士！新たな光のロボ！　その3

一方そのころ、こつちの方とは、

春風小学校

今日は、春風小学校の始業式。生徒達は全員校庭に出ている。校長が式だいの上にたつ。

「皆さん、おはようございます。今日は、始業式ですね。新入生も入ってきました。……………」

……………」
(話長いので飛ばす。)

そんななか、校長が話しているとちゅう、拳一達の担任の中島先生がクーコにこっそり話しかけてきた。

「クーコ、拳一達はどこにいったんだ？」

「三人一緒にどっかにいっちゃいましたー」

「どっかに行ったって、あいつら何やってんだ、始業式そうそう遅刻か！？」

すると、斜め後ろから笑い声が聞こえてきた。

「ハッハッハ。始業式そうそう遅刻とはやっぱり2組はダメなクラスですな。」

1組の担任高木先生の笑い声だった。もちろん、中島先生は怒る。

「なんですと！遅刻はするけど、男女の仲は1組よりましです！！」

「なんだと！勉強の成績は、2組はダメじゃないか！」

「む~~~~~っ」

お互い、ひかない。すると、

「シッ！今は始業式中です。生徒は静かにしているのに先生がうるさくしてどうするんですか。」

3組の弥生先生の声。二人は、

「ハハハハハ…。」

苦笑いしながら、自分のたちいちに戻っていった。

そして、校長の話が終わろうとしたその時！！

ゴゴゴゴゴ…

突然地震がおこりだした。あまりにも、突然のことで生徒達は大パニック。すると校長が、

「み、皆さん。落ち着いて、落ち着いて。先生の指示に従ってください。」

どうやら、一番ビビっているのは校長のようだった。すると、校舎の方になにかが現れた。それは…

「うわあああああ！！！」

「きよ、きよ！」

「恐竜だーーーー！！！」

そつ、三体の恐竜ロボが校舎と融合していたのだ。すると、その恐

竜ロボから声が聞こえてきた。

「いつてー！どこだよここ！」

「なんか、人がいるよ？」

「って、ここ学校じゃない！！」

そう、先ほどエルドランからこの恐竜ロボをもらった拳一、浩美、しのぶであつた。三人は外を見た。

「本当だ学校だ！」

「と言うことは、今始業式の最中？」

「や、やばい……」

すると、誰かが声をあげた。

「ちょっと、あれしのぶじゃない！！」

「浩美もいるぞ！」

「拳一もだ！！」

拳一達と同じ、6年2組のメンバーだ。

「て言うか、あのロボットがいるところ私達の教室じゃない！！」

「教室は大丈夫なの！？」

「見に行ってみよう！」

「うん！！」

こうして、6年2組のメンバーは校舎へと向かった。

「ああつ、こら！お前達！！」

中に入ると、教室全体がロボットの部品になっていた。

「なにこゝ…」

「最早、教室じゃねえぞ…」

「どうやらここは、ロボットの中のような…」

すると、拳一の声が聞こえてきた。

「おつ、みんな！来たのか！」

「ちよつと、拳一！一体何なのよこれは！！」

「俺も、知らねえよ！！気づいたらもうここにいたんだよ！」

「その前にそのロボットはどこから持ってきたんですか！？」

小島尊子こと、教授が聞く。

「エルドランって言うやつからもらったんだ！！地球を機械化帝国から守ってくれて言われてな！」

「エルドラン！？エルドランってあの光るおじさんですか！？」

「ああ！おじさんがどうだかわかんねえけど、光る人だ！」

と、その時。いろんなところから、恐竜のプレス見たいのが出てきた。そのプレスは6年2組のメンバーの全員の手首につけられた。

「な、なにこれ！！」

「イヤアアア！」

「アガガガ…」

「なんだよこれ！」

「こ、これは……」

「おい、何やってんだ！お前ら！」

突如、教室のドアが開いた。そこにいたのは、3組の星史とひかる、剣とタンゴ、ゆいとまいがいた。

「早く、校庭にもどれ、って、なんだここは！？」

「本当にここ教室！？」

「なにかあったのか！？」

「なんだか、ロボットのなかにいるような感じ。」

「全くその通りだよ！！」

「うお！拳一！なんでロボットに乗ってんだよ！」

「俺が知るか！」

「多分、拳一君はパイロットに選ばれただと思います！！」

「ええ！！マジで！！」

「はい、もしかしたら、浩美君としのぶさんも同じだと思います！

！」

「な、なんで……」

「女の子がパイロットなんてありえないわ！！」

「しのぶは男女だから、選ばれたんだよ！」

「なんですって！このしもぶくれ！！」

「なに……」

「ちよつと、二人とも喧嘩してる場合！？」

「まず、ロボットを校舎から出さなくちゃ！！」

「でも、やり方なんてわかんねえよ！！」

「どうすればいいんだよ！！」

一方そのころ、町の方では。

「やるです、やるです！！もつとやるです！！」

機械化獣が暴れていた。

「ふっ、この町の機械化は楽勝だな。一気に、機械化してしまえ！！」「そうはいくか！！？」

突如、機械化獣達の目の前にロボットが現れた。マジンガーZに、ダイアナンAにボスボロットだ。

「まさか、春風町にも敵がいたとはな。」

「吹雪君達は、青空町に出た敵を倒しているらしいから、こっちはこれないって。」

「しょうがねえ、三人で何とかするぞ！」

「でも、剣くんはたしか、ここにいたんじゃない？」

「出られない状況なんじゃないか？」

「どうなのかしら……」

そして、また戻って小学校。

「みんな大変だ！」

中島先生が教室に入ってきた。

「どうしたんですか！」

「町に……ってうわっ！ここ教室か！？」

「いいから、用件を言ってください！！」

「あつ、ああ。町に変な機械の化け物が現れたらしいんだ。今、マジンガーZ達が倒しているらしいから、お前達は校庭に早くでなさ

い！！みんなといた方が安全だからな！」

「ええ！！機械の化け物！？」

「それって、エルドランがいつてたやつらだ！！」

「その前に、中島先生！それ本当ですか！？」

「ああ。って君はたしか…」

「3組に転入してきた大牙剣です！」

「ああ、そうだ。剣くんだった。今いったことは本当だ。」

「やばい、行かなくちゃ！！」

「剣、頑張ってこい！！」

「負けんじやないわよ！」

「怪我しないようにね。」

「ああ、行ってくる！」

そう言うと、剣は教室を出ていった。

「ああ、こらっ！どこいくんだ！！」

「大丈夫です！先生！」

「えっ！？」

「心配しなくても大丈夫！」

「それって、どういう意味？」

「見れば分かるわ。」

そう言うと、まいは外の方を指差した。そして、みんなが外を見た。ちょうど剣が出てきた。校庭から出ると、

「おしっ！行くぞ！！」

そして、手を上に挙げ…

「こおい！ライガー！！」

すると、剣は光に包まれた。光が収まると中から出てきたのは、獣みたいなものだった。

「ライガー、イン！！」

「あれって……」

「剣！来たのか！」

「はい、甲児さん、さやかさん、ボス！お助けしますよ！！」

「よしっ、行くぞ！！」

「「「おおっ！！」」」

そして、学校からみていた拳一達は、

「あれは、陽昇町と一緒に戦ったロボットだ！」

「ええっ！？」

「と言うことは、あんたダ・ガンというロボットのパイロット！？」

「正確には、パイロットじゃなくて隊長だ！」

「ええっ！？星史って、ロボット持ってたのかよ！？」

「私はもとから知っていたけどね。」

「ということで、俺も行ってくる！」

そして、星史も教室を出ていった。

第六話　またまた登場光の戦士！新たな光のロボ！　その3（後書き）

「次回、いよいよゴウザウラー登場！」

「そして、バトル！！」

「まあ、でも。次回で春風町の話は終わりよ。」

「そう！次回で、春風町の話は終わり、青空町に戻ります！！」

「そして、青空町が終わったら春風町に戻るよ！」

「ややこしいけど、読んでくださいね。そして、」

「「感想もお待ちしてます！！」「」」

第六話 またまた登場光の戦士！新たな光のロボ！

その4（前書き）

「なんと、一日で二回も投稿出来ました！」

「今回で春風町の話は終わりだよ。」

「次からは、青空町に戻るわ。」

第六話　またまた登場光の戦士！新たな光のロボ！

その4

「ええい、めんどくさい！！やれ！機械化獣！！そいつらを倒せ！！」
「やるです！！」

機械化獣達は、一斉にマジンガー達の方に来た。

「今度は機械かよ。」

「ジャーク帝国に続き新たな敵が現れるとはね。」

「はあ」

「よしっ！やるぞ！！」

マジンガー達は攻撃を開始した。

「アイアンカッター！」

「スカーレットビーム！」

「ボロットプレッシャーパンチ！」

「電撃キック！」

次々に敵が倒されていく。すると、今度はパトカーが走ってきた。

「甲児さん！パトカーが走ってきました！！」

「やべえ！捕まるぞ！」

「みんな、逃げろー！」

「ちよっと待って！あのパトカー、どこかで見たことあるわ！！」

パトカーの上で変なスーツを来た少年が叫ぶ。

「行け、ダ・ガン！」

すると、パトカーが変形しロボットとなった。

「やっぱし、陽昇町と一緒に戦ったロボットだわー!!」

「ああ、そう言えば！」

「おーい、もう一度一緒に戦ってくれるよな！」

「星史どうすんだ？」

「もちろん！一緒に戦うぜ！」

「よし、ああ！一緒に戦うぞ！」

「おしっ！みんなでやるぞー!!」

「一気に片付けるぜ！ダ・ガン！合体だー!!」

「了解！こいダ・ガンジェットー!!」

ダ・ガンジェットがダ・ガンの所に来た。

「ウオオオオ！合体！ダ・ガンX！」

そして、戦闘が再開された。

「一気に片付けるー!!行くぞー!!」

「「「おおっー!!」」」

「大車輪ロケットパンチ！」

「ダイアナミサイル！」

「ボロットプレッシャーパンチ！」

「ライガーソード！」

「ダ・ガンブレード！」

次々に敵を倒しにいく、五体のロボット。そして、全滅となった。

「おっしゃあー!!」

「やったー!!」

「やりい!!」

「どんなもんだい!!」

「任務完了だぜ!!」

だが、そうではなかった。

「あわわわわ、大変です! 歯車王様! 全滅してしまいました!!」

「おのれ! なら、この歯車王自らが相手してくれるわ!! ギーク! 貴様は機械化獣を出せ!!」

「りよ、了解しましたです!!」

そして、マジンガー達の所に新たな機械化獣が現れた。

「なんだあ? まだいたのか!!」

「それだけではないぞ!!」

「!?!」

見ると、ロボットが機械化獣達のと真ん中にいた。

「なんだお前!?!」

「我の名は、歯車王!! 機械化帝国の四天王の一人! 地球人よ! よくも、我々の邪魔をしてくれたな! お返しに、我が自ら相手してくれるわ!! 覚悟しろ!!」

「機械化帝国だって!?!」

「四天王だからって、負けるか!!」

「みんな、行くぞ!!」

「「「「おおっ!!」」」」

「ブレストファイヤー!!」

「ダイアナンミサイル!!」

「ボロットダイナミックススペシャル!!」

「ライガースラッシュ!!」

「アースキャノン!!」

五体は攻撃するが、

「ふはははは、貴様らの攻撃はその程度か!!」

すべて、避けられてしまった。

「なに!?!」

「お返しだ!!」

歯車王はロボットで、マジンガー達を攻撃しはじめた。

「「ぐわああああ!!」」

「キヤアアアア!!」

「「うわああああ!!」」

マジンガー達は倒れてしまった。

「くっ、くそっ……」

「ふっふっふっ、立ち上がれないか、いいきみだな。機械化獣よ!
今のうちに機械化してしまえ!!」

そして、また町が機械になっていった。

「ハッハッハ。ハーハッハッハッ!!」

一方そのころ、拳一達の方は。

「ああ!マジンガー達がやられてる!!」

「急いで、このロボット達を発進させなくちゃ!!」

「でも、どうすればいいんだよ!!」

「お前達、早くでなさい!!」

全員 「先生は黙ってて!!」

「は、はい……………」

そして、しゅしゅ教室を出ていく先生であつた。すると、エリーのブレスが光っているのに気づいた。

「あれ?何でエリーのブレス、光っているの?」

「え?あ、本当だ。」

「どうして?」

「分かりました!!」

今までパソコンを開いて何かを調べていた、教授が叫んだ。

「うわっ!ビックリさせないでよ!教授!」

「それよりも、まず、ゆいさん達は教室から出ていてください!!」

「えっ!?!」

「分かったわ、いくわよ、まい、タンゴくん、ひかるさん」

「う、うん……」

「お、おお……」

ゆいたちは、教室を出ていった。

「これで準備完了です！エリカさん！ブレスの光ついているところを押してください！！」

「それだけでいいの？」

「はい！！間違いありません！」

「分かった！」

そして、エリーはブレスの光ついているところを押した。その瞬間、教室が一気に変形した。しれいしつだ。そして、拳一達が乗っていた三体のロボット達は校舎と切断し自由となった。

「すごい！」

「教室が一気変わった！」

「おお！動いたぞ！！」

「拳一君！！聞こえますか！」

「ああ！」

「今からちよつと説明しますね。まず拳一君の乗っているロボットはマツハプテラ、浩美君の乗っているロボットはランドステゴ、そして、しのぶさんが乗っているロボットはサンダーブラキオです！この三体が合体すると、ゴウザウラーという大きいロボットとなります！！」

「この三体が合体すると……」

「ゴウザウラーになるのか……」

ちなみに、マツハプテラ達が校舎と切断されたあと、校庭の方はいつと……

「ああ、わ、私の学校が………」

フラアアア...

「こ、校長先生。しっかり……………（重いな。）」

校長が気絶していた。そして拳一達の方に戻る。

「拳一君！！ゴウザウラーでマジンガー達のところへ！」

「ああ、でもまずは、校庭を出てからな！！行くぞ！！浩美、しのぶ！」

「う、うん！！」

「え、ええ！！」

マツハプテラ達はマジンガー達のところへ向かった。一方マジンガー達の方は、

「もっと、機械にするんだ！！」

町がほとんど機械となっていた。

「ヤバイ…このままじゃ」

「町がすべて……………」

「機械になる！」

「なんとしても、食い止めなくちゃ！！」

「無駄だ！！」

歯車王はミサイルを発射した。

「……………うわああああ！！……………」

「ふはははは！！さあ、遊びは終わりだ！！」

とその時!!

「待てー！ー！」

どこからか声が聞こえてきた。マッハプテラ達がマジンガー達のところに着した。

「む!!なんだあれは!!」

「恐竜!?!」

「あれ?あれって、さっき学校に現れたロボットだ!」

「拳一君!!合体です!」

「分かった!行くぞ!」

拳一はザウラーチェンジャーをだした。

「ゴウザウラー!熱血合体!」

すると、マッハプテラ、ランドステゴ、サンダーブラキオの三体が合体し、ゴウザウラーとなった。

「すげえ!これがゴウザウラー!」

「拳一君!!敵がいるよ!」

「ああ!いっちょやるか!」

そして、

「ザウラーブレード!!」

ゴウザウラーは機械化獣を切りつけた。機械化獣は爆発していった。

「おっしゃあ!!」

「拳一!集中を切らしちゃダメよ!」

「わーってるよ!」

「あのロボットは?」

「おい、そのロボットに乗っているやつ!お前らも戦ってくれるよな!!」

「もちろんだぜ!!」

「助かる!!」

「ちよつと待って下さい、甲児さん!」

「なんだあ!剣!」

「その声聞いたことあるんだ!」

「うーん、なんか俺も聞いたことあるような!」

「ちなみにロボットに乗っているやつ名前を覚えてくれないか?」

「え?まあ、いいか。俺は春風小学校6年2組の峯崎拳一だ!」

「同じく、6年2組の遠藤浩美です。」

「二人と同じ組の朝岡しのぶです。」

「え!?!」

「拳一に浩美にしのぶ!?!」

「え!?!星史!」

「それに3組に転入してきた!」

「剣くんじゃない!!」

「!?!な、なんでお前らが!?!」

拳一、星史、剣の声がハモった。

「(ハモった...)」

「(ハモったわね...)」

「おい、お前ら!おしゃべりはそこまでにしておけ!」

見ると、歯車王が攻撃の準備をしていた。

「ふっ、新たなロボットか…いいだろう、相手になってやる…!!やれ!!」

機械化獣が一齐にきた。

「こいつらは俺達に任せろ!」

「剣君達は、歯車王を!!」

「分かりました!!」

ライガー、ダ・ガン、ゴウザウラーは歯車王を倒しにいった。

「ふっ、来たな!くらえ!」

歯車王はミサイルを何度も発射した。だが、かわされた。

「なに!??」

「さっきのようには、いかないぜ!」

「くらえ!ライガーソード!」

「アースキャノン!」

「ザウラーボンバー!」

三体の攻撃で歯車王は、体勢を崩す。

「く、くそっ!」

「これで、止めだ!!ザウラーマグマフィニッシュ!!!!」

ゴウザウラーが必殺技を決め歯車王はロボットから抜け出した。

「くそっ！次は必ず！！」

「熱血最強ゴウザウラー！」

齒車王は逃げ出した。

「ああ！待って下さい！齒車王様！」

ギークも後をおった。

戦いが終わった。

「いやー、まさかまたエルドランからロボットをもらう人物がいるとはな。」

「エルドランは一体何人に挙げるのかしら。」

「しかも、こんどは6年生だからな。」

「拳一！お前、意外にロボットの操縦は上手いんだな！」

「それ、どういう意味だよ星史！」

「でも、初めてのつたわりにはすごかったぜ！」

6年生のメンバーがいろいろしゃべっているで、甲児達が話しかけてきた。

「お前ら、ちょっと話はそこまでにしておけ。」

「なんで？」

「吹雪達と合流しなくちゃな」

「あ、そうだった。」

「でも、吹雪さん達こっちに来るんじゃない？」

「多分な……」

「じゃあ、待ってようよ。」

「それもそうだな」

「なあ、剣。吹雪さん達って誰だ？」

星史が聞いてきた。拳一達も頭のうえに？マークがたくさん浮かんでる。

「吹雪さん達は、俺らと一緒に戦っている人なんだ。まあ、会って見たほうが早いね。」

「へー。」

「じゃあ、吹雪達に来るまで待つてるとするか。」

「それまでにみんなはおとなしくしててね。」

全員 「はい。」

第六話 またまた登場光の戦士！新たな光のロボ！

その4（後書き）

「次回！青空町の続きです！」

「春風町は無事終わったね。」

「青空町に戻るのね。」

「それでは、皆さん。第七話で会いましょう！」

「感想もよろしくね！！！」

第七話 新たな敵！そのなはジャークサタン！！（前書き）

「青空町続編です。」

「新たな敵が登場！」

「前より凶悪な敵よ！」

すると、今まで見たことない紫色のロボットが現れた。

「な、なんだお前は!?!」

「ふっふっふっ、このロボットはジャークサタン!! ジャーク帝国の最強ロボットだ!」

「ジャーク帝国!?!」

「と言うことは、お前ジャーク帝国のやつか!」

「地球人よ! ジャーク帝国の真の強さ! 思いしるがいい!!」

「みんな、行くぞ!!」

「「「「「「「 おおっ! (うん!!)」「」「」「」

「ブリザードアタック!」

「フラワーカッター!」

「シャイニングレーザー!」

「ジェイバスター!」

「タイガーキャノン!」

「ライジンソード!」

「ガンバールミサイル!」

七体はジャークサタンを攻撃した。だが…

「ふはははは、所詮貴様らの力はその程度だ!!」

全てかわされてしまった。

「そんな!!」

「かわされるなんて!」

「次はこちらの番だ! ジャークミサイル!」

ジャークサタンは七体にミサイルを発射した。

「「「「うわああああ!!」「」「」」」」
「「キヤアアアア!!」」」」

ミサイルは七体に直撃した。七体は倒れた。

「ああ!みんな!!」

「ふははは!!邪魔者はいなくなった!ライジンオー!貴様に止めをさす!」

「なに!?!」

「ジャーク帝国の邪魔者は貴様だ!!死ね!!」

するとジャークサタンはサーベルを持ちライジンオーの方に向かった。

「や、ヤバイ!」

「仁!!何とかしろ!!」

「でも、動かねえんだよ!」

「終わりだ!!ジャークサーベル!」

ジャークサタンはサーベルをライジンオーの方に降り下ろした。だが…

「やらせるか!スノーブリザード!!」

スノークライマーが、猛烈な吹雪をお越し、ジャークサタンを凍らせた。

「ふっ、こんなもの!!」

「そうはさせません!ローズウィップ!」

フラワーライマーが、バラのムチを出しジャークサタンを絡ませた。

「お次はこっち！シャイニングリング！」

そして、シャイニーがリングでさらに動けなくした。

「くそっ！！！」

「今よ！！！」

「おう！！ジェイバスター！」

「タイガーキャノン！」

ジェイデッカーとビルドタイガーの攻撃で弱らせる！！そして、

「ライジンオー！一気に決めるぞ！」

「おう！！！」

「ガンバーファイナルアタック！」

「ゴッドサンダークラッシュ！」

ガンバルガーとライジンオーの必殺技でジャークサタンに止めをさせた。

「元氣爆発ガンバルガー！」

「絶対無敵ライジンオー！」

「くそっ！！あと一歩のところまで止めをさせたのに…覚えてろ！！！」

ジャークサタンは消えていった。

ようやく戦いが終わった。

「ふう、何とか倒せたな。」

「まさかジャーク帝国の最強ロボットが現れるとはね。」

「ビックリですね…」

「みんな、シャイニーの中に入ってきたら？」

「お茶がありますよ。」

「つかさ…あんたいつの間に用意してたの…」

「よし、みんな遠慮なくはいれ。」

「あ、俺達はいいよ。」

「え！？どうして？」

「まあ、理由は言えないんですけど。とにかく大丈夫ですから。」

「もし、何かあったらここに連絡下さい。すぐに駆けつけます。」

と言って、ガンバルガーは消えていった。

「行っちゃった…」

「みんな、春風町に行くからシャイニーに乗ってくれ。」

「甲児さん達が待っているからね。」

「あ、俺達もいつていいのか？」

「もちろん！！新しい仲間だよ！」

「ちなみにあんた達のボスはもうシャイニーの中でお茶を飲んでい
るわよ。」

「（勇太…なぜ…）」

「さっ、早くして。春風町まで飛ばすから。」

そして、全員シャイニーに乗り春風町へと向かった。一方そのころ、
虎太郎達は、

「ふう、何とか正体がバレなくてすんだな。」

「バレたらおしまいだもんね。」

すると、力哉があることに気づいた。

「ああ！野球の試合！！」

「あ！！そういえば！！」

「ヤバい遅刻だー！」

「急げー！C〓C〓＼（；・―・）／」

虎太郎達は、野球の試合へと向かった。ちなみにその後勇太は、欠席扱い。虎太郎達は、グラウンド十週で許してもらえたらしい…。

第七話 新たな敵！そのなはジャークサタン！！（後書き）

「青空町編終了！」

「次回は、地球防衛組、ザウラーズ、勇者チーム対面だね。」

「なんか、すごいことが起こりそうね。」

「あつ、ちなみにバトルはないよ。」

「平凡なストーリーをお楽しみください。」

第八話 ご対面！新たな仲間達！！（前書き）

「今回は、新たな仲間達をご対面だよ。」

「そして、ザウラーズのあの人が爆発するよ。」

「しかも、あの人の妹も大爆発！」

「こなた、かがみ」「あんな姿はみたくなかったね（わ）」「」

第八話 ご対面！新たな仲間達！！

青空町、春風町すべての戦いが終わり吹雪達は甲児達と合流するために春風町に向かっていった。一方そのころ、春風町は

春風町

「あゝあ、暇だな」

「吹雪くん達いつくるのかしら」

「早く来てくんねえかな」

「「「同感」」」

吹雪達が来るまで待っている春風町のメンバー達はとてつもなく暇らしい。ちなみにいま、拳一達の教室でのんびり過ごしている。

「まあまあ、甲児さん達もこっちに来てトランプでもやりましようよ。」

「トランプって、お前ら勉強しなくていいのかよ。」

「いいんだよ別に。」

「でも、拳一は勉強しなくちゃダメでしょ！」

「なんだとー！」

「だって、五年の体育以外の成績全部ダメだったじゃない！ーそんなんで中学に行けるわけじゃないじゃない」

「なんだとー！言いたいこと言いやがって！この男女！」

「なんですって！今日で言ったの三回めよ！しもぶくれ！」

「なんだとー！ー！」

「なによー！」

二人はまたまた喧嘩となった。その二人の喧嘩にあきれている全員。

「また始まった。」

「なんで、こんなに喧嘩が好きなんだろう」

「まるで、仁とマリアの喧嘩だな。」

「言われて見ればそう見えるわね」

「あいつらも、同じく喧嘩するからな。」

「やっぱし、喧嘩するほどなかがいいんだな。」

全員 「うんうん。」

その場にいた全員がうなずいた。ちなみに喧嘩はまだ終わらない。すると、

ドン！！

校庭に変な音が聞こえてきた。（ちなみに他の生徒はすべて下校。だから今は放課後となっている。）見ると、外に黄色い魔方阵が出ていた。

「な、なんだあれ！？」

「おっ、ついにきたか。」

「待ちくたびれたぜ。」

「みんな、外に出ましょ。」

「ええ！！でも、危なくないですか？」

「大丈夫よ、ただ単に『来たただだから』」

「（それでも、余計心配なんですけど…）」

「さあ、みんな行くぞ！C〃C〃＼（；・・）／」

全員は教室を出ていった。そして、校庭を出た瞬間。

ピカアッ！！！！！！

黄金の光が魔方陣からいつきに出てきた。

「いやー、いつみても眩しいな。」

「もう慣れたけどね。」

「いやー！感心してる場合じゃないでしょー！」

「離れなくちゃー！！」

「大丈夫よ、すぐ収まるから。」

すると、黄金の光は収まりそこに現れたのは巨大な船であった。

「なにあれ……」

「巨大な船？」

「あれが、俺達の仲間が乗っている船『シャイニー』だ。」

拳一達「へ、へえー！。」

「さて、乗るぞー！」

「乗るの！？」

「て言うか、勝手にのっていいの！？」

「だから、いっただろ俺達の仲間が乗っているって」

「で、でも……」

「いいから行くぞ。来ないやつはおいていくからな。」

と言って、甲児、さやか、ボス、剣、まい、ゆい、タンゴは船に乗った。

「あ、剣君達まで……」

「じゃあねえ、みんな行くぞー！！」

そう言って、拳一達も船に乗った。

シャイニー／メインホール

ここはシャイニーの中。メインホールに甲児達は向かっていた。着くと、吹雪達が待っていた。

「あ、甲児さん。迷わないでくれましたね。」

「何回も乗っているから分かるぞ。さすがに。」

「そりゃそうか。」

「あれ？甲児さん。後ろの人達は？」

美夏が拳一達を指した。

「ああ、こいつらは俺達と一緒に戦った新たな仲間だ。まずはこっち、勇者ダ・ガーンの大隊長とのおさ馴染みだ。」

「高杉星史です。よろしく。」

「そのクラスメイトの香坂ひかるです。」

「ちなみに別名は……」

ゴン！！

ひかるが星史を殴った。

「いってーな！みんなの前だぞ！それにまだなんにも言ってねえじやねえか！」

「あんたの言いたいことは分かっているのよ！！」

「さて、次行くぞ。んでこっちが、エルドランから新たなロボット『ゴウザウラー』をもらった、6年2組通称『ザウラーズ』のメンバーだ。人数が多いからパイロットだけ言ってくれ。」

「じゃあ、俺だな！俺は峯崎拳一だ！」

「もう一人のパイロット、遠藤浩美です。」

「同じくもう一人のパイロット、朝岡しのぶです。よろしくお願いします。」

するとマリアが言ってきた。

「へえー、女の子がパイロットをやるなんてすごいわね。」

「それに、またエルドランからロボットをもらう人物がいるなんて、ビックリだぜ。」

「また？青空町でなんかあったのか？」

「青空町でも、新たにエルドランからロボットをもらった、人物がいるんです。」

「ええ！！」

「確か名前は、ガンバルガーだったな。」

「でも、ついて来ないでそのまま帰っちゃったんだよね。」

「なんか秘密を守るヒーローみたいな感じだな。」

「僕もビックリだよ。僕以外にも勇者ロボットを操る人物がいるなんて。」

「え！？と言うことはお前も。」

「うん、僕は勇者警察のブレイブポリスのボスなんだ。小学四年の友永勇太だよ。よろしくね、星史君。」

「お、おう…（小学四年でボスなんてスゲーなこいつ）」

「それにしても、一気に仲間が増えたね」

「こなたのいうとおりよね」

「一気に頼もしくなったね」

「これで、有利になるものもいいんですが…」

「なんで？」

「もっと騒がしくなりそうってことねみゆきさんが言いたいことは。」

「

「美夏ちゃんのいうとおりです…さっそく、なんか始まりそうです。」

みゆきのみたほうを見ると、なにやら地球防衛組とザウラーズがもめ事をしていた。
その内容とは…

「エルドランのロボットのチームの中で俺達が年上なんだから、ちゃんと敬意を持てよ！」

「何だと！俺達が一番最初にエルドランからロボットをもらったんだから、俺達が先輩だろ！！」

「いいや！俺達、ザウラーズだ！」

「ちがう！俺達、地球防衛組だ！」

「ザウラーズ！！」

「地球防衛組！！」

「む〜〜〜〜う」

仁と拳一の間火花がちる。その様子を、マリアとしのぶは、

「全く、仁ってばいつつもてのかかるやつなんだから。」

「マリアもそうなの？私もそうよ拳一もてのかかるやつだから、疲れるのよ」

「しのぶもそうなんだ。お互い大変ね。」

「そうね」

各、ヒロインはすでに仲良くなり呼び捨てでもう呼びあっていた。さすが、ヒロイン。ちなみに喧嘩はまだ続いていた。すると、ザウラーズのまとめやく委員長こと、五郎が止めにはいった。

「二人ともやめろよ、どうせ同じくエルドランから地球を守ってく

れって頼まれたんだから、先輩、後輩の関係はなくなっただけいいじゃないか。」

「うるせえ！外野は黙ってろ！！」

「そうだ！！そうだ！！」

プチン…

すると五郎が切れた、その様子に気づいたザウラーズのチョビは、

「やべえ！五郎が切れる！！みんな逃げろ！！」

ザウラーズ 「わああああ！！」

ザウラーズのみんなは逃げ出した。それがよくわからない地球防衛組の仁以外は、

「えっ！？何が起ころの！」

「いいから地球防衛組のみんなも逃げて！甲児さん達にも呼び掛けたから。」

「わ、分かりました！！」

そう言っで、地球防衛組の仁以外は、逃げ出した。そして、遠いところから見ていた。

「あれ？美夏は？」

「多分、トイレじゃない？」

「なら、大丈夫ね。」

そして、取り残された三人は、

「なんだ？何が起きるんだ？」

「や、やつべえ。五郎が切れた。」

そして、

ドゴオオオオン！

「いい加減にしろてめえらああああ！！」

五郎が切れた。顔の表情もちょう怖い。

「「うわああああ！！」」

「先輩と後輩は関係ねえっていつてんだろおお！！」

「「は、はい！！」」

「だったら、喧嘩やめろーーーー！！」

「「は、はい！！」」

五郎に追いかけて回される二人であった。そして、全員が三人のところにきた。

「す、すごい。」

「五郎さんて、怒ると怖いんだ。」

「（まるで、美夏みたいだな）」

「ところで、あれどうやって止めんの？」

全員 「……………」

すると、美夏が戻ってきた。少し、怒りぎみに

「うるさいんだけど…なにやってんの…」

「お、よお、美夏。」

「なにあれ…」

「見ての通りだ、五郎が切れて誰も止められないんだ」

「……………」

「だからな〜って美夏？」

ビクッ！！！！

回りにいたみんなも感じたんだろう、美夏は今まで見たことないどす黒いオーラを出していたから。これは俺でも言える。兄でも言えることは、こうなった美夏は誰にも止められない。

「……………」

そして、美夏は五郎達の方に歩き出した。オーラは消えていない。近くに来たとき、五郎達もビクついていた。すると、

「うるせえんだよ！てめえらあああああ！！」

と言い、何がおこったか分からないがいきなり煙が上がった。おいおいシャイニー、壊れるだろ

そして、美夏は戻っていった、多分部屋に戻ったんだろう。

美夏が去ったあと煙は収まり、そこにいたのは黒くなった仁達の姿であった。みんな、ビクついていた。そりゃそうだろう、普通簡単には黒こげにはならないから。俺が思ったシャイニー、壊れるだろは全く壊れていなかった。多分美夏は、シャイニーの眠っているブレスレットを使って何かをしたんだろう。ちなみに仁達はちゃんと生きていた。その後、さやかさんの応急処置でなんとかならしい。あんな美夏は俺も見たことはなかった。なるべく、これからは美夏を怒らせない方がいいだろう。もはやあんな姿を見たくないからな。

第八話 ご対面！新たな仲間達！！（後書き）

「美夏ちゃん、こわっ！！」

「表と裏の顔ね」

「ところで月、次は？」

「次の話はキャラの紹介とロボットの紹介のコーナーです。まあ、いわゆる休憩コーナー？」

「そんな感じなのかな？」

「まあ、いいわ、次回も読んでくださいね。」

「ではさようなら〜」

休憩コーナー！！『まったり、ゆったり、お茶しよ』キャラ設定編

「どうも皆さん、こんにちは（　　）ノ”この小説の作者月です。このコーナーはサブタイと同じく、休憩みたいな感じです。それに付け加えて、キャラ設定やロボットの紹介などしていきたいと思います。では、このコーナーのオペレーターのらき　すたのメンバーの皆さんです。」

「どうも。泉　こなたです。」

「柊　かがみです。」

「あだ名は、かがみん♪」

ゴン！！

「変なあだ名つけるな！！」

「えっと、妹の柊　つかさです。」

「高良　みゆきです。」

「この四人は、この小説のメインキャラクターの一部にも入っているんで、このコーナーの司会者みたいな感じでいれてみました。」

「なんと言っ、迷惑な…」

「て言うか、その前にメインキャラクターに入っていたんだ私達。」

「タイトルもなんか変だね。」

「うつ！！つかさよ痛いところをつけないでくれ。」

「あつ、そうだったの？ごめんなさい。」

「いや、わかればいいのだ。」

「そういえば、休憩コーナー！！の後に書かれていた、『まったりゆったり　お茶しよ』は一体なんの意味なんですか？」

「ああ、あれ？あれは休憩コーナー！！だけじゃつまんないから、

「こなたさん、それはいつちやおしまいです。」
「いや、みゆき。そこは、否定してくれ。」
「では、行ってみよう！」

千樹 吹雪

男 17才 高2

身長 171?

体重 59?

見た目 スタイルがいい

髪の毛は現実的にいそうな普通の、髪型

色は黒だが、微妙に茶色が入っている。目の色は焦げ茶色

性格 仲間思いで、ちよつとクールなところも入っているキャラ。
父親が自分の入っているモデル事務所の社長なので、無理やりモデルにされた。

だが、仕事はほとんどサボっておりスノークライマーの件があった
その後、事務所が大変な事になり現在休業中。その為、普通の学園
生活を楽しんでる。

学園ではモテていて、親衛隊もあるほど。だが、恋愛感情はなく、
今まで全ての告白を断ってきた。そんな兄に美夏はあきれている。
首のところにはネックレスがぶら下がっており、そこからスノーク
ライマーを出現させる。運動が得意

好きな食べ物 ケンタッキーのフライドチキン

嫌いな食べ物 トマトが入っている料理全て

趣味 散歩

好きな動物 犬類全て

嫌いな動物 特になし

好きなスポーツ 陸上

通ってる高校まだ秘密

誕生日 12月5日

血液型 A型

「……………」

「まあ、普通だな」

「……………」どこが普通だ—————!」「……………」

「え!?俺的には、あつてと思うんだけど。」

「いやそこじゃないし!」

「性格のところまんべんなくおかしいでしょ!」

「……………」うんうん「……………」

「いや、俺的には普通なんだよあれは。」「絶対おかしいよ!」

「吹雪さんってああいいう性格なんですネ……………」(遠い目)」

「まさか、もてるは分かるけど全ての告白を断るなんて……………」

「女心を分かっているのね……………」

「別にいいだろう。恋愛なんて……………」

「そんなんじや、彼女いつまでもつくれないよ!」

「……………」うんうん「……………」

「好みのタイプとかいないのあんた?」

「こ、こ、好みのタイプ!?……………」//////い、

いるわけねえだろ!」

「……………」(怪しい……………)「……………」

「まあ、大丈夫だよ。何話かに吹雪の恋愛感情なしをなくすシーン
をかこうとしてるから」

「おお!!それはいいね!」

「ちなみにその時美夏が暴走するから。」

「なんだそりゃ」

「じゃあ、吹雪のキャラ設定も終わったことだし、次に行きましょうか。」

「次は、美夏ちゃんだよ。」

「楽しみだな!」

千樹美夏

女 12 小6

通ってる小学校 まだ秘密

身長 165?

体重 46?

胸囲 「言えるわけないでしょ!!」

誕生日 6月21日

血液型 A型

見た目 おでこのところをヘアバンドで隠しており前髪が見えない。髪型はポニーテール。色は、明るめの茶色。スタイルがとてもいい。背のでかさのおかげ?目の色は、濃いオレンジ。

性格 元気で明るいキャラ。背のでかさでよく高校生と間違われる。でも、本人は気にしていないらしい勉強もでき、運動も得意。

吹雪の妹で意外に怪力。全速力で走っていき、他人にぶつかるとその人物はすつとんでいくらしい。ちなみに石や地面は割れない。

兄の恋愛感情なしにあきれている。ちなみに、美夏は恋愛感情が多く、誰かの恋を応援するほど。ちなみに今は兄に彼女が出来るか心配してる。当の本人は、彼氏はいらないらしい。

意外に怒ると怖い。

好きな食べ物 エビグラタン

嫌いな食べ物 カレーライス

好きな動物 何でも

嫌いな動物 特になし

好きなスポーツ バスケットボール

趣味体を動かす

「……………」

「まあまあだね」

「「「「どこがまあまあなの――――!!」「」「」」

「ええ!!これすべて本当の事だからいいじゃん!!」

「て言うか、なんで二人して通ってる小学校、高校秘密なの!？」

「だって、バレちゃったら意味ないじゃん。」

「「「「えゝ。つまんなゝい」「」「」

「まあまあ、いつかわかるから。」

「その時までまって。」

「待っててって、いつまで待てばいいのよ!」

「いつかくの?」

「うゝん。20話以降。」

「「「「「襲つ!!!!Σ(□)!!」「」「」「」

「いいじゃん、いいじゃん。ちょうどその時に新たなロボット増えるし。」

「ええ!？」

「残念ながら、ヒントはそこまでゝゝ」

「なんでゝゝ」

「まあ、いいじゃん。長いので次に飛ばす!」

「次はロボット紹介だよ。」

「次回も見てください!!」

「「「「「よろしくね!!」「」「」「」」

第九話 三匹がいく！その1（前書き）

「新しい話です。またまたこなた達の出番はないです」

「アースティア編以来だね」

「まっ、次の話を待ちましょうか」

「では、本編始まります」

第九話 三匹がいく！その1

ここは、何よりも不気味な早乙女研究所……。内部で、早乙女博士がなにやら変なことをぶつぶついつていた。

「やっと、やっと開発した……。だが、操縦できる人物が集まらない……。しょうがない、あいつらに頼むか……。」

つといて早乙女博士はどこかに行ってしまった。
そして、話は切り替わり。

新宿／裏路地

ここで、一人の男が喧嘩をしていた。

「おらあつー！」

ドゴツー！

「グフツー！」

ドサツ……

一人の男のパンチでもう一人の男が倒れた。

「ふん。しつこくつきまとうからわりいんだよ。……
……んで、さっさと見てないで出てきたらどうだ？誰だか知らねえが。」

「男が建物の誰もいないところを睨み付けると、建物の影から男三人に女一人が出てきた。」

「ほお、まさかあそこにいることがバレるとはビックリだね。」
「依頼で言われたときの注意事項そのままの性格ね。」

「んで、なんなんだお前は。」

「私達は変な博士の依頼であなたを捕らえにきたものよ。」

「お町さん、依頼してくれた人をそういう風にいつちゃだめです。」
「いいじゃない。本当に変だったんだから。」

「……………」

「と言うわけで、おとなしく着いてくるなら何もしないがその気がないなら無理やりでもお前をつれていくが、どうする。流竜馬。」

「ほお、俺の名前をしてくれるとはな、それに俺はついていくきなんてないぜ。無理やりつれていくなら力づくできな！」

「やっぱり、おとなしくついてくるきはないらしいすよ。」

「ふっ、では俺の電撃ムチの出番かな？」

「では、私は得意の投げナイフでもやりますか。」

そう言つて、竜馬は構え、髪がもつさりした男はムチをだし、両耳にイヤリングを着けた女はナイフをだし、後の二人の男は後ろに下がっていた。一人はなにかをやっていたが……………。

「では、いくぞー!!」

髪がもつさりした男はムチを竜馬に降り下ろした。

「へっ、甘いぜー!!」

だが、竜馬はムチをかわし髪がもつさりした男の腹をパンチした。

「ぐっ……………」

「ありや、アイザックさんの電撃ムチが交わされちゃったよ。」

「本当に要注意人物だな」

「やるわね、だけどこれはどうかしら？」

そして、両耳にイヤリングを着けた女はナイフを投げた。

「へっ、楽勝だな！」

だが、ナイフはすべて落とされた。

「あらら。」

「お町さんの投げナイフもききませんよ。これはピンチだね。キッドさん。」

「やっぱし、これを持ってきて正解でしたよ。ボウイーさん。」

「へっ、これで終わりだー！！」

そう言つて、竜馬は二人を攻撃しようとしたその時！！

ブスッ！！

何かが竜馬にささったおとがした。

「な、なんだどんどん眠くなってきた……………」

ドサッ！！

竜馬はその場に倒れた。

「ふう、危なかったな。」

「お見事でしたよ。キッドさん」

キッドと呼ばれた男が隙をついて竜馬になにかをしたらしい。

「それにしても、何をやったの？」

「麻酔針をつかったのさ。不意打ちで悪いけど、これも平和的な解決ってヤツさ。」

「さて、早く早乙女博士の元に連れていくぞ」

「急いだ方がいいでしょうね」

と言って、キッド達はその場からたちさった。

第九話 三匹がいく!その1(後書き)

「次、その2です」

「極悪な人達が合う話だね」

「極悪な人達って……………」 (;) 失礼よこなた……………」

「まあ、本当に極悪な人だけだね(笑)」

「月まで!…Σ(□)」!

「では、次の話もよろしくお願いしますm(|)m」

第九話 三匹がいく！

その2（前書き）

「今回はその2です……」

「あれ？作者さん。なんか落ち込んでるね。」

「どうかしたの？」

「……………後書きで教えるよ」

「……………」

第九話 三匹がいく！

その2

早乙女研究所／内部

「早乙女博士、流竜馬を連れてきました。」

「おお、さすがだな。依頼した甲斐があつたわ。」

「ところで、報酬はいつくれるんですか？」

「なに、そんなに急ぐな。ちゃんと後でやるわい。」

早乙女博士とアイザック達が話していると、二人の男と、白衣をきた助手見たいな女が入ってきた。

「早乙女博士、もう一人は来たのか？」

「ずいぶんと長かったな」

「……………」

「おう、お前らか。安心しろ、もう一人はちゃんと来たぞ。」

「早乙女博士、この人達は？」

「この二人の男は、こいつと同じ『ゲッター』に乗るパイロットだ。」

「

「神隼人だ」

「俺は武蔵坊弁慶だ」

「では、こちらのお美しい女性は？」

「こいつは、わしの娘で助手のミチルだ。」

「早乙女ミチルです」

「（似てない親子ね…）」

すると、アイザックが抱えていた竜馬が目覚めた。

「う、うゝん。おわ！！！！！どこだ、ここ！！！」

「やっと、起きたか。流竜馬。」

「あ？なんだ、じじい。やるのか？」

「ふっ、その気の強さ実に『ゲッター』に乗る資格はあるな。」

「『ゲッター』？なんだそれ。ていうか、ここはどこなんだよ！！！」

「ここは、早乙女研究所。お前は、『ゲッターロボ』のパイロットとしてここに来たのだ。」

「来たくて、来たんじゃないねえ。無理やり連れてこられたんだ！！！」

「おい、博士。ホントにこんなやつを、メインパイロットにするのか？明らかに失敗すると思うぞ。頭が回らないと思うな」

「てめえ、喧嘩うつてんのか！？」

「俺は本当のことを言っただけだ。」

「なに！！！！！！！！！」

「あゝあ。パイロット同士喧嘩したら意味ないんじゃないの？」

「信頼関係がなくなつて、乗れなくなりますね。絶対」

「でも、分かりませんよ」

「こんなんで、本当に大丈夫なのですか。早乙女博士」

「安心せい。絶対に失敗はなかつ」

「俺にとつては不安だがな」

すると、

ビーッ！！ビーッ！！ビーッ！！

突如、警報が鳴り出した。

「父さん、大変！！！鬼どもが研究所の中に入ってきたわ！！」

「やはり、狙いはゲッターか……………」

「鬼？なんだそりゃ。○太郎でもあるまいし。」

「ちようどいいな。おい、竜馬、隼人、弁慶。ゲッターに乗るのだ！！」

「は？なんだそりゃ、誰が乗るか！！」

「博士、ゲッターはどこにあるんだ？」

「ゲッターは、研究所の地下室にある。だが、ゲッターロボは合体しなくてはならない。まあ、合体とは言えないと思うが…。とにかく、分裂しておるから赤には、竜馬。白には、隼人。黄色には、弁慶が乗れ」

「よし。ならさっさと言った方がいいな。」

「ざけんな！！俺は行かねえぞ！！」

隼人、弁慶は乗る気だが、やっぱり竜馬は乗る気がない。すると、

「竜馬、今まで随分とつまらない喧嘩をしてきたのだろう？」

早乙女博士が竜馬にそう言ってきた。

「まあ、そうだな。全然、てこだえのないやつらを相手にしてきたからな」

「ふっふっふっ、ゲッターに乗れば今までの相手と全然ちがう相手と戦えることができるぞ。」

「本当かよ！？ジジイ！！」

「ああ、本当だ。さあ、ゲッターに乗ってくれるか？」

「へへ、乗ってやるよ！！ゲッターによ！！」

「なら、覚悟は出来ているな。隼人、竜馬も連れていけ。」

「ああ。さて竜馬、今から俺らが戦う相手を見せてやる。」

そう言つて、隼人と弁慶はろうかに出ていった。

「あ！おい待ちやがれ！！」

竜馬も後を追つていった。

そして、残されたメンバーは、

「早乙女博士、随分と卑怯なてを使いますな。」

「ああ、言わなければあいつは絶対のらなかつたろう。こういつてを使わなければな。ところで、J9の諸君、君達にも出撃してほしいのだがよろしいかな？ゲッターのサポート役としてな。」

「だ、そうだ。どうする、俺は別に構わんのだが。」

「ぼくちゃんは別にいいですよ」

「私も別にいいわ」

「俺も」

「よしっ、早乙女博士。出撃しても大丈夫です」

「ふっ、ありがたいな。」

「あ！でも、ちゃんと報酬あげてね。」

「かまわん。報酬ぐらいちゃんとあげるわい」

「そうこなくっちゃ」

つづく

第九話 三匹がいく！

その2（後書き）

「で、なんで落ち込んだのよ。」

「実は、新しいクラスが嫌な人と一緒になってしまったのだ…」

「あらら……………」

「それだけじゃない、そうとう視力が落ちてた」

「あゝあ。」

「はあ……………」

「作者が復帰できそうにないので、あたし達で進めます」

「次回は、ロボットに乗るよ！！ついでにバトルありのその3だよ

！！」

「次回もよろしく！！」

第九話 三匹がいく！

その3（前書き）

「もしかしたら、バトル編が遅いかも」

「やっちまったね」

「いつもなら早いのにね」

「まあ、気にしない、気にしない」

タツタツタツ……………

早乙女研究所の廊下を走っていく、竜馬達。しばらく走っていくと、隼人がとまりだした。それにつられて、竜馬と弁慶も止まった。

「なんだ？ なにかあったのか？」

竜馬が聞くが、隼人はそれに答えようとしない。ただ、目の前をずっと見ているだけだ。目の前には何もいない。曲がり角があるだけ。すると、

「……………くるぞ。」

隼人が言い出した。何が来るか分からない竜馬達は焦ったが、今の一言で何者かが来ているのが分かった。そして……………

「グルアアアア！！」↑ 鳴き声？

鳴き声？ と共に青い色の鬼がやって来た。

「やっぱり来やがったか。」

「なんだ？ こいつら。鬼みたいなやつだな」

「こいつらが俺達と戦う奴らだ。」

「ほお。わざわざ向こうから来てくれるとはな、けっこう倒しがいがありそうな奴らだな。」

「こいつらを倒さなくてはゲッターの元に行けんな。どうする気だ

？」

「もちろん、倒すに決まっているだろ。」

「へっ！一発で倒れるなよ、鬼ども！」

竜馬と隼人は戦闘体勢に入り、鬼達に攻撃（はつきりいうと攻撃と言えない（笑））？をしていった。弁慶はさつきから、念仏見たいなものを唱えているだけだが……… いったい役にたつのか？

竜馬は殴って、蹴って鬼どもを倒していく。隼人も同じだが、たまにそおいなげをしてる。弁慶は相変わらず念仏を唱えている……… 。だが、いくら倒しても鬼はどんどん増えていく。最終的には、三人だけではヤバイほどの数となってしまった。

「くそっ、多すぎるんだよ！！」

「このままではゲッターのところまで行けないな」

「ブツブツブツブツ………」

「弁慶！！てめえ、念仏ばかり唱えていないで少しは手伝いやがれ！！」

「ブツブツブツブツ………」

「……… まったく、聞いていないな」

「………」

と言ったその時！！

ドッゴーン！！……！！

「「！？！？！？！？」」

突如、爆発がおきた。見ると、鬼どもがすべて倒れているではないか！

「な、なにが起こったんだ？ま、まさか弁慶がなんかやったのか！？」

「いや、弁慶は今の爆発に驚き真っ白になっている。となると、ちがうやつらがやったと思うな。」

「……………（真っ白）」

すると、後ろから聞いたことがある声が聞こえてきた。

「いや、今のはいい感じでしたね」

「ほんとね、気持ちがスッキリしたわ」

「相変わらずな奴らだ……………」

「おや、そこにいるのは、ゲッターのパイロット達ではないですか」

振り向くと、その1で竜馬を倒した？J9チームがやって来た。
なぜか、キッドはバズーカを持っていたが……………。
ちょうど見たことある顔だった、竜馬は叫んだ。

「てめえら、あの時の奴らじゃねえか！！」

「おや？どこかで会いましたっけ？」

「会いましたよ、キッドさん。研究所で」

「ああ、そう言えばそうでした。」

「とぼけんじゃねえ！！違うところで会っただろ！！あの時はよくも……………」

「どうするの？なんか、ばれっちゃったみたいだけど。」

「今はそれどころじゃないな。また、鬼どもが増えるだけだ。君達

3人は早くゲッターの元にいきたまえ」

「なんだと？」

「そうそう、鬼どもがふえちゃってせつかくのチャンスがなくなるわよ」

「早くいったほうがいいと思いますね」

「そう言えばそうだったな。おい、竜馬、弁慶行くぞ。」

「なんでだよ！！まだこいつらに、あの時の仕返しを……………」

「……………」

「そんなのはどうだっていい！！！！！！行くぞ！！」

そして、隼人は弁慶のはうを見た。

「弁慶！！気絶している場合じゃねえぞ！！早く現実に戻ってこい

！！」

「……………」

「……………はっ！！俺はいたい……………」

「よしっ！！戻ったな！それじゃあ、ゲッターのところに行くぞ！

！」

「チッ！しょうがねえ、勝負はおあずけだ！！」

「お、おい！！待ってくれよ！！」

竜馬達は、走り去っていった。

「……………いきましたね。」

「ですね」

「んで、あたし達は出勤しなくていいの？」

「まだ、ゲッターが発進していないから無理だ」

「なんだ、残念」

「とりあえず、こいつらを倒しますか」

「賛成ですね」

「あたしも」

「では……………行くぞ！！！！！！」

研究所／地下室

研究所の地下室にやって来た竜馬達。ここどこかに、ゲッターがあるはずなのだ。だが、

「見あたらねえな」

「本当にここにあるのかよ」

「ああ、地下室にあるのは間違いない」

そして、隼人はなにかを見つけた。

「ん？もしかしてあれが、ゲッターか？」

隼人の指が指した方を向くと、赤い色のロボットが地下室の真ん中に大切に保管されていた。竜馬達は近づいた。

「これが、ゲッターか」

「こんなので、三人乗れるのか？」

「いや、乗れるだろ」

「でも、これどうやって動かすんだ？」

「言われてみればそうだな。」

「なにもいつてくれなかったからな、早乙女博士」

だが、竜馬が手をかざしたその時！！

ピカア！！！！！！！！？？？

突如光が溢れだした。

「な、なんだ!？」

「まさか、発進するのか!？」

「ていうか、これ原作とちがうだろ!?!?!」

あれこれいつている、竜馬達はほっとき、光は竜馬達を包み込み消えた。

第九話 三匹がいく！

その3（後書き）

「原作と違ってる絶対」

「うん」

「違っていたわね」

「じかいはバトル編です」

「感想よろしくね!!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5740q/>

スーパーロボット大戦NEO O G

2011年10月8日17時22分発行